

「それでは韓信もとう／＼逃げてしまったのか、いまの世に、ああいふえらい人物を失つては、この國を起すことが出来ない。どんなことがあつても後を追つかけて、かへつてもらはなければならぬ。」と、朝飯も食はずに家來の者五六人と馬に乗つて後を追つかけてました。

城の東門へ来て門番にきいて見ますと、それらしい人が夜中ごろに通つて、もう五十里も先に行つたらうといふことでした。それで蕭何はいよ／＼馬を早めました。道であふ人があると、一々やうすをたしかめます。晝ごろになると、人も馬もおながすいてこまつてしまひました。それで已むを得ず、あゝる百姓家へ入つて食事をしました。食事が終るとすぐ馬に乗つて、また韓信の後を追つかけてました。

その日の夕方、やつと寒溪といふ川のほとりまで來ましたが、韓信のかけもかたちも見えません。時は七月のなかばで、まだ月も出ず、あたりはぼんやりけむつてゐました。水面を見ると、このごろの長雨に水かさが増えて、渡ることも出来ません。

困つてゐると、やがてほんのりと月が出て來ました。月の光であちらこちら淺瀬をさがしてゐると、はるか川下の方で馬のいな／＼く聲が聞えました。蕭何は、

「あれは韓信にちがひない。」

と、喜び勇んでその方へ馬を向けました。やがて人のすがたが見えるやうになつたので、蕭何は大聲で叫びました。

「將軍、あなたはわたしを見捨てて行かれるのか、一月あまりのへだてのない交りに、一言の言葉もか

けずに行かれるのか。」

近づいて見ますと、それは果して韓信でした。韓信も、蕭何がこゝまでしたつて來たことを心に感じて、しばらく馬を立ててゐたのでした。蕭何は大變喜んで、

「どうぞ今度だけは引き返して、蜀のためにつくして下さい。」と頼みました。

そのうちに、また馬のひづめの音が高く聞えて、誰か追つかけて來る者があります。見るとそれは夏侯嬰でした。これも韓信に逃げられては大變だと、朝飯も食はずに馬を走らせて來たのです。そして馬のいな／＼きと蕭何の聲を聞いて、大喜びでかけつけたところでした。蕭何は涙を流して、

「あなたも將軍の後を追つて來たのか。」といひました。

「さうです。私も今朝將軍の去られたことを聞いて、蜀のためにどうしてもかへつていたゞかうと、馬をとばして來たのです。あなたが早くも將軍を止められたのでうれしい。」

三人は月の明るい寒溪の川のほとりに顔見合せて、しばらくは言葉もありませんでした。韓信は二人の親友の眞心に感じて、再び漢王に仕へることをちかひました。やがて三人は馬をそろへてかへりました。

このころ漢王に仕へてゐる人の中に、蜀の地が不便であつたり、國に勢がなかつたりするので、そつと逃げて行く者がいくらもありました。それを心配してゐた漢主が、今朝蕭何が逃げたといふうはさが傳はつたので、がっかりしてはらくと涙をお流しになりました。

「たとへ誰が逃げて、蕭何だけはわしと共に時の來るのを待つてゐてくれるものと思つてゐたのに、その蕭何さへも逃げてしまつたのか。それではこの蜀の國に何ののぞみもなくなつた。」と、大變おなげきになりました。

その日も暮れてつぎの日が來ました。漢王はもう食事をする力もなくなつてゐました。すると一人の家來がとんで來て、

「たゞいま蕭何がかへりました。」

と申し上げました。漢王が喜んだりおこつたりしていらつしやるころへ、まもなく蕭何がかへつて來ました。漢王は蕭何のすがたを見るより早く、

「蕭何、お前はこれまでわしと苦しみを共にして、少しもはなれることがなかつた。部下の諸將に逃げる者があつても、それは利によつて集まつたり、已むを得ず降参した者などであるからしかたがない。けれども、お前に逃げられるやうになつてはわしののぞみもこれまでだ。」とおつしやいました。

「いえ、私は逃げたのではありません。實は逃げた者を追つかけたのでございます。」

「その逃げたといふのは誰だ。」

「はい、韓信でございます。」

韓信と聞いて漢王は笑ひ出しました。そして蕭何をにらみつけ、

「それはうそだ。やはりお前は逃げたのだ。これまでもずぶん勇將の名のある者が逃げたぢやないか。お前はそれを追つかけたことがないのに、あの韓信を追つかけるはずがない。」

とおつしやつて、蕭何のいふことをなかく信じません。それで蕭何は言葉をあらためて申し上げました。

「いえ、前に逃げた大將などは取るに足らない者ばかりです。けれども韓信は、王様をたすけて天下を定める大人物です。王様がもし蜀の國で老いくちようとおぼしめすなら、韓信を逃がしてもよいかも知れません。しかし、このみだれた天下を治めようとおぼしめすなら、韓信を用ひなくてはなりません。王様がどうしても韓信を重く用ひようとなさらないなら、私も御役をやめて故郷へかへり、他日敵のためにとりことなる恥をのがれようと思ひます。」

この時そばにゐた夏侯嬰は、

「たゞいま蕭何のいはれたことは、國家のために韓信をおすゝめするので、私のことではございません。どうぞこの忠言をおきき入れになつて、韓信を重くお用ひ下さい。」と、真心こめて申し上げました。

そこで漢王は、これまで蕭何が何へんすゝめてもどうかと思つてゐたのを、今度こそは思ひ切つて韓信を用ひようとお考になりました。そして

「それほどお前たちがすゝめるなら、まづ一方の大將にして見よう。」とおつしやいました。蕭何は頭をふつて、

「いゝえ、一方の大將ぐらゐでは、韓信のほんとう力をあらはすことは出来ません。大將軍になさつて、全軍をおあづけにならなければだめです。」

といひました。漢王は蕭何がこれまでに心をこめていふものですから、

「よろしい。それでは大將軍に任じよう。明日にも韓信を呼び出せ。」

とおつしやいました。すると蕭何はしばらく漢王を見つめてゐましたが、

「はゞかりながら申し上げます。王様は人を見ることが人を尊ぶことを御存じありません。かりにも大將軍たる人をお用ひになるのに、さうかるゝしくなるものではありません。目をえらび式場を設け、物いみをしてむかへなければなりません。それでこそはじめて部下もその大將にしたがつてはたらくのです。韓信はこの國を救ふ人です。」

と、真心こめておいさめ申しました。それで漢王もこの言葉にしたがふことにしました。

四

蕭何はさつそく城外の廣場へ、大將軍をむかへる式場を作らせました。すると大變な評判です。

「漢王は大將軍をむかへるために式場を作らせたといふが、誰がその大將軍になるのだらう。」

「樊噲かな。」

「周勃かも知れないよ。」

「いや、曹參だらう。」

人々は、この三人の大將の中で、誰が大將軍になるのだとばかり思つてゐました。

いよく用意が出来ますと、漢王はたくさん家來をつれて蕭何の屋敷へお出になり、韓信と同じ車にお乗りになつて式場にいらつしやいました。この時馬に乗つて漢王にしたがつて行つた樊噲や周勃や曹參などは、案外にも大將軍になる者は韓信であつたので、たがひに顔を見合せて驚きました。中でも氣の早い樊噲は、馬からとび下り車の前にふさがつて、大聲をあげて申しました。

「王様、しばらく御車を止めて、わたくしの申し上げることをお聞き下さい。どういふおぼしめしかは知りませんが、もとかからお仕へ申してゐる人々を差しおいて、名もない韓信などを大將軍にするとは、お心ちがひもはなはだしいと思ひます。お聞きでもございませうが、韓信はその昔食へることにさへ困つて、せんたくに來たおかみさんに養はれたといふ話です。そればかりではございませぬ。人のまたをくゞつて恥をも恥と思はない者です。そして、ふだん大きなことばかりいつてゐる山師ですから、どこへ行つても相手にする者がなかつたのです。そんな者を大將軍になさつたら、誰も命令にしたがつて戰場ではたらく者はなくなります。」

漢王もこれには困つてしまいました。しばらくだまつていらつしやるところへ、蕭何がかけつけました。そして

「樊噲、お前は何をいふのだ。戦場で敵を破ることはお前に出来ても、はかりごとをめぐらしてお前たちを勝たせることは、韓將軍のほかには誰も出来る者はない。少しばかりの功をかさにきて無禮なことをいふな。」

と、決死の勇をふるつて樊噲を叱りつけ、漢王に向つて、

「早く樊噲をしばつて獄に入れさせて下さい。そして式が終つたら首を斬つて、國の法を正して下さい。」と申し上げました。そこで漢王はすぐに樊噲をしばらせ、そのまま式場へ車をお進めになりました。このやうすを見て、不平のあつた人々もすつかり恐れてしまつて、おとなしく行列にしたがひました。

車が式場につきますと、漢王は韓信をみちびいて高い三重の壇にのぼりました。壇のまはりには、たくさんな兵士が五色の旗を持つてならんでゐます。やがて漢王はおごそかに韓信を大將軍に任じました。式場に集まつた人々は、萬歳をとなへて大將軍をむかへたよろこびの聲をあげました。

韓信はかうして大將軍に任ぜられましたが、蕭何の見こんだ通り戦の上手なこと神様のやうで、その上よい者をほめわるい者を罰することが正しく行はれたので、間もなく全軍が手足のやうにはたらくやうになりました。漢王も大變およろこびになりました。樊噲もその無禮をゆるされ、韓信の部下になつてはたらくやうになり、蜀の國の勢は日増に盛になりました。（支那童話集による）

第尋
六常
學小
年學

國
史
科

佐藤保太郎

(期前) 次 目

第三十三	織田信長	一
第三十四	豊臣秀吉	六
第三十五	豊臣秀吉(つゞき)	一三
第三十六	徳川家康	一八
第三十七	徳川家康(つゞき)	二三
第三十八	徳川家光	二八
第三十九	後光明天皇	三三
第四十	徳川光圀	三七
第四十一	大石良雄	四一
第四十二	新井白石	四七
第四十三	徳川吉宗	五一
第四十四	松平定信	五六
第四十五	本居宣長	六一

序

國史教育の目的は大體教科書によつて過去から現代に至る史實の大要を授けると共に、その意義を鮮明にして日本的な感情と意志を陶冶し、以て忠誠、有爲の活動をなし得る國民を養ふにある。而して、國史構成の要素は人物、時代、場所史實、原因、結果の六項であるが、國史の中心をなすものは、何と云つても人物の活動であるから、偉人の活動の動機となつてゐる思想、感情に觸れしめ、又、人物の背景をなす時代精神を考へることが必要である。また、史實には必ず發生した場所があるし、これを起した原因があり、將來に何等か影響を及ぼすものであるから、これ等の點を考慮して指導すべきである。

本書はこの意味の徹底をはかり、且つ、最も效果的なものとして案出されたものである。即ち、各課の初めに要旨を置いて、その課の主眼を明かにし、次に、準備として教材取扱上必要缺くべからざる歴史地圖、繪畫、寫眞、遺物等の直觀物をあげ、然る後に教授事項に移り、こゝでは教科書を最も有效ならしめる爲に、各箇所にて内容の敷衍を試み、最後に参考資料の項を設けて、重要教材を詳細に解説し、或は補充教材を載せることとした。上段の學習指導過程では、各課指導の月と週及び時間の區分を明かにし、各時間に於ける教材指導上の系統をあげて教育の効果を大ならしめようとしたのである。指導者はこれによつて能率を發揮し得れば誠に幸である。

四月 一週—二週

學習指導過程

第一時

一 戰國時代の諸英雄の志

上京して天下に號令せんとす

二 信長が初めて目的を達した理由

1 地の利を占めてゐたこと

2 留守を襲はれる心配が少なかったこと

三 信長の生立

1 家系について

先祖は

父は

2 代々の居住地は

第三十三 織田信長 (三時間)

要旨

織田信長の生立ち及び事業を通して、天下統一の氣運に向ひつつある時代を知らせると共に、一般に皇室尊崇の念が著しく高まつて來たことを理解させるにある。

準備

日本全圖、中部、近畿地方地圖、中國地方地圖、桶狭間附近地圖、足利氏の系圖、織田信長の肖像、本能寺變の繪、安土城の繪、建勳神社の寫眞。

教授事項

戰國時代(大體應仁の亂以後の亂世凡百餘年間)に於て、諸國に起りたる英雄(上杉謙信、武田信玄、今川義元等)は、多く京都に上りて天下に號令せんと志せしが、いづれも之を果さざりしに、(上杉、武田は相争ひ、今川は信長に敗られて)織田信長出でて始めて其の目的を達し、殊に朝廷を尊びて忠勤をはげみたり。

一 信長の生ひたち

信長は平重盛の子孫(重盛の子維盛の後、重盛から二十世)なりといふ。其の家代々尾張にあり、(斯波氏)父を信秀(のよひ)といひ、勇武にして(主家の衰ふるや之を滅ぼし)しばしば兵を近國に出して領地を廣めたり。信長は幼き時よりあ

- 3 幼時の性行
平手政秀の諫死
- 4 政秀寺を建てた精神

- 四 今川義元の西上
- 五 桶狭間の戦に就て
- 1 義元戦勝を誇る
- 2 信長の決心
- 3 義元を斬る

- 六 信長の威名揚る
- こゝで徳川家康は岡崎に歸つて獨立したことを附説

第二時

- 一 信長美濃を平定
清洲から岐阜に移る
- 二 正親町天皇の勅を拜す
- 1 勅使立入宗繼の東下
- 2 信長の感激
- 3 日夜西上を急ぐ

らくしきふるまひ多く、家をつぎても武術のみ(武藝の外、鷹狩)を事として政をかへりみず、家臣平手政秀これを憂へ、度々諫めたれども聽かれざるにより、書置(五箇條)して自殺せり。時に信長二十歳なりしが、深く其の忠義に感じ、これより心を改め行をつゝしむに至れり。(前非を悔つゝしみ政治)後信長政秀寺(今は名古屋市)を建てて、ねんごろに政秀をとむらひたり。(是非には必ずはげんだ) (矢場二の切)を建てて、ねんごろに政秀をとむらひたり。(是非には必ずはげんだ) (矢場二の切)を建てて、ねんごろに政秀をとむらひたり。(是非には必ずはげんだ)

二 桶狭間の戦

此の頃駿河に(府中(今の静岡)が)今川義元(義元の祖父義忠の時から勢力あり)あり、はやくより信秀と相争ひしが、遠江・三河の二國を従へたれば、更に織田氏を滅して京都に上らんとし、(皇室を奉じ、よう)三國の兵四萬五千を率ゐて(永祿三)尾張に攻入れり。(豊津、丸根二城を陥)たまゝ信長は清洲(名古屋)の城中に家臣と夜話にふけりたりしが、此の報(報知)を得て、少しも驚く色なく、なほ談笑をつづけたり。翌朝(五月初)味方の壘危しと聞くや、たゞちに馬を走らせてうつて出づ。(主従六騎で城を出たが、熱田で三百餘人、熱田神宮)然るに義元は、既に諸城(既述の豊津、丸)を取りて氣あごり、桶狭間(實は田樂狭)に陣して、將士と共に酒宴を開きたり。信長の兵は僅かに二千に足らざれど、(二千の兵を率ゐ、間)をりからの暴風雨に乗じて、(義元陣の北西太)急に義元の本陣にうち入り、其の軍のうろたへ騒ぐ間に、遂に義元を斬る。(服部小平太槍でつ)時に義元は四十二歳にして、信長は二十七歳の壯年なりき。こゝに於て信長の威名忽ち四方にあらはれたり。(その後、美濃の清洲山を陥れ、こゝに移つて岐阜と改めた) (藤道三を滅ぼし)

- 三 足利義昭、信長に頼る

- 四 信長の上京
- 1 近江を平ぐ
- 2 入京、市民を安んず

- 五 義昭將軍となる
- 六 信長の勤王
- 1 御料地を回復
- 2 皇居の御造營
- 3 獻金
- 4 伊勢神宮の造營
- 七 足利將軍亡ぶ

- 1 義昭、信長の威名を忌む
- 2 義昭、信長を討たうとす
- 3 信長に河内に追はる
- 4 十三代、百八十餘年で滅亡

第三時

稻葉山城を陥れ、こゝに移つて岐阜と改めた。

三 信長勅を拜す。

第六代正親町天皇は、常に朝廷の衰へたるをなげきたまひ、如何にもして天下の亂を鎮めんとす御志あり。はるかに信長の武名を聞召し、(永祿十年十一月、立)御料地(尾張、美濃)を回復すべきことを勅し、天下にならびなき名將とほめたまふ。信長もとより勤王の志深く、勅を拜して感涙にひせび、一身をさへげて御心を安めたてまつらんと決心せり。

四 信長の勤王

時に幕府(足利)もまた其の勢ますゝ衰へて、將軍義輝部下に(永祿八年、家)害せられ、弟義昭逃れ來りて(永祿十一年七月)助を信長に求む。信長すなはち義昭を奉じて(近江の六角承)京都に入り、將軍の職(十月、征夷大将)に就かしめたり。これより信長は皇居を修理し、(永祿十三年四月)御費用を獻じ、(入京の時錢萬匹を獻じ、)専ら朝廷の御爲に盡せしかば、久しく絶えたる御儀式(元日の節會)も再興せられ、諸國に逃げわたる公卿もあひく歸り來りて、京都はやうやくもとの有様に立ちかへり。

五 足利將軍亡ぶ。

それより信長は次第に近畿の諸國を平げ、(永祿十二年、南伊勢を平げ、元龜)土民をあはれみて、其の

- 一 信長安土城を築く
 - 1 築城の理由―位置
 - 2 規模の大なること
- 二 中國經營
 - 1 毛利氏の勢力
 - 2 羽柴秀吉の出征
 - 3 秀吉の苦戦援兵を請ふ
- 三 本能寺の變
 - 1 明智光秀の先發
 - 2 信長本能寺に宿る
 - 3 光秀、信長を襲ふ
 - 4 信長の自殺
- 四 信長の勳功
 - 1 信長の事業を回顧
 - 2 信長の勤王
 - 3 太政大臣、從一位を賜ふ
 - 4 建勳神社

名いよ／＼高くなりしかば、義昭遂には己が將軍の職を信長に奪はれんことを恐れ、之を除かんとするに至れり。(東は淺井、朝倉、西は毛利の諸氏及び本願寺と結んで)信長怒りて義昭(二條城)を追出し、(河内に追ひ、官を削つた。)足利將軍ここに亡びたり。時に紀元二千二百三十三年(天正元年)にして、義滿が將軍たりしより、こゝに至るまで(代十三)凡そ百八十餘年を経たり。

六 信長安土城を築く。

かくて信長は城を近江の安土(琵琶湖岸の丘陵上)に築きしが、(天正五年完成)七重の天主閣雲にそびえて壯麗を極めたり。信長こゝに據りて四方を定めんとし、先づ(天正五年)其の將羽柴秀吉を中國地方に遣はして毛利輝元を攻めしむ。(備中高松城を圍み苦戦した。)既にして(天正十年)信長、秀吉の請により自ら中國に向はんとし、明智光秀等(明智光秀、池田信輝を先鋒として)を先發せしめ、ついで京都に入りて本能寺に宿れり。

七 本能寺の變

然るに光秀は、かねて其の主を怨めることあり。たま／＼本能寺の備なきに乘じ、俄にそむきて來り襲ふ。(居城龜山を發し、六月二日朝京都に入る)信長自ら森蘭丸(信長の寵臣)等と共に奮戰して之を防ぎしも、かなはず、遂に火を放ちて自殺せり。時に天正十年にして、年四十九歳なりき。

八 信長の勳功

信長さきに勅を拜してより、専ら天下を平けて叡慮を安んじたてまつらんとせしが、其の業ま

さに成らんとして、忽ち逆臣の手にたふれたるは惜しむべし。朝廷その勳功を賞して、特に太政大臣從一位を贈りたまふ。京都の建勳神社(明治八年、別格官幣社。上京區紫野北船岡町に在る。信忠をも配祀してある。)は信長をまつれるなり。

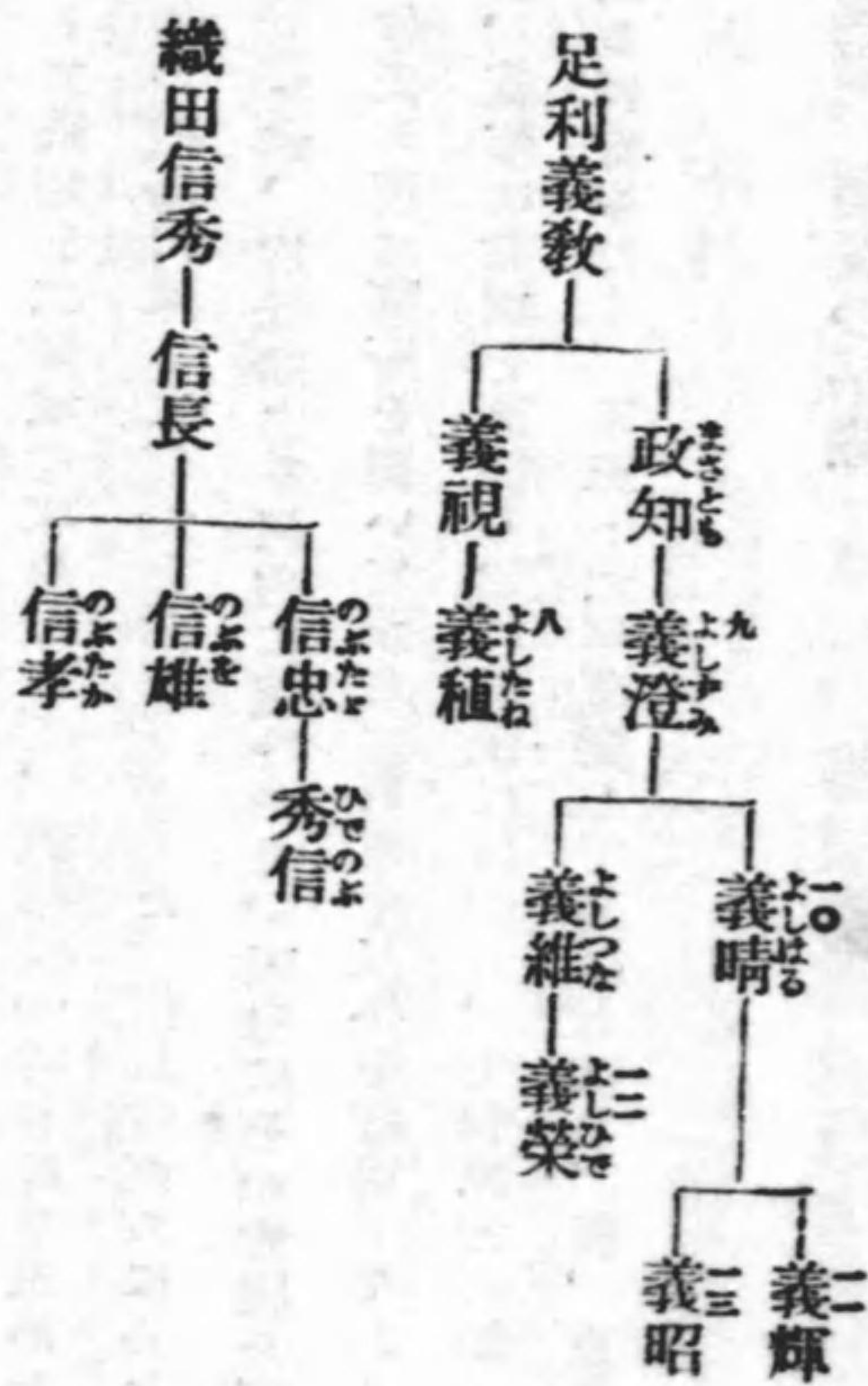
參考資料

一 足利氏の滅亡

足利義昭と織田信長とは兩立し難い位置にあつた。義昭の意志は將軍家再興であり、信長の意志は皇室を中心として天下を統一しようとするにあつた。そして義昭が將軍に成つたのは全く信長の恩恵であつて、諸將がその命を奉ずるのは義昭を崇めるのではなく、信長を恐れるからであつた。義昭は轉々苦勞した男だけあつて小才のきく性質であるから信長を忌み次第に相反目するに至つた。信長は義昭の失行十七ヶ條を指摘し書面で諫めた。義昭は表面之を容れたが、内心益々かたくなかつた。そこで天正元年正月には謙信や信玄、さては淺井、朝倉に密使を送つて信長を夾撃することを命じた。信長は上京して義昭を二條城に攻めたので、義昭は一時和睦を求めたが、七月再び義昭は兵を擧げ一部の兵を二條城に止め、自ら宇治の横島に陣して信長を討たうとした。信長は直ちに兵を率ゐて京都に入り、二條城を破り、横島も陥れた。義昭は降参したが、信長は之を河内に逐ひやり、天皇はその官職を剝奪された。時は天正元年七月十八日紀元二千二百三十三年、尊氏が擅に幕府を開いてから二百三十五年を経過してゐる。義滿を第一代として數へれば義昭は十三代目に當る。その後、義昭は諸國を流浪し遂に備後に行つて、毛利輝元に頼んだ。輝元は一時之を禮遇したが、羽柴、毛利の和睦後は世に出る機會もなく、天正十六年薨愛して昌山と號し、後、京都の室町の故第に住み、慶長二年六十一歳で大阪に於て歿した。

二 義昭、信長の系圖

第三十三 織田信長



第三十四 豊臣秀吉 (四時間)

要旨

豊臣秀吉が明智光秀を滅ぼし、信長の遺業を繼承して國內を平定した事蹟を明かにし、特に皇室を尊ぶべきことを天下に知らせた偉人の心情に感銘させるにある。

準備

中部、近畿、中國、關東各地方地圖、秀吉の肖像、高松城水攻の繪、清洲會議の繪、聚樂第行幸の繪、大阪城平面圖及び寫眞、小田原攻略圖。

教授事項

四月—五月
二週—三週—四週

學習指導過程

第一時

一 秀吉の生立

1 幼時

2 十六歳の時立志

3 松下之綱に仕ふ

二 織田信長の部下となる

1 忠實に勤む

一 秀吉の出世

- 2 大名に出世
- 3 羽柴の姓について
- 三 秀吉の出世について反省

第二時

一 高松城の水攻

1 信長の中國經營

2 秀吉毛利氏征伐を命ぜらる—信長の信用

3 秀吉の進軍

4 高松城の位置

守將—清水宗治

5 水攻めにした理由

6 毛利輝元が和を請ふた理由

7 和議の條件

8 秀吉の許さなかつた理由

9 俄に和睦した理由

二 本能寺の變

三 明智光秀を滅す

二 光秀を滅す。

豊臣秀吉は、尾張(尾張の)の貧しき農家に生る。八歳にして父(木下彌)を失ひ、(彌は筑阿寺(光明)に)入れられしが、僧となるを好まず、専ら武事に心がけ、常に勇士の物語を聞くことを喜べり。十六歳の時(志を)遠江に行きて(途中木下彌の針)松下氏(遠江久能の城)の僕となりしが、後(十八歳)尾張に歸りて織田信長に仕へ、木下藤吉郎秀吉と名のれり。はじめは草履取となりしかど、少しの油断もなく忠實に勤めしかば、おひ／＼重く用ひられ、遂に部將となりて度々戦功を立てたり。(美濃齋藤氏、近江の淺井氏等と戦つて)こゝに於て信長の勇將丹羽長秀・柴田勝家の姓を一字づつ取りて、己が姓となし、羽柴筑前守秀吉と稱せり。

信長の中國を平げんとするや、秀吉命を受けて先づ(五年)發し、次第に諸城を陥れ、(播磨に入り上)姫路城をとり更に但馬、因(遂に進みて毛利氏(輝元)の部將清水宗治を備中の高松城に圍み、川(足守川)をせきとめて之を水攻にす。をりからの五月雨に水みなぎりて、城まさに沈まんとするも、宗治なほ屈せず。輝元大軍を率ゐて來り、之を救はんとせしが、其の敵すべからざるを察して和を求め、己が領地のうち五箇國(備後、備中、出)を譲りて、城中の將士を助けんことを請ふ。されど秀吉これを聽かさざりしより、宗治は身を以て士卒の命に代らんとし、城より小舟を乗出して、

- 1 本能寺の變後の處置
- 2 山崎の合戦
- 3 主君の弔合戦に成功

敵の面前に自刃し、和議はじめて成れり。此の和議中たま／＼本能寺の變報達せしかば、(天正六月三)和成るや、秀吉ただちに軍をかへし、光秀を山城の山崎に伐つて(六月十)之を滅せり。(光秀は逃がたが京都の南東小栗)本能寺の變を去ること僅かに十一日。秀吉の機敏なること實に驚くべし。

三 勝家を滅す。

- 4 信長の後嗣を定む
- 5 信長の葬儀を行ふ
- 1 信長の部將の態度
- 2 秀吉信長を厚く葬る
- 3 秀吉の信望高まる
- 一 反秀吉の運動
- 1 柴田勝家秀吉を忌む
- 2 勝家、織田信孝、瀧川一益と結ぶ
- 3 秀吉を除かうとし

時に信長の部將は多かりしも、いづれも其の機におくれしに、秀吉獨り遠方よりはせかへり、諸將に先だちて主の仇を復し、又厚く信長の葬儀を行ひ、(十月に獨力で信長の葬儀)上下の信用を得て、勢俄に盛になりたり。柴田勝家等(勝家は瀧川一益)これをねたみ、兵を擧げて秀吉を除かんとせしが、(勝家は加賀にゐたが大兵を率)秀吉これを近江の賤嶽に破れり。此の時秀吉の部下加藤清正・福島正則・片桐且元等七人(この外加藤嘉明、平野長)の勇士槍をふるつて功名を立てしかば、世に之を賤嶽七本槍といふ。それより秀吉は、勝に乗じて越前にうち入り、勝家を攻滅し、(北(福井)に退き城に火)前田利家等をして北國を鎮めしむ。(尾山城(金)こゝに於て織田氏の部將は、皆秀吉の命を聽くに至れり。)

四 大阪城を築く。

かくて秀吉は、堅固なる城を大阪に築けり。(天正十一年十一月起)此の地、東と北とに大河をひかへ、西は海に臨み、便利にして要害なれば、(東西二十町、南北十八町、周圍三)秀吉はこゝに據りて天

- て兵を擧ぐ
- 4 秀吉信孝を岐阜に攻む
- 5 一益を伊勢に攻む
- 二 賤嶽の戦
- 1 勝家近江に攻入る
- 2 賤嶽の戦
- 3 賤嶽の七本槍
- 4 前田利家を北國におく
- 5 信孝は信雄に攻められて自刃
- 6 一益は降る
- 三 秀吉の勢威高まる
- 四 大阪城を築く
- 1 大阪の位置
- 2 大阪城の堅固
- 五 秀吉の榮譽
- 關白一太政大臣
- 豊臣の姓を賜ふこと
- で藤原氏と比較する

下を定め、信長の志を成しとげんとす。朝廷秀吉の功を賞して、しきりに官位をのぼせ、(天正年從四位下、參議、十二年權大納言、從三位、十三年正二位、內大臣、七月從一位、關白に任ぜらる。)遂に藤原氏のほか例なき關白を授けたまひ、ついで太政大臣に任じ、豊臣の姓を賜へり。

五 秀吉の勤王

秀吉は又京都(舊内裏跡)にうるはしき邸宅を營みて、(天正十五)聚樂第と名づけ、こゝに(第百七代後陽成天皇の行幸を請ひたてまつり、(四月)自ら文武百官を率ゐて御供せり。士民四方より來り集りて之を拜觀し、「はからざりき、今日また太平の様を見んとは。」といひ、涙を流して喜び合へり。天皇この第に留りたまふこと五日、その間に秀吉は、御料を獻じ、(皇室御料、銀五千五百三)親王(親王料)及び公卿(千石を公卿料)の領地を定め、又諸大名をして、相共に皇室を尊ぶべきことを誓はしめたり。秀吉また新に皇居を造りたてまつり、(天正十八年、少し擴張した)京都の市街をも整へたれば、(前田玄以に命じ周圍に七里の堤防)朝廷の御有様も京都の様も、信長の時よりは、更に立ちまざるに至れり。

六 全國を平ぐ。

かゝる間に、國內やうやく秀吉の威勢に従ひしが、(天正十三年四國の長曾我部元親を降し、)獨り北條氏康の子氏政、孫氏直は小田原に據り、其の要害と將士の武勇とをたのみて秀吉の命を聽かず。

第四時

- 一 秀吉の勤王
- 1 聚落第の行幸
- 2 皇居の造營
- 3 京都市街の整理
- 二 四國、九州の平定
- 三 秀吉小田原を攻む
- 1 小田原征伐の原因
- 2 大軍を東下した理由
- 3 徳川家康の活動
- 4 關東地方の平定
- 5 奥羽地方も歸服
- 四 全國を平定す

よりて(天正十一年)秀吉大軍(十七萬餘)を發し、徳川家康を先手として、東海・東山の兩道より攻入り、壘を石垣山(小田原の西方)に築きて小田原城を見下し、四方より之を圍み攻めしめられたれば、城遂に陥り、氏政は自殺し、氏直は降れり。(氏直は高野山に送らる)時に紀元二千二百五十年(天正十八年)にして、應仁の亂後百餘年の間亂れに亂れたる日本國中も、こゝに始めて平ぎたり。

參考資料

一 豊臣秀吉の少年時代

秀吉の父は尾張國愛知郡中村の木下彌右衛門で、嘗て織田信長の父、信秀に仕へ足輕となつてゐたが、病氣のため故郷に歸り、同國御器所村の女を娶つて一女一男を生んだが、之が瑞龍院(この人は三好氏に嫁して秀次を生んだ)と秀吉とである。

彌右衛門は天文十二年一月病死し、その妻は秀吉等を育てゝゐたが、同じ中村の生れのもので、信秀の同朋(童坊)であつた筑阿彌なるものが病を以て故郷に歸つてゐたのを里人の周旋で入夫せしめた。こゝに又一男一女が生れた。これが秀吉の異父弟である大和犬納言秀長と、徳川家康の夫人となつた南明院である。

秀吉は幼名を木下藤吉郎と云ひ、頗るの臍白者であつた。八歳の時父に別れてから、寺にもやられ、商家にもやられたが落ちつかず、武士にならうとの志をもつてゐたらしい。十六歳の時、母に乞うて僅かばかりの錢を懐にし、清洲に行つて、木綿針を仕入れ、途々それを行商しながら、東海道を下つて、濱松に行つた時、遠江國久能の城主、松下之綱に出逢つて召しかゝへられることになつた。そして非常な信用を得たが、その機敏の立働が却つて同輩の妬む所となり、之綱の厚意で歸國したが、時に年十八歳であつた。

秀吉が信長に仕へたのは、二十歳前後のことと桶狭間の戦の數年前であらう。信長公記に秀吉の名前の出てくるのは永祿

十一年江州箕作城攻の時、秀吉が三十三歳の時であるから、十數年間は全く認められず草履取や雜役に従つてゐたが、十年餘り辛抱して漸く認められるに至つた。

秀吉は決して叡智非凡の故を以てのみ出世したものではなく、信長に對しては人並以上の忠實を以て仕へてゐることに着眼させる必要がある。

二 山崎の合戦

こゝで秀吉は信長の弔合戦をしたのである。光秀の大敗は光秀の違算と秀吉の機敏の行動によるものである。光秀は信長を倒せば近畿地方は已に風靡するものと思つてゐたが、事實は全く裏切られ、殆ど彼に味方するものはなかつた。そして秀吉が京都に攻め上つて來たことを知らなかつた。秀吉は姫路に於て諸軍の部署を定め天文十年六月十一日には攝津尼ヶ崎に着した。總勢二萬五千、光秀はあわてゝ兵數一萬七八千の兵を以て之を山崎の關門に喰ひ止めようとした。此の戦名分に於て、士氣に於て既に戦はない中から勝敗は明かであつた。戦は十三日の未明天王山の取り合ひから初まつて、遂に秀吉軍の勝利となり、光秀は一時勝龍寺城に入つたが、秀吉の追撃にあつて、再舉を計らうとして、その領邑近江坂本に赴く途中山城の小栗栖に於て土民の竹槍のために一命をおとした。時に年五十七歳と云ふ。

此の亂の結果は秀吉の威勢が盛になり、柴田、瀧川等信長の部將のねたむ所となつた。

三 賤嶽の戦に至る経緯

本能寺の變の時、柴田勝家は加賀にあつて上杉氏と對抗し、瀧川一益は厩橋(今の前橋)にゐて北條氏に對してゐて容易に引上げることが出来なかつた。丹羽長秀は織田信孝と共に大阪附近にゐて四國に渡らんとした時であつたが、誰も信長のために光秀を討伐するものはなかつた。それで信長薨去後の處置は全く秀吉の獨占のこととなつたのである。光秀が誅されて後一週間許りして柴田、瀧川其の他の諸將は清洲へと集つて六月十八日から世嗣問題、遺領問題の相談會議が開かれた。此の時勝家は己れと親交ある信孝をたてようとし、瀧川一益が之に賛成したに對し、秀吉は當年二歳なる三法師

(秀信)を立てるが順序であるとし、議論があつたが丹羽長秀等の賛成で、秀吉の正論に決した。ついで十月十一日から一週間盛大なる法要が京都紫野大徳寺で営まれた。これは秀吉が信長の親族や部将が主催するであらうと待つてゐたが誰一人いひ出すものがない。そこで、秀吉は諸將に書状を出したが何の返事もないので單獨に実行したのである。天皇は此の時、信長に従一位太政大臣を追贈せられたのである。これによつて事實上秀吉は信長の相續者たることを天下に示したやうな形となつたがこれは秀吉の野心ではなく、信長に對する報恩の結果と見るべきである。

かやうなことから自然に信孝及び柴田、瀧川の三角同盟が出来て秀吉は信雄、丹羽長秀等と之に當ることになつたのである。そこで秀吉は或は岐阜に信孝を、伊勢に瀧川を攻めてゐる中、勝家は雪に妨げられて出ることが出来なかつたが天正十一年三月勝家は佐久間盛政を先陣とし、大兵を率ゐて近江に攻め入つた。秀吉引きかへして敵狀をさぐるゝ勝家は柳ヶ瀬に本陣を置いて容易に討つて出さうもなかつたので、賤嶽附近に數器を構へ、中川清秀以下の諸將を配し、再び信孝を攻めようとして大垣に陣をとつた時、佐久間盛政が急に大岩山に奇襲を企て遂に賤嶽の戦となつたのである。

四 聚樂第の行幸

聚樂第は天正十三年から功を起し、十五年に至つて成つた東西四町、南北七町の大邸宅であつた。

秀吉は皇室を尊崇し、應仁の亂後式微してゐられる皇室を慰め奉らうと思つて、聚樂第の行幸を奏請したのである。天正十六年四月十四日、後陽成天皇には百官群臣を従へて行幸を仰せ出された。御所より聚樂第まで凡そ十五町あるが、其の間を六千人の武士が警固し、南薄肅々と進み、伶人は太平樂を奏して練り行く空前の盛儀であつた。都人が嬉し涙を流したのも宜なる哉である。

最初の十四日には山海の珍味を以て款慮を慰め奉り、其の夜は音楽の催しあり、十五日は皇室の御料を献じ、公家の領地を増すことを言上し、更に信雄、家康以下二十七人の大名に皇室を尊び、關白の命令に背かぬといふ誓を立てさせた。三日目は和歌の會、四日目は舞樂の天覽、色々の献上ものがあつて駐紮五日に及び十八日還幸あらせられた。この時御進物

を入れた箱が五十荷もあつたといふことである。秀吉は御所まで奉送し、お禮を申し上げ

行幸尙思ひし事のあまりあればかへるさ惜しき雲の上人

と奏上し奉れば、主上には殊の外御満足にて

あかざりし心をとむるやどりゆゑなほかへるさの惜しまるゝかな

と御返歌を賜つた。この行幸によつて皇室の尊嚴を知らせると共に關白の威令を十分に示すことゝなつた。

第三十五 豊臣秀吉 (つゞき) (三時間)

要旨

豊臣秀吉の朝鮮征伐の顛末を知らせて、その發展的精神を理解させ、また秀吉の一生を通覽して、その優れた人格を欽慕させるにある。

準備

九州地方地圖、朝鮮征伐順路圖、碧蹄館戰の繪、蔚山戰の繪、秀吉明使を怒る繪、明の國書の寫、加藤清正、島津義弘、小早川隆景の肖像、秀吉の墓、豊國神社の寫眞。

教授事項

一 秀吉明と交を修めんとす。

秀吉既に國內を平げたれば、更に明と交を修めんとし、朝鮮をして(朝鮮王に書)其の意を通ぜし

第三十五 豊臣秀吉 (つゞき)

五月 四週—五週

學習指導過程

第一時

一 秀吉明と修交をはかる

1 秀吉の大志

フイリツピン、臺灣に書を送る

2 明に修交を求む

イ 朝鮮王を介して

ロ 朝鮮王我が要求に從はず

二 兵を朝鮮に出す

- 1 關白を秀次に譲る太閤と稱す
- 2 本營を名護屋におく

三 諸將の出帆

- 1 我が軍の進撃
- 2 京城の占領(二十日間)
- 3 行長は王を逐ふ
- 4 清正は二王子を捕ふ

四 朝鮮全土を服す

- 第一時 朝鮮王明に援兵を請ふ
- 第二時 平壤の戦
- 第三時 行長と休戦を約す
- 第四時 李如松平壤を攻む
- 第五時 行長京城に退く

ひ。然るに明我が求に應ぜざるにより、秀吉は道を朝鮮にかりて之を伐たんとせしが、朝鮮は明を恐れて従はざりき。

二 兵を朝鮮に出す。

こゝに於て秀吉、朝鮮を定めて明に及ばんとし、(天正十一年)關白の職を養子秀次に譲りて太閤と稱し、肥前の名古屋におもひきて諸軍を指圖せり。紀元二千二百五十二年(文祿元年)小西行長・加藤清正を先手として、十三萬餘の大軍海を渡りしが、幾千とも知れぬ軍船、いづれも家々の紋つきたる幕うちまはし、思ひくしの旗おし立て、威勢のほどいはん方なし。それより諸將釜山に上陸し、道を分ちて北進せしが、(小西軍は中央から北進、加藤軍は東方の路を進み、黒田軍は西路を北に向つた)戦へば勝ち、攻むれば取り、忽ち(五月三日、上)京城を陥れ、行長は國王(李)の後を追ひて平壤を取り、(王は義州)清正は東北の地方を定めて(七月會寧)二王子(臨海、順和)をとりこにせり。清正はたゞに武勇にすぐれたるのみならず、よく王子をいたはり又民をあはれみたれば、彼の人々も其の徳になつけりといふ。かくて我が軍は三箇月にして、殆ど朝鮮全國を従へたり。

三 碧蹄館の戦

朝鮮王大いに恐れて、救を明に請ひしかば、明の大軍(李如松五萬の兵を率ゐて)來り助けて、行長(一萬五)を平壤に破り、勢に乗じて京城を取りもどさんとす。(李如松心おこり)我が諸將の中には、

三 碧蹄館の戦

- 1 小早川隆景の意氣
- 2 隆景、立花宗茂と李如松を破る
- 四 和議起る

- 1 明使沈惟敬と行長
- 2 京城に於て
- 3 講和要項一七箇條
- 4 二王子をかへす
- 5 出征軍の歸國

五 和議破れて再征

明書の無禮
「特封爾日本國王」に

第三時

- 一 我が軍の進發
- 二 蔚山の籠城
- 三 秀吉の薨去
- 四 出征軍の歸國

京城はすてて退かんとするものありしが、小早川隆景は、大敵の來るは何よりの幸なり、いざやわが手並を見せん。奮戦してたふるとも、日本に隆景ありと知らせんはまた愉快ならずや。といひて聞きいれず。立花宗茂等(一萬五)と碧蹄館(京城の北四里)に陣して、六七倍の敵兵をさんぐにうち破れり。

四 和議破れ再び兵を朝鮮に出す。

こゝに於て明は大いに驚き、行長によりて和を求む。秀吉これを許して、出征軍を引上げしめ、明よりは講和の使(慶長元年、楊方)を送り來り。時に秀吉は歸りて大阪城にあり、明使をこゝに召せしに、其のもたらせる國書(僧承兌)に、秀吉を日本の國王となすとありしかば、秀吉無禮を怒りて、明使を追ひ、再び出兵の命を下せり。

五 蔚山籠城

慶長二年、清正・行長もとの如く先手となりて、全軍(總勢十萬)海を渡り、程なく朝鮮の南部を従へたり。年の末(十二)に至りて、明の大軍(楊鎭)蔚山城に圍めり。清正(南方の機張)急を聞きておもひき救ひ、城に入る。時に城未だ全く成らず、兵糧も乏しく、清正以下紙を食ひ、馬の血をすゝるに至るも、なほ屈せざりしが、間もなく我が援兵來るに及び、(慶長三年正月、毛利輝元)力を合はせて大いに明軍を破れり。(千を得た)

六 泗川の戦

既にして秀吉病にかゝり、慶長三年、(八月十)六十三歳を以て伏見城に薨ぜり。出征の諸將遺言によりて兵をかへせしに、たま／＼明軍(董一元の兵)二十萬島津義弘を泗川に攻む。義弘僅かに五六千の兵を以て、奮戦して之を破りしかば、(三萬八千の首を得)明軍また我が後をうかゞはず、諸將無事に引上ぐることを得たり。かくて前後七年にわたりたる戦争は、こゝに其の終を告げたり。

七 秀吉の人物

秀吉は輕き身分より起り、其の智勇を以て國內を平げ、皇室を尊び人民を安んじ、更に外征の軍を起して、國威を海外にかゝやかしたる豪傑なり。されど一方には又極めてやさしき人なりき。平生母につかへて孝行を盡せしが、肥前の名護屋にありし時、母の病重しと聞くや、急ぎて京都に歸りしに、母既に死せしかば、聲をあげて泣悲しみ、其の病床に侍せざりしをなげきたり。又かつて少年の頃仕へたりし松下氏(之綱の子吉綱)を召出して、多くの領地(丹波に三千石、後駿河に於て一萬六千石の領地)を與へ、常に之を優待せり。

八 朝廷秀吉の勳功を賞したまふ。

朝廷秀吉の大功を思召し、其の社に豊國大明神の號を賜ひ、正一位を授けたまへり。今京都の豊國神社(別格官幣社)に秀吉をまつれり。(墓は阿彌陀峯の上にある)

五 泗川の戦

島津義弘の奮戦

六 秀吉の人物

1 秀吉の事業

2 親に對して—孝行

3 主君に對して—報

恩

七 秀吉の勳功

1 豊國大明神の號を賜ふ

2 正一位を贈らる

3 豊國神社(別格官幣社)

參考資料

一 蔚山の籠城

加藤清正は淺野幸長等と秀吉の命を奉じ、蔚山城の警備に當り、これを修築したが、未だ出来ない中に十二月二十二日、明軍が大舉して蔚山城に攻めよせた。幸長は討つて之を退けた。時に清正は水路の諸櫓を修める爲に西生浦に赴いて機張といふ所にゐたが、この報を得て直ちに引きかへさうとした。部下の將士は千萬人の命にも代へ難いと諫めたが、清正は出征前に幸長の父長政からの依託されたことを重んじ、義を見てせざるは勇なきなりと、直ちに乗船し、其の夜の中に蔚山城に入つて幸長等に會した。二十三日夜明軍再び襲ひ來つたが、防戦して之を退けた。是より明軍は急攻をせず、守兵を置き、城兵の糧道を絶つたので、城中は飢渴に迫り、馬を殺してその血を飲み、その屍を食ひ、馬が盡きたので紙を食べ、壁土を噛み、尿を飲むと云ふ有様になつたが、少しも屈せず、味方の聲援を待つてゐた。慶長三年正月元旦、小早川秀秋、毛利秀元等九人に書を送つて急をつげた。この報によつて諸將は援兵を出し、遂に内外相撃ちて、それを破り、首を斬ること一萬三千に及んだといふことである。

二 泗川の戦

慶長三年六月秀吉の薨去にあひ、諸將は其の遺命によつて歸國することになつた。十月一日明の董一元は二十萬の大軍を率ゐて泗川城にゐた島津義弘を攻めた。義弘は僅かに六千の兵を以て應戦し、大勝利を得首を斬ること三萬八千に達した。これが爲、明軍我が後を追はず、年内に兵を引き上げることが出来た。明では島津を呼んで石曼子と云ひ、清正の鬼上官と共に恐れたのである。義弘は歸郷の後、高野山に朝鮮陣戦歿者の供養碑を立てて、敵味方の英靈を慰むるところがあつた。

五月 六週—七週

第三十六 德川家康 (三時間)

學習指導過程

第一時

- 一 家康の生立
- 1 家康の先祖
- 2 父母は
- 3 今川氏に人質とつた理由
- 4 織田氏に行く
- 田原康光に奪はれて
- 5 今川氏に行く
- 6 家康の勉學
- 7 修養につとむ
- 二 家康の人となり
- 1 辛棒強い
- 2 聰明—獨創的
- 3 幼時の逸話
- イ鳥の鳴聲について

要旨

德川家康の境遇と幼時の修養を述べ、活動期に入つて、初めは織田信長と結托し、後、豊臣秀吉に従つてその實力を培養し、關ヶ原の合戦後、天下の政權を掌握するに至つた経路を明かにするにある。

準備

日本全圖、近畿・中部地方地圖、小牧、長久手古戰場圖、關ヶ原合戦圖、德川家康、石田三成の肖像、德川氏の系圖。

教授事項

一 家康の生ひたち

豊臣秀吉の後をうけて、國內統一の業を完うしたるは、德川家康なり。家康は三河の人(岡崎城)にして、新田氏の後(祖先は新田義重でこの次子義季が徳川氏と稱し、家康はその十六世の孫)と傳へらる。父は岡崎の城主にて、廣忠といひ、其の領地今川氏と織田氏との間にはさまりて、獨立を保つこと能はず。よりて廣忠は、今川氏(義)に付き、家康を人質として駿河に送りしに、途中にて(田原康光)織田信秀に奪はれたり。家康時に年六歳なりき。それより二年の後、(廣忠死し、今川氏安祥城の織田信廣を攻めてとり)更に今川

て

ロ 安倍川原の石合戦について

第二時

- 一 家康の出世
- 1 家康が今川氏から獨立した機會
- 2 家康と信長の關係
- 東方の敵に當ることとを約す
- 3 家康と秀吉との關係
- 小牧山の陣
- 家康が秀吉と戦つた理由
- 4 家康江戸を居城とする
- イ 關東地方を根據地とする
- ロ 江戸發展の基
- 第三時
- 一 家康の威望加はる

氏のもとに送られて、ながく(十二年間)留めおかれしが、其の間に師(雪齋)につきて學問を修めたりといふ。

二 家康の人となり

かく家康は、幼き時よりさまざまの難儀に出あひしを以て、何事にも辛抱づよく、其の上生れつき賢かりしかば、少年の頃より人にすぐれたる考ありき。(獨創的のと)かつて信秀のもとにありし時、慰にとて人(熱田の)より飼鳥(黒つ)を贈られたるに、家康喜ばずしていはく、「此の鳥よく他の鳥の鳴さまねはすれども、己の鳴聲とてはなし。かゝるものは大將のもてあそぶべきものにあらず。」と。又駿河にありし頃、安倍河原にて、數多の兒童の石合戦をなせるを見、「小勢の方はちのづから決心堅く、隊も整ふべければ、必ず勝たん。」といひしに、果して其の通りなりきといふ。

三 家の出世

家康十九歳の時、今川義元に従ひて、尾張に攻入りしが、義元戦死したる後、(岡崎に歸り)其の子氏真愚にして、父の仇をうたんとせざれば、家康は信長と結び、それより遠江を取りて濱松に移り、次第に領地を廣めて、(武田信玄の死後勝頼)勢甚だ盛になれり。本能寺の變後、信長の子信雄秀吉と不和となり、助を家康に請ふに及び、家康これに應じて(天正十)兵を尾張に出し、(萬一

- 前田利家の墓後
- 二 石田三成、家康を除かんとする
- 輝元、景勝等味方となる
- 三 關原の戦
- 1 景勝會津に兵を擧ぐ
- 2 伏見城の戦
- 烏居元忠の忠死
- 3 關原の戦
- 西軍の大敗
- 4 戦後の處分
- 5 天下分目の戦と云はれる理由

八千)小牧山に陣して秀吉の大軍(萬四)と對せり。秀吉の部下、(池田)虚に乘じて三河(家康の)を襲はんとす。家康急に兵をかへして之を長久手に破り、(池田氏は)大いに威名をあげたり。ついで秀吉と和して之に仕へ、其の小田原攻に従ひて功あり、北條氏のもの領地(野上總、下總の六國)を得て、武藏の江戸に移れり。(天正十八年八月一日)

四 關原の戦

秀吉薨じて、子秀頼年僅かに六歳なりしかば、家康は秀吉の遺言(五大老即ち徳川家康、前田利家、宇喜頼(ことを)によりて伏見城にあり、(政務を)前田利家(大阪城)と共に之をたすけしが、間もなく(慶長)利家薨じて、家康の勢獨り盛なりき。時に、秀吉に重く用ひられし大名(近江佐和山)に石田三成といふものあり。此の有様を見て、遂には秀頼の爲に不利とならんことを憂へ、毛利輝元・上杉景勝等(この外、宇喜多秀家)と共に家康を除かんとす。こゝに於て景勝その領地會津(代)にありて兵を擧げしかば、家康は鳥居元忠を伏見にとりめ、自ら兵を率ゐて東下せり。(慶長五年六月)三成その虚に乘じ、たゞちに兵を起して伏見城を攻む。(毛利、吉川、小西等の)元忠(僅に千八)生命を重んじてよく防ぎしかども、かなはずして忠死せり。家康(江戸を経て)これ聞きて兵をかへし、三成等と大いに美濃の關原に戦ふ。此の時全國の大名は、おほむね美濃を界として二つに分れ、東は多く家康に付き、西は三成に味方し、東軍は凡そ七萬五千、西軍は八萬ばかりなり。合戦數度に及びし

も、勝敗容易に決せざりしが、たま／＼西軍の中にそむきて家康に應ずるもの(小早川)ありしかば、西軍忽ち敗れて、三成以下(石田三成、小西)の諸將多く殺されたり。時に紀元二千二百六十年(慶長五年)なり。世に之を天下分目の戦といふ。

新田義重―義季……松平廣忠―徳川家康―秀忠―家光

參考資料

一 家康と信長との同盟

桶狭間の戦の時、家康は今川勢に加つて、織田方の丸根城を陥れ、更に大高城を守つて居たが、義元戦死の報をきいて岡崎に歸つた。義元の子氏親は凡庸で再擧を計らうとしな。そこで意を決して信長と和し、永祿五年正月に家康は清洲に行つて信長に會した。これより専ら東方駿遠の經略に當ることとなつた。家康は信長と同盟後、武田信玄と結んで、今川氏の駿遠を襲食した。信玄は駿府をとつたので氏眞は遠江掛川城に移つたが、家康は西方から掛川を攻め、遂に氏眞を逐つて遠江を略し元龜元年には岡崎から濱松に移つた。其の後、信玄の遠約によつて武田氏と争ふこととなつたが、信玄が卒し、勝頼の世となるに及んで天正十年信長と同盟軍を起して甲斐を攻め、勝頼を亡ぼし、駿河を併せることとなつた。かやうに信長と家康とは互に相倚り相扶け、信長に東顧の患なく上京に成功したのは家康との同盟の爲であり、家康に西顧の患がなかつたのは信長との握手の賜であつた。

二 小牧、永久手の戦

賤岳の戦では織田信雄は秀吉を助けたが、戦後秀吉の威勢が盛なるにつれ、信雄はこれを忌み、天正十二年三月信雄は秀吉に通じてゐる老臣を長島城に誅して、断然秀吉と断ち、援助を長曾我部元親と徳川家康とに請うたのである。此の時、家康と秀吉とは何等の疎隔はなかつたが、家康は義戦の名のもとに秀吉に對抗することとなつた。

天正十二年三月、秀吉は大山に、家康は小牧山に陣取つた。互に持して戦はなかつたが、四月秀吉は本陣を樂田に移した。秀吉の部將池田信輝は秀吉に獻策し、三河の空虚をついて徳川氏を牽制しようとして、ひそかに出發した。家康之を知り、守將を止めて長久手に追撃し、信輝を討ち取つて大勝を得た。秀吉は之をきき、急遽追撃したが、家康は勝には勝を重ねぬものぞといつて、直ちに兵を收めて小幡に退き、秀吉が追ふて龍泉寺に至る中、早くも引き上げて、小牧山に歸つてしまつた。

家康は長久手で勝利を得たとはいふものゝ、昇天の勢ある秀吉と雌雄を決することは容易な業でない。秀吉も亦家康の手腕を知つて容易に屈せしめられる凡將でないかと考へ、これからは外交戦にうつり、先づ信雄と和し。然る後、家康とも和した。そこで家康の庶長男の秀康は、秀吉の養子となり、秀吉の異父妹の南明院夫人は家康の妻となつた。更に、秀吉は家康を上洛せしめるため、己の生母大政所を家康の許に送るに及び、家康も上洛して秀吉の麾下に屬することを誓つた。

三 關原の合戦

1、西軍の敗因 東西兩軍其の兵數に於て東軍は七萬五千、西軍は八萬で、互角であつた。其の將士の顔觸れに於ても、東に徳川の四天王の酒井、礪原、井伊、本多を初め福島、淺野、黒田、細川等の猛將があれば、西軍には島津、小西、大谷等の鋒々たるものがゐた。残す所は其の主將と將士の和合である。然るに東軍には經驗と威望とを兼ねた家康がゐるのに反し西軍には盟主の輝元は出陣しない。殊に二心を持つてゐる武士がゐることは大なる弱點であつた。中にも小早川秀秋の内應がこの戦の勝敗を左右したのであるこの事情は朝鮮の役に發してゐる。初め秀秋は慶長の役の時、總帥の任務を以て出陣した。そして清正が蔚山で危かつた時、秀秋も自ら出陣して應援に赴いたのであつたが、それを石田が總帥としては輕舉であるとして秀吉に話した爲、朝鮮から召しかへされ、秀吉の怒にあひ、將に轉封せられようとしたのを、家康の仲介によつて本領に復することが出来た。これから秀秋は本家毛利氏との關係上表面は西軍についてゐるやうに見せかけ、實は家康に心をよせ、既に伏見の戦のあつた時島居元忠に東軍に従はんことを申出で、更に黒田長政によつて家康に内應を申し

送つたのである。吉川廣家も内應を申し送つてゐる。かやうなわけで味方と思つた松尾山の秀秋の陣地からは急に大谷吉隆が攻められ、こゝに大敗を招くことになつたのである。

2、戦後の處分 長東正家は水口城にかへりめ攻られて自殺した。石田三成、小西行長は捕へられて京都の六條河原で殺され、島津義弘は薩摩にかへつて降参を申し出で、宇喜多秀家は島津氏にかくれたが、後に八丈島に流された。上杉景勝も降参し、毛利輝元も木津の別荘に入つて降参した。そこで賞罰を行ふこととなり、輝元の八十三萬六千石は削られて防長二國の三十七萬石となり、景勝の會津百二十萬石は米澤の三十萬石となり、三成、行長、秀家等の領地は悉く沒收せられ、島津家は其の儘となつた。福島、淺野、黒田等皆非常な加増となり、清正は其の領國肥後に於て小西の領地をとつて功を立てた。

第三十七 徳川家康 (つゞき) (二時間)

要旨

徳川家康が豊臣氏を滅ぼした顛末を説き、確實に天下の實權を握り、國內を統一して江戸幕府二百六十五年の基礎を築いた家康晩年の事業とその人となりを理解させるにある。

準備

徳川初期大名配置圖、大阪冬陣戰圖、大阪夏陣戰圖、方廣寺鐘の寫眞、日光東照宮の寫眞。

教授事項

一、江戸幕府はじまる。

第三十七 徳川家康 (つゞき)

五月 七週
六月 八週

學習指導過程

第一時

一 關原戦後の處置
二 家康征夷大將軍となる

三 江戸幕府を開く

四 家康と秀頼の關係

1 豊臣氏と徳川氏と

位置をかへる

- 2 家康、秀頼を恐れる理由
 - イ 大阪城の堅固
 - ロ 秀頼の官位
 - 正二位内大臣
 - ハ 秀吉恩顧の臣が多い
- 3 家康、秀頼と會見清正の誠忠

二 家康と秀頼との間柄

こゝに於て、豊臣氏は徳川氏とは全く其の位置をかへ、ただ一の大名(攝津、河内、和泉六五萬石)のやうになれり。されど秀頼は、堅固なる大阪城にあり、年やうやく長じて高き官位に進み、(慶長八年内大臣に上る)又秀吉の恩を受けたる人々の中には、之を尊びて豊臣氏の盛なりし昔にかへさんと思ふもの少からず。よりにて(慶長十年)家康は、將軍の職を子秀忠に譲りて駿府(今静岡)に隠居せし後も、なほ心を安んずること能はざりき。

三 方廣寺の落成式より騒動起る。

はじめ(天正十一年)秀吉、京都に方廣寺を建てて、木造(木造漆喰塗)の大佛を置きしに、(慶長元年)大地震の爲に損ぜしかば、家康は秀頼にすゝめて、父の志をつぎて之を造りかへしむ。(片桐且元を奉行十七年)其の大佛は銅造にて、高さ六丈三尺、奈良の大佛よりもなほ大なりき。此の時(十九年)秀頼、

- 五 方廣寺の鐘銘事件
 - 1 大佛鑄造
 - 家康の勧めた理由
 - 2 鐘銘問題
 - 「國家安康」
 - 家康が難題を云ふ理由
 - 3 片桐且元の苦心
 - 4 且元大阪を去る
 - 家康の離間策の成功
- 第二時
- 一 大阪冬の陣

- 1 大阪方の擧兵
- 2 家康の出陣
- 3 大阪方の堅固
- 4 家康和睦を申込む
- その理由考察
- 5 大阪方之に應じた理由

四 大阪冬の陣

又大鐘(千貫七)を鑄たりしが、其の銘の中に、國家安康の句ありしかば、家康大いに怒り、ことさらにわが名を切りて、われをのろへるなりとし、俄に落成の式(八月三日の豫定であつた)をとどめしめたり。片桐且元は秀頼の命を受けて(駿府に)之を辯解し、豊臣氏の爲におだやかに取りまといめんとしたれども、秀頼の生母淀君をはじめ、かねて家康の仕打に快からざりし大阪方の人々は、且元をしりぞけ、秀頼にすゝめて兵を挙げしめたり。(長曾我部盛親、眞田幸村、後藤基次、次、城直之等の浪人九萬人集まる)

五 大阪夏の陣

此の和議の中に、總堀を埋むる條件あり。總堀とは外堀のことなるに、家康は士卒を(本多正純)發して、外堀はもとより内堀をも悉く埋めしめたり。こゝに於て秀頼その約にそむきたるを憤り、翌元和元年の夏(四月)再び兵を挙げしかば、家康父子(家康と秀忠)また大兵を率ゐて(四月京都を大和から大)之を攻む。此の時、城の要害もとの如くならざるを以て、木村重成以下の勇將城を出

- 二 大阪夏の陣
 - 1 總堀問題
 - 2 大阪方の兵を擧ぐ
 - 3 家康父子の來攻
 - 4 大阪方諸將城を圍て戰つた理由
 - 5 大阪方大敗
- 三 豊臣氏の滅亡
 - 1 大阪城陥る
 - 2 秀頼母子の自殺
 - 秀頼一二十三歳
 - 淀君一四十九歳
- 四 家康太平の基を開く
 - 1 天下の實權を握る

- 2 太政大臣に任ず
- 3 薨去七十五歳
- 五 家康の榮譽

- 1 東照大権現の號を賜ふ
- 2 正一位の追贈
- 3 日光の東照宮(別格官幣社)
- 久能山の東照宮も別格官幣社であること
- を附説

てて(八尾、若江、道)奮戦せしが、皆討死して城遂に陥り、(八月)秀頼(三十一歳)母子自殺して豊臣氏亡びたり。之を大阪夏の陣といふ。これより天下また徳川氏に敵するものなし。

六 家康太平の基を開く。

翌年(元和)家康は、太政大臣に任ぜられ、程なく(同年四月)七十五歳にて薨ぜり。家康は最も忍耐(にんたい)力に富み、おひく己が事業を進めて、遂に國內を統べ、善き政治を行ひ、學問を興し、以て二百六十餘年間(二百六十)の太平の基を開きたり。されば朝廷、家康をまつれる社に東照大権現(げん)の號を賜ひ、後(明正天皇)さらに宮號(東照宮と)を下したまへり。下野日光山の東照宮(明治六年別格官幣社と)はすなはちこれなり。

參考資料

一 方廣寺の鐘銘事件

家康が大坂方に方廣寺の建立大佛の鑄造をすゝめたのは大阪城の富を滅殺せしめる手段であつたといはれてゐる。大野治長等これに反對したが、事勿れ主義の説が勝利を得て、工事を起すこととなり、慶長十五年六月起工、十七年三月に至つて完成した。其の大佛殿は高さ十五丈、東西十六丈、南北十七丈、大佛は銅像にて高さ六丈三尺で、奈良の大佛よりも大きいものであつた。十九年四月には重さ一萬七千貫の大鐘を鑄、之に南禪寺の僧清韓の銘を刻りつけた。八月三日を以て大佛開眼の日と定めた。所が其の棟札に大工の棟梁や、徳川家より附けられた五人の工事監督者の名前が書いてなかつた。大工の棟梁は之を遺恨に思つて、棟札に徳川方の工事係の名のないこと鐘銘に呪咀の文字があると訴へ出た。家康は早速之を侍講の林羅山に問ふたが羅山は國家安康と君臣豊樂等の文字には不吉の意味があると答へた。家康は怒つ

て、京都所司代板倉勝重に命じて開眼供養の式を止めさせ、京都の碩學の七人の僧侶を呼び出して、其の註議を命じた。それが八月二日のことであるから、明日の開眼供養に列しようとする諸國から集つた僧侶は千人に達し、參詣を期して集まつたものは數萬に達し大騒ぎを演じた。秀頼の傳片桐且元は所司代と折衝して、明日の式の實行を依頼したが、所司代は御所の命と稱して聞き入れない。依つて且元は止むなく式の中止を命じ、大阪に歸つて、秀頼母子に告げた。

大阪方では家康の不法を憤つたが、兎に角他意ないことを明かにしなければならぬので、且元は清韓を伴つて駿府に行つた。家康は兩人に面會を許さず、本多正純をして詰問させた。清韓は一々之を辯解したが、承知しない。其の中に京都の七僧の意見書が駿府に到達した。妙心寺の海山を除く他の僧は清韓の學才と豊臣家からの尊信されてゐるのを嫉んでいづれも不吉の銘であると言上した。

一方、大阪では淀君は侍女二人を駿府に下らせて家康に他意なきことを申させた。家康は二人を城中に入れて快く面會し、別に怒つてゐるといふ風も見せなかつた。兩女は更に江戸に入つて秀忠夫妻にも面會の上歸阪することゝなつた。然し、且元に對しては怒がとけず、正純をして兩家和親の實を示すやうに取計へと話させた。止むなく且元は三つの私案を作つて正純に示した。即ち(一)、淀君を江戸に住まはせること。(二)、秀頼が夫人と共に江戸に住むこと。(三)秀頼が大坂城を去つて他へ移ること。この三者の一を行ふことを申出ると正純も大體承知した。そこで歸阪の途中近江の土山で侍女の一行と會ひ、侍女に其の意を告げると侍女は自分等の款待された態度と且元の案とは非常に相違するので、且元に異心あることを疑ひ、それを大阪に歸つて秀頼母子に告げた。城内でも且元を疑ひ、城にかへつて報告しても容れられず、かへつて之を殺さうとしたので且元は領地茨木に退隠してしまつた。

二 豊臣氏の滅亡

大阪冬の陣が終り總崩れのことから再び大阪では兵を擧げた。そこで家康、秀忠の父子は五月河内、大和の兩道から大阪に迫ることゝなつた。

大阪方では頼るべき堅城を失つてゐる。堀を二尺許り掘りかへし、構など設けて防禦の用意はしたが、到底昔日の比ではない。大阪方の諸將は徳川方を險阻によつて防がうと皆城を出て、進撃して之を苦しめたが、後藤基次、薄田兼相は五月六日道明寺方面にて戦死し、木村重成二十三歳も同日若江の戦で戦死した。

家康、秀忠は勝に乗じて平野に陣を進めた。幸村は茶臼山に陣取つて、秀頼の出陣を乞うたが果さず、七日四十六歳を一期として戦死したので大阪方は總崩れとなつて、城中に逃込んだ。家康父子も茶臼山、岡山に陣を進めた。折から城中には内應するものがあつて火を放つた。大野治長は秀頼の夫人千姫(秀忠の女)を脱出させて秀頼母子の助命を乞はせた。家康は赦さうと思ひ秀忠に相談したが秀忠が反対したので、その旨を傳へた。そこで遂に秀頼は二十三歳、淀君は四十九歳で共に城中で自殺した。治長や女房達も之に殉じた。時に元和元年五月八日秀吉の薨後十七年である。秀頼の幼子國松丸は八歳で六條河原で殺された。

六月 八週—九週

學習指導過程

- 第一時
- 1 幕府の權威確立
 - 2 家光の幼時
 - 3 當時の諸侯
 - 4 職につくと共に諸侯に申渡す
 - 5 諸侯を家臣として

第三十八 徳川家光 (三時間)

要旨

徳川家光が諸侯を抑へて幕府の威權を盛にしたこと及びキリスト教の傳來から家光に及んで之を嚴禁するに至つた経緯を説き、遂に鎖國政策をとつた理由並にその我が國に及ぼした影響を考察させるにある。

準備

徳川氏の系圖、家光の肖像、世界交通地圖、島原半島地圖、南蠻人渡來の繪、御朱印船、踏繪の繪、教授事項

一 幕府の權威盛となる。

三代將軍家光は秀忠の子にして、生れつき豪氣(豪氣)の人なり。二十歳(元和)にて將軍職に就きし時、諸大名(外様)を集めていはく、「わが父祖は、諸君の力をかりて天下を得たれば、諸君に向つて同輩の禮を用ひしが、余は生れながらの將軍なれば、此の後は全く家臣として待遇せん。若し不平のものあらば、國に歸りて兵馬(戰爭)の用意をなせ。」と。諸大名その威光に恐れ、(伊政宗一同を代表し)これより幕府の威權甚だ盛になれり。(寛永十二年參勤交代の制を立て又)二心ない旨誓つた)家光は又キリスト教の事よりして、外國との交通を禁ずるに至れり。(大名の妻子を江戸におかした)

二 外國との交通盛に行はる。

これより先、(天文十)後奈良天皇の御代にポルトガル(葡萄牙)人(ピント)始めて我が國に渡り來りしより、(九州の種子島に來)イスパニヤ(西班牙)。(天文十八年サビエル(聖フランシスコ)來てキリスト教を傳へた)オランダ(和蘭)・イギリス(英吉利) (慶長五年豊後にオランダ人ヤンヨーステンを船長とする外船が漂着)などの人々も、おひ／＼に來りて通商を開きたり。(アダムスの紹介でオランダ、イ)又我が國民も遠く海外に渡り行きて盛に貿易を營み、シヤム(暹羅)をはじめ所々(ルソン島、印)に移住するもの多く、日本町(度支那)さへ立てられたりき。

三 キリスト教ひろまる。

第三十八 徳川家光

- 遇す
- 5 幕府の權威確立
 - 二 南蠻人の渡來
 - 1 最初渡來したヨロツバ人は
 - ポルトガル人一種子島
 - 2 其次は
 - スペイン人—鹿兒島
 - オランダ人—豊後イギリス人
 - 三 我國民の海外發展
 - 1 外國との貿易
 - 2 海外移住
 - イ シヤム、ルソン、印度支那等
 - ロ 日本町の建設
 - 3 山田長政、濱田彌兵衛について補説
 - 第二時
 - 一 キリスト教の傳來

- 1 最初我が國に傳つたのは
- 2 それに對する爲政者の態度

イ織田信長は
ロ豊臣秀吉は

二 德川家康は

- 1 キリスト教の禁止
- 2 秀吉が禁じた理由
- 3 家康の禁令

但し貿易は許す
イ信者を嚴刑
ロ國民の渡航を禁す

第三時

一 島原の亂おこる

- 1 幕府の壓迫
- 2 信者の反抗
- 3 益田時貞の出現
- 4 島原半島の原城に擧兵

ポルトガル人來りしより、間もなくキリスト教(サビエルがキリスト教の一派、エズラがキリスト教を傳へた)もまた傳はれり。織田信長は手あつく其の宣教師を保護し、京都・安土等に教會堂・學校を建てしめられたれば、キリスト教は次第にひろまり、(天正十五年頃には信者三十萬、教會堂約二百五十に達した)西洋の學問もやうやく行はれたり。

四 キリスト教を禁す。

然るにキリスト教の信者の中には、わが國の風をそむくものありて弊害少からざれば、(神社を破先之位牌を川に流したり又宣教師が長崎の土地を所有した)秀吉は之を禁じ、(天正十一年)教會堂をこぼち、宣教師を國外に追出せり。家康もまた此の方針によりて其の教を嚴禁せしむ、(慶長十一年)外國との貿易はもとの如く之を許せり。されば海外との交通頗るしげくして、宣教師のひそかに來るもの絶えず、國民の之を信するものなほ多かりき。こゝに於て家光は、其の禁絶しがたきを見て、信者を嚴刑に處し、(火刑又は且國民の外國に行くことを禁じたり。)(寛永十年御朱印船以外の渡航を禁じ、十三年に)(は絶對に渡海を禁じ、犯すものは死刑に處した)

五 島原の亂

然るに九州は、其の教の最も早く傳はりたる地にて、信者の數も甚だ多く、肥前の島原半島及び肥後の天草島等は、實に其の中心たりき。これ等の信者は、幕府の禁のきびしきを怒り、(第九代)明正天皇の寛永十四年亂を起し、島原半島なる原城にたてこもれり。(その數三萬七千、首將は益田四郎時貞)家光すなはち兵を發して之を討たしむ。(板倉重昌を將とし九州の諸侯に出兵せしむ)其の徒の勢さかんにして容易にくだら

二 幕府の討伐

- 1 板倉重昌の攻撃
- 2 松平信綱の包圍
- 3 原城陥る

三 鎖國政策

- 1 國民の渡航を禁す
- 2 外船の來航を禁す
- 3 オランダ、支那の船は貿易を許さる
- 4 洋書を禁す

四 鎖國の影響

- 1 不利な點
- 2 有利な點

ざりしかば、更に兵を増して(松平信綱を大將と十二萬餘の兵)圍み攻めしめ、翌年(十五年)遂に之を平げたり。

六 家光の鎖國

家光はこれよりますますキリスト教を嫌ひ、國民の海外に出づるを許さざるのみならず、西洋人の我が國に來ることをも嚴禁し、(寛永十六年)たゞオランダ人はキリスト教の布教に關係せざりしより、支那人と同様に、長崎(出島に於て)に來りて貿易することを許せり。かく國を鎖せしかば、キリスト教は遂に國內に絶えて、幕府の目的は達したれども、外國との交通は全く衰へ、洋書を讀むことさへ禁ぜられて、國民は外國の事情にうとく、世界の進歩におくるゝに至れり。

參考資料

一 德川初期に於ける邦人の海外發展

天文十二年ポルトガル人が我が國に渡來してから、スペイン・オランダ・イギリスなどの人々も追々に來つて通商を開いた。當時ヨーロッパ人が我が國に輸入した貿易品は生絲、絹織物、砂糖、香料、獸皮其の他毛織物類であり、我が國からは金銀銅、漆器、屏風、及び食料品などを輸出したものである。家康は外國貿易の利あることを知つてゐたから、宗氏をして朝鮮との貿易を復舊せしめ、また明との公然の嗜好は出來なかつたが、南京の商船は年々數十艘長崎に來つて交易し、我よりも御朱印船と稱し、官許を受けて行くものが多くあつた。又亞媽港を初め、呂宋、安南、東埔寨、シヤム、マラッカ、ボルネオの諸地方にまで發展し、我國人の多く居住してゐる所には日本町さへ建設されるやうになつた。呂宋には三千餘人、シヤムのベンコックの北 アヌチアには八百餘人の日本人が居住したといはれてゐる。また安南・ウーランの日本町は兩側三丁餘に亘つたものもあつたといふことである。

二 徳川家光の鎖國とその影響

島原の亂が終つたのは寛永十五年であるが、その翌年の禁令によつて全く鎖國することゝなつた。即ち鎖國の内容は

- (一) 邦人の海外渡航の嚴禁。
- (二) 外船の來航を禁ず。但し、和蘭と支那とに限り、長崎の一港に限り貿易を許すこと。
- (三) 大船五百石積以上の船の製造を止めること。
- (四) 西洋の書物を讀むことを禁ず。

尙、之に關聯して、國民は必ず佛教を信ぜしめ、宗門帳を作つて、必ず何寺何宗の檀家たることを證明せしめた。

この鎖國政策が我が國に及ぼした影響は

- (一) 從來大に發展してゐた通商貿易及び遠洋航海を杜絶したこと。
 - (二) 我が國民の進取發展の氣象を阻止したこと。
 - (三) 外交の頓挫。
 - (四) 西洋文化の輸入が杜絶したことを挙げねばならない。
- また利としては、
- (一) 佛教及び儒教の興隆。
 - (二) 尊王攘夷心の發動。
 - (三) 金銀流出の防止。
 - (四) 國産の發達を促したこと等を數へることが出来る。然し、教科書にある通り、國民は外國の事情にうとく、世界の進歩におくるゝに至つたことは事實である。

六月 十週

學習指導過程

第一時

一 幕府の朝廷に對する方針

- 1 皇居の造營
 - 2 京都所司代
その機能につき
 - 3 外威の權を得
東福門院の入内
 - 4 暗に皇室を抑制す
- 二 後水尾天皇の御不
滿
- 1 幕府の專制
 - 2 紫衣褌奪事件
- 三 天皇の御讓位
- 1 俄に御讓位された理由

第三十九 後光明天皇 (二時間)

要旨

江戸時代初期に於ける朝廷と幕府との關係を述べ、後光明天皇が御英明の資を以てよく幕府の權威を抑へ、皇威の伸張につとめられた御聖徳を仰がせるにある。

準備

日本全圖、奥羽地方地圖、京都古今圖、皇室御系圖、後水尾天皇御肖像、後光明天皇御肖像、澤庵和尚肖像。

教授事項

島原の亂既に平ぎて、幕府の權力いよ／＼盛なる時に當り、御英明なる^{第百}後光明天皇御位にまします。

一 幕府權勢を京都に振ふ。

はじめ家康は、信長・秀吉にならひて朝廷を敬ひ、諸大名(秀頼及び^{諸大名})に命じて皇居を造らしめ、(慶長十^{六年})又御料を増したてまつれり。(一萬石)されど政治の實權は自ら之を握り、京都所司代(板倉^{と重宗父子で}と重宗父子で^{五十餘年在勤})を置きて、ひそかに朝廷及び公卿をおさへ、秀忠は又藤原氏の例にならひて、其の女東福門院(和子と申)を後水尾天皇の宮(女御と)に入れたてまつり、皇室の外戚となりて、まします。

2 明正天皇の御即位
八百五十年目の女
帝

第二時

一 後光明天皇の御即位

1 天皇の御性格
2 天皇幕府を抑へよ
うと思召さる
3 京都所司代との關係

イ 後水尾上皇御見

舞のこと

ロ 擊劍を愛好され

たこと

二 天皇の崩御

1 幕府、天皇を悼り
奉る

2 崩御、二十二歳

3 國民の哀惜

三 朝廷と幕府の關係
につき考察

す幕府の威權を加へたりき。

二 後水尾天皇幕府の專横を憤りたまふ。

されば幕府は、勢にまかせて專横なるふるまひ少からず。かつて後水尾天皇京都のすぐれたる僧だち(大徳寺の澤庵、妙心寺の玉室)に紫衣を賜ひしに、將軍家光はほしいまゝに之を取上げしめ、其の命をこばみたる人々をば、いづれも奥羽に流せり。(澤庵を羽前の上ノ山に、玉室を磐城の棚倉に流した)こゝに於て天皇大いに御憤あり、

あし原やしげらばしげれおのがまゝ、

とても道ある世とは思はず。

とよみたまひ、俄に御位を皇女(興子内親王)に譲りたまへり。これ明正天皇にして、御母はすなはち東福門院なり。實に女帝の立ちたまふは、久しく絶えたることなりき。(稱徳天皇以後八百五十年目)

三 後光明天皇幕府をおさへんとしたまふ。

明正天皇について、(明正天皇二十)御弟後光明天皇御年十一にて御位に即きたまふ。天皇は嚴格なる御性質にましく、幼少の時より深く學問を好みたまひ、(朝山意林庵を召されて漢學を學ばる)幕府をおさへて皇威を張らんとしたまへり。

四 所司代のとどむるを聽かず上皇の御病を見まひたまふ。

ある時、後水尾上皇御病にかゝりたまひしに、天皇これを聞召して大いに驚き、たゞちに上皇の御所をたづねんとしたまふ。時の所司代板倉重宗は之をさへへたてまつりて、いちおう幕府に問合はせんとしければ、天皇は、かゝる事何とて幕府に問ふべきぞ。若し朕の外出を氣遣はば、皇居より上皇の御所に通ずる長廊下(ながろうか)を造るべし。朕は廊下づたひに御たづね申さん。」と仰せられ、遂に御所に至りて、上皇の御病を見まひたまへり。

五 所司代の言をしりぞけたまふ。

天皇また擊劍を好みたまひしに、重宗これをとどめたてまつりていはく、「此の事江戸に聞えなば、必ず悪しかりなん。陛下若し止めたまはずば、臣(重宗)切腹せんのみ。」と。天皇のたまはく、「朕未だ武人の切腹を見たることなし。汝よろしく席を設けて切腹すべし、朕親しく之を見ん。」と。さすがの重宗も、こゝに至りて如何ともせんすべなく、恐れ入りて、やうやく事なきを得たりといふ。

六 早く崩じたまふ。

かくて幕府は、大いに天皇をはぐかりたてまつりしが、不幸にして天皇は、御在位僅かに十二年にして崩じたまひしかば、(承應三年、天然痘にかゝられ、御年二十二歳で崩御された)上下これを惜しみたてまつらざるものなし。

參考資料

一 後水尾天皇の御讓位

天皇の御讓位は幕府の專斷を御憤りあらせられた爲である。即ち寛永三年、幕府の信任を受けてゐる僧崇傳が上洛の際、諸寺に違法の事があるのを聞いて之を調べたところが、大徳寺、妙心寺等の僧侶中に公卿諸法度に背いて齡四十歳未滿で紫衣の勅許を受けた者が九十餘人もあることを發見した。そこでこれを幕府に告げると幕府は翌四年京都所司代板倉重宗に命じ、法度違叛の者の紫衣を褫奪しようとした。然し、かやうなことをすれば天皇から賜ふた綸旨を反古にすることになるから、朝廷からも種々御内諭があつたが、幕府は命を奉じなかつた。天皇は宸怒あらせられ、東福門院の御腹なる高仁親王御年三歳に御讓位あらせらるべき旨仰出された。所が幕府は皇子の御踐祚を喜んで仙洞御所の御造營にとりかゝつたが、突然皇子の薨去にあつて幕府は狼狽した。かくて御讓位も一時中止の御様子になつたが、大徳寺の澤庵妙心寺の玉室は幕府の命をきかなかつた爲、出羽の上山及び磐城の棚倉へ流されることになつた。こゝに於て天皇は斷然御決心遊ばされ、寛永六年十一月八日皇女興子内親王(御年七歳)に御位を御譲り遊ばされた。寶算三十四歳であらせられた。後水尾上皇は其の後五十六歳で法皇とならせられ、八十五歳で崩御遊ばされ、東福門院は之より二年前七十五歳にて崩せられた。

なほ、出羽の上山に流された澤庵は柳生宗矩の諫言によつて寛永九年江戸に召しかへされ、家光の尊信を受け、七十三歳にて品川の東海寺に歿した。

二 板倉重宗

重宗は京都所司代に在ること三十餘年、政にはげみ訴訟公平で盜賊後を絶つやうになつたから、京人は其の姓名を戸側に署し、以て避盜の符となすに至つた。重宗の獄を斷ずるや、西方愛宕山神を拜して坐につき、障子を閉じて茶を嗽いて心の平靜を保ち、敢て訴人の面を見なかつた。蓋し其の面貌によつて裁判の公平を失するなきかを憂ひての爲である。かやうな性格の重宗でさへやりこめられたのだから後光明天皇の御英邁なことがよく分るのである。

六月 十一週

學習指導過程

第一時

一 學問の勃興

1 家康學問を奨む

イ 林道春を儒臣とす

ロ 古書を集む

ハ 書籍の出版

2 綱吉の好學

イ 城中講書をなす

ロ 聖堂を湯島に建

つ

ハ 昌平校を設く

ニ 林大學頭

祭奠

教授

二 諸大名の學問奨勵

三 徳川光圀修史を決

第四十 徳川光圀 (二時間)

要旨

徳川家康が學問を奨勵した爲に、學問が次第に興つたが、特に水戸の徳川光圀は學問を好み、大日本史を著して大義名分を正し我が國體觀念を明かにしようといつとめた偉業を景仰させるにある。

準備

日本地圖、徳川氏系圖、徳川綱吉の肖像、徳川光圀の肖像、聖堂の繪、西山山莊の寫眞、彰考館文庫の寫眞、常磐神社の寫眞、湊川楠子之墓碑の寫眞、大日本史。

教授事項

一 學問大いに興る。

島原の亂の後には、西洋の學問全く傳はらざりしも、我が國の學問はますます發達したり。

はじめ家康は、武力を以て天下を定められたれども、之を治むるには學問を以てせざるべからずと考へ、林道春等の漢學者を招き、又古き書物(孔子家語、六韜三略、貞)をさがし出して之を出版せしめたり。これより學問に向ふものやうやく多く、殊に五代將軍綱吉は、幼き時より學問を好み、將軍となるに及びて、自ら書物を講義(城中で講)して人々(大名)に聽かせ、又孔子の廟を江戸

の湯島ゆしまに建てて、(四年)道春の子孫(道春の孫信篤を)をしてながく之をまつり、且生徒に教授せしめたり。

二 光圀歴史を讀みて感ず。

こゝに於て諸大名も之にならひて、學問に勵むもの多かりしが、水戸みづとの徳川光圀の如きは、最もいちじるしきものなり。光圀は家康の孫(頼房の三子)にして、生れつき頗る賢明なり。六歳の時、將軍家光の命により、(家光の使中山)兄頼重(讚岐高松に)をこえて世嗣と定めらる。光圀や、長じて心安んぜず、ある時(十八歳)支那の歴史(史記の伯夷傳)を讀みて、「伯夷といふ人あり、其の父が弟叔齊に家を傳へんとせしを知り、父死するに及びて叔齊に譲りしに、叔齊もまた兄に譲れり。」とあるを見、大いに其の義に感じて、兄の子に家を譲らんと決心し、又世の人をみちびくには歴史によらざるべからずと思ひて、國史を著さんとの志を立てたり。(明曆三年)

三 大日本史を著す。

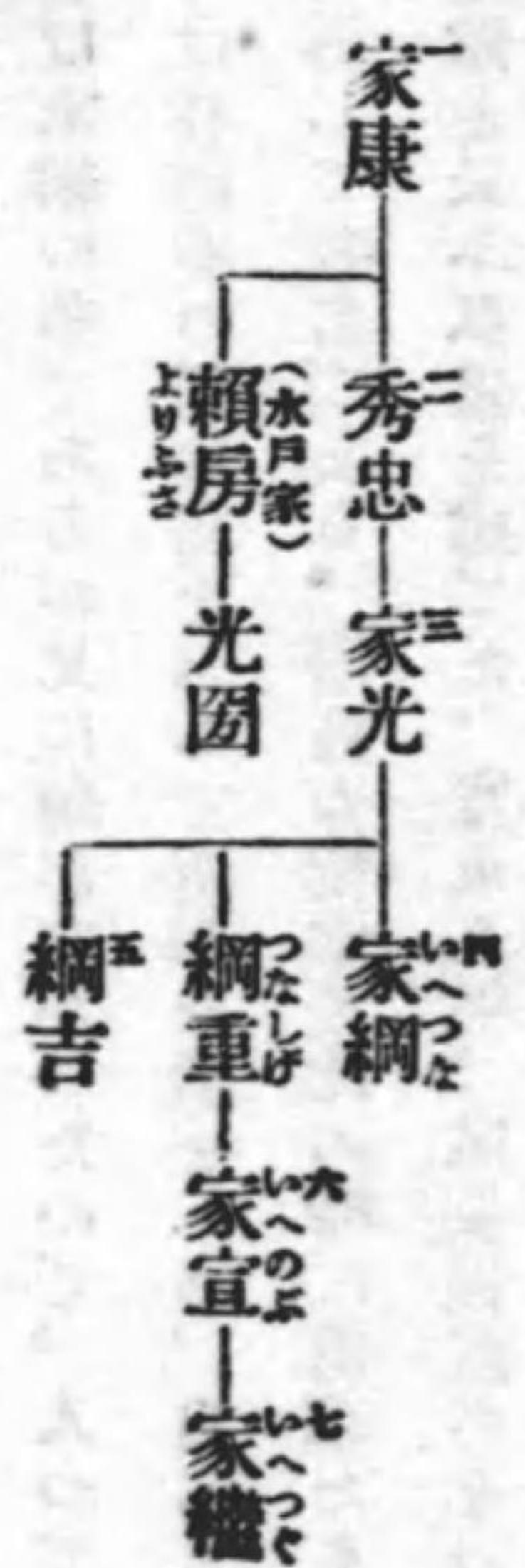
當時わが國には、良き歴史の書物少くして、國民のわが國體を辨へざるもの多く、やゝもすれば、幕府の勢の甚だ盛なるを見て、皇室の尊きことを知らざるが如き有様なりき。光圀これをなげき、四方より學者(三宅觀瀾、栗山潜峯、辻了的、人見下圃等)を招き、廣く書物を集めて、國史をしらべしめ、遂に名高き大日本史(本紀、列傳、志、表とし、本紀は七十三卷、神武天皇から後小松天皇までの歴史、列傳は百七十卷)を作りて、名分を正し、國體を明かにせり。此の書は、後に國民の尊王心をひき起すに大いに力ありしものなり。

四 朝廷を尊び忠孝をすむ。

光圀は尊王の心深く、常に皇室を敬ひたてまつり、毎年正月元日には、禮服(直)を着けて京都の方を拜せり。しばしば家臣に語りて、「わが主君は天皇なり。將軍はわが家の本家なり。將軍を主君と思ひあやまることなかれ。」と戒め、又楠木正成の碑(自筆の「嗚呼忠臣楠」を刻した碑)を湊川に建て、領内の孝子(備作、武右衛門夫婦)・貞女(與次右衛門の妻)を賞しなどして、忠孝の道をすゝめたり。

五 光圀の質素

光圀は大名にてありながら儉約を守り、己が居間(書齋は)の天井・壁などは自ら反古紙にて張り、衣服も極めて粗末(着物の)なるものをまとひたりき。遂にかねての決心通り、家を兄頼重の子(綱)に譲りて、西山(太田の西方)といふ所に隱居し、更に質素なる生活を送れり。(元禄十三年、七十歳で薨去)世に名高き水戸義公とは光圀のことなり。



參考資料

第四十 徳川光圀

- す
- 1 光圀の身分
- 2 家康との關係
- 3 家光との關係
- 4 兄を越して嗣となる
- 5 歴史を讀んで感動
- 6 兄の子に家を譲らうと決心した
- 7 修史の志をいやく
- 第二時
- 一 大日本史を著す
- 1 その動機、精神は
- 2 學者を集め
- 3 書物を採し
- 4 用紙をつくる
- 5 子孫の繼續事業
- 明治三十九年完成
- 二 大日本史の内容
- 1 組織
- イ 本記七十三卷
- ロ 列傳百七十卷

- 八十志
- ニ 五表
- 2 特質
- イ 神功皇后—后妃傳に
- ロ 大友皇子(弘文)を御歴代に
- 淡路廢帝(淳仁)を御歴代に
- 九條廢帝(仲恭)を御歴代に
- ハ 吉野朝を正統とす
- 三 大日本史の影響
- 尊王論の由來
- 四 光圀皇室を尊ぶ
- 1 日常の作法にて
- 2 近臣を戒む
- 五 光圀忠孝をすむ
- 1 湊川神社に楠公の碑を建つ
- 2 領内の孝子、貞女

一 徳川綱吉の學問獎勵

- を賞す
- 六 光圀の質素
- 1 兄の子綱條に家を譲る
- 2 西山に隱居
- 3 質素な生活を送る
- 水戸義公
- 4 常磐神社
- (別格官幣社)

綱吉は家綱の弟であるが兄に嗣がなかつたので、入つて將軍職をついだのである。綱吉幼時から學問を好み、職についてからは林道春の孫信篤を召して漢學を講ぜしめ、自らも二百四十座の講筵を開いたといふことである。所謂將軍の城中講書と稱して有名である。湯島の聖堂も此の時に出来たものであるが、それはもと林道春に上野忍ヶ岡の地を賜ひ、こゝに弘文館と云ふ私塾を建てた。寛永九年、尾張義直がその傍に聖廟を建てたが狹隘であつたので元祿四年綱吉はそれを湯島に移し、聖堂を大成殿と稱し、親ら偏額をかき、學舎を昌平校と呼び、二月十一日釋奠を行つた。そして林信篤に著疑せしめ從五位下大學頭とし、その子孫をして長く之を祭り、生徒に教授せしめることになつた。

二 大日本史

光圀は十八歳の時、支那の歴史、史記の伯夷傳を讀んで、歴史に興味と關心をもつに至つたといはれてゐる。當時、我國には權威ある歴史の書物が乏しく、我が國體を辨へないもの多いのをうれひ、こゝに我が國史を研究して大義名分を明かにしようとしたのである。

即ち、明曆三年其の編纂所を駒込の中屋敷(第一高等學校の地)に設け、多くの古書古文を集め、多くの學者を招聘した。又其の完成には相當の時日を要し、水戸家某代の力に依らねばならぬと思つたので、其の原稿用紙の如きも久しきに耐へるやうな丈夫な紙の必要を認め、特に紙漉場を設けて其の用紙を造らせたのである。其の完成に至るまでの略曆を擧げると、

- 正保二年 義公始めて修史の志をいदैてから
- 明曆三年 初めて史局を開き(駒込の別邸)
- 寛文十二年 彰老館を開き(小石川の藩邸)
- 元祿十一年 史館を水戸に移し、光圀生前に本記と皇妃、皇子、皇女の三傳を脱稿した。綱條の時本紀、列傳が完成したので、朝廷に奉つて、

成したので、朝廷に奉つて、

- 正徳五年 大日本史の名を賜り、
- 同 六年 大日本史紀傳脱稿
- 享保五年 大日本史を幕府に献じた。更に
- 文化八年 大日本史刻本及び上表を窺覽に供へたが
- 明治三十九年 大日本史完成、明治天皇に奉献したのである。

光圀この事業を起してから大日本史の完成するまで二百五十年、本記七十三卷、列傳百七十卷、外に十志、五表を以て大成したのである。

大日本史の特色は皇位は三種の神器の相傳にありとするのである。されば踐祚しない場合は實權があつても歴代に算ふべきものではないとし、神功皇后を后妃傳に納め、大友皇子(弘文)を歴代に數へ、淡路廢帝(淳仁)、九條廢帝(仲恭)を歴代に列し、安徳天皇御入水後、神器京師に還るに及び、之を後鳥羽天皇の御代とせられ、神器南朝に在るを以て南朝を正統とし、後龜山天皇に至り、南北講和成り、神器を後小松天皇に讓るに於て皇統一に歸したので筆を茲に止められたのである。それによつて大體光圀の修史の精神をうかがふことが出来る。

この書は國民の尊王心を引き起し、尊王の精神は遂に王政維新をなし遂げたものであるから其の功績は偉大なものである。

第四十一 大石良雄 (三時間)

要旨

奢侈遊惰に流れた元祿時代の大勢を明かにし、これを背景として赤穂義士の壯烈な仇討を説き、君恩の

七月 十二週—十三週

學習指導過程

第一時

第四十一 大石良雄

四一

一 綱吉の政治

1 善政

學問の奨励

2 悪政

イ 生類憐みの令

犬の保護

ロ 土木—寺院の建

立

二 元祿時代の世相

1 風俗奢侈

2 士風情弱

3 淨瑠璃、芝居の流行

4 財政困難

5 貨幣の改鑄

イ 萩原重秀の勧め

ロ 雑金を混じ質を悪くす

ハ 物價の騰貴

第二時

一 赤穂義士の復讐

人心を新にした義舉

重きを知つて身命を捧げた大石良雄等義士の心情に感銘させるにある。

準備

日本地圖、近畿地方地圖、江戸地圖、元祿時代風俗繪、義士引揚げの繪、泉岳寺義士墓の寫眞、大石良雄

銅像の寫眞

教授事項

一 武勇の氣風

綱吉の學問を盛にしたるはよけれど、次第に政治に倦みて能樂などにふけり、殊に己が生年戊の年に當ればとて、(神田護持院の僧隆) 犬を保護すること極めて厚く、若し之を傷つくるものあれば重き罰にあて、(大を斬り八丈島に流され、また殺されたものがあつた) 又飼主なき犬を集めて大切に飼はせ、(中野と大久保に十六て、各十萬の) 其の數十萬匹に及べりといふ。かくて政治大いにゆるみたる上に、當時、久しく太平うちつゝきたれば、淨瑠璃(元祿の頃、大阪の人竹本義太夫は近松門左衛門の) 芝居(淨瑠璃に合せ人間が所作) など流行し、武勇の氣風は失せて、上下の風俗のづからはてになりたり。

二 淺野長矩吉良義央を城中に傷つく。

かゝる時代にありて、人心を新にせしは赤穂義士の復讐なり。江戸幕府(徳川幕府)にては、毎年正月使を京都に上せて年賀を申し上げしめ、勅使(御答禮)について江戸に下るの例なりき。第百十代 東

二 朝廷と幕府との儀禮

1 幕府の年賀

2 勅使の東下

三 淺野長矩の切腹

1 長矩の役目

2 吉良義央の役目

3 殿中の刃傷

イ 義央の態度

ロ 長矩の心情

ハ 義央を傷く

4 長矩死を賜ふ

四 大石良雄の人物

1 少年時代の勉學

イ 兵學—山鹿素行

ロ 漢文—伊藤仁齋

2 良雄の性質

第三時

一 良雄等の復讐

1 變後の良雄

2 良雄の苦心

イ 主家の再興を計

山天皇の元祿十四年の春、(三)勅使(柳原資康、高野保春を勅使として)の東下(關東に下さ)に當り、幕府は

播磨赤穂の藩主淺野長矩等(淺野長矩は勅使の接待役、伊豫吉田)に其の接待を命じ、且儀式にくはしき

吉良義央(高家儀式に)を指圖役と定めたり。然るに義央は、(足利氏の子孫で持高は四千二百石だが官位

四)性質悪しく欲深き人なれば、長矩の進物の少きを以て、とかく親切に指圖せざるのみならず、

(疊替服装につき故意)殊に城中に於て勅使を馳走する當日、(三月十日)人々の前にて之を罵り(勅使をお迎へ

て)たれば、長矩は憤にたへずして、遂に義央を傷つけたり。(頭に微傷を)幕府(吉)長矩の場所柄をも

辨へざる仕業をせめて、切腹を命じ、(五歳)其の領地を取上げたり。(愛宕下の田村建順(一關城主)

三 良雄の人となり

長矩の家臣に大石良雄といふものあり。少年の頃(十九歳)山鹿素行(淺野家に預け)につきて兵學(山鹿

學)を習ひ、後京都に赴きて、伊藤仁齋に漢學を學び、文武の道に通ぜり。されど良雄は、己が

才をあらはさざれば、人々は之をあなどりしが、(晝行燈など)仁齋などは、かへつて其の人となり

に感じたりといふ。

四 良雄等復讐を謀る。

主家(淺野)の變あるや、良雄は赤穂にあり、之を聞きて(十八日)大いになげき、先づ主家の再興を

謀り、(長矩の弟大學)若し行はれずんば、義央を殺して長矩の志を達せんとせり。良雄と志を同じ

くせる諸士の中には、たゞちに事を起さんとするもの(城に立籠つて討死)もありしが、良雄は之を諭して時の来るを待たしめ、自らは山科(やまなか)に退けり。既にして義央家を其の子(周義)に譲りて隠居し、長矩の家は再興せられざることに(大學は本家の廣島の)定まりしかば、良雄等はいよ(はかりごと)く謀を決して、ひそかに(垣見五郎兵衛と)江戸に下れり。

五 良雄等の忠節

- 一 吉良邸に討入
- 二 義央を斬る
- 三 亡君の遺志をつぐ
- 四 幕府の助命説
- 五 良雄等死を賜ふ
- 六 士民の義心を勵ま

元祿十五年の冬、(十二月)良雄は同志の士四十六人と共に深夜雪をふみて義央の邸(本所松坂町)を襲ひ、遂に之を殺し、首を長矩の墓(高輪泉岳寺)にそなへて其の主をまつり、ついで幕府に自首せり。(吉田衛門等大目付伯耆守に自首した)良雄の持てる小刀には、「萬山重ならず、君恩重し。一髪輕からず、我が命輕し。」と彫りつけたりしとぞ。又良雄の子良金は年僅かに十五歳なれど、智勇人にすぐれて事を共にしたり。綱吉深く良雄等の其の主(上杉)に忠義を盡したるを賞し、幕府の中にも之を助けんと欲するものありしかど、かねて幕府は、多くの人々が徒黨(とたう)を結ぶことを禁じたれば、やむなく(元祿十六年二月)死を賜へり。其の事を傳へ聞くもの、良雄等の節義に感ぜざるはなく、赤穂義士のほまれ甚だ高く、此の後ながく士民の義心を勵ましたりき。(義士の墓に香華絶えることなく、また講談となり、芝居に出されて士民の義心を勵ました)

参考資料

一 殿中の双傷

淺野長矩は勅使饗應役の役目を受けて後、江戸詰家老に相談して吉良義央に向つて一通の挨拶をした。義央は進物の多いのを望んでゐる懇張であつたから頗る不満足に思つた。一方院使饗應役の伊達宗春の方は其の家老が義央の性行を知つてゐるので随分と澤山の進物をした。それが爲義央は宗春に向つてはすべて丁寧(ていねい)に教へるが、長矩に對しては無愛想(あいきやう)はまるやり方で、しかも故意に手ちがへを起さしめるやうなことをしたのである。

勅使饗應の式は三日間にわたるので、第一日は勅使院使より天皇土皇の御言葉を將軍に傳へ、第二日は幕府の饗應を受け、第三日には將軍奉答の式に臨み、其後芝増上寺と上野寛永寺に参詣せられる例である。

長矩は其の際勅使の御休憩所たるべき寺の疊を表換すべきか否かについて義央に指圖を乞うた所が、義央は「別に是といふ先例の定つたものもない宜しく見計ひて然るべし」と答へた。所が別にこれといふ痛んだ所がない爲に繕をして、これ位(くらい)でよからうと、前日迄其の儘にしておいて、伊達家に問合はせると、伊達家では悉皆新規にした、宿坊の疊換はおろか、壁までも悉く新しく換へた。これは上野介の指圖であると答へた。由つて淺野家では大あわてをして職人を呼び集め疊など悉く新にし、壁は火を以てかかすといふ大狼狽をした。

十三日の第二日は勅使院使の饗應の日である。其の前日長矩は明日の服装は如何と尋ねた所が「通例の長てよい。」と答へた。そこで長上下で登城して見ると殿中一同は素袍大紋であるこれは一同の人々が素袍大紋を付けてゐる所へ長をつけた内匠頭を出して屈辱を興へる考へであつた。内匠頭は豫め用意して行つたので早速別室で着更へて間に合つた。愈第三日目即ち十四日になつた。この日長矩は義央に向つて「今日勅使御到着の節は我々ほどの所にてお迎へすべきか、玄關の式臺の上か下か。」と尋ねた。すると義央は「其位の事は平生より心得て居るべき筈。指圖は致さぬ勝手になされ」と剣ねつた。

折から坊主が老中より達示の連名の奉書を持つて來た。義央に之を示した。義央はこれを連名の人々に見せたが、長矩の名のあるにも拘らず之を見せない。他人より注意されて長矩が「見せて下され」といつたが、義央は「是はそこもなどには拜見すべき輕きものではない」と懐(ふ)へ入れてしまつた。長矩が暫くと義央の袂をつかむと、義央はこれを拂はうと中啓

てはいたのが、長矩の頭にあたつた。
こゝで長矩も最早堪忍袋の緒が切れて義央に斬りつけたが、一太刀は烏帽子にて止められ、微傷を負はせ、二太刀目は肩先に三四寸の深手を負はせたのである。尙一太刀と進む所を梶川典三兵衛に抱き止められて果さなかつたのである。
長矩は當日直ちに奥州一關城主田村建顯の邸に預けられることになり、午後芝愛宕下の田村の屋敷に送られて、切腹を命ぜられたのである。

二 義士討入と切腹

大石良雄は元禄十五年十月に山科を發足し、垣見五郎兵衛と變名して江戸に入り、松坂町の吉良家の様子をさぐる中、十二月十四日、茶の湯の會を催した後、年内に麻布の上杉家の屋敷に引移ることに内定した。義士は此の事を探知して討入を其の日の夜と定めたのである。十二月十三日は大雪であつたが、翌十四日には晴れた。義士一同は泉岳寺の墓をとむらうた後、寺の一室にて密議をこらし、四十七人を二手に分けて良雄以下二十三名は表門から、良金等二十四名は裏門から向ふことにし十五日午前四時頃吉良の屋敷に入りこんだ。逃ぐるものは追はず、義央の居所をさがしたが容易に分らなかつた。遂に炭部屋に隠れたるをさがし出し、間十次郎が首をとつて本懐を達したのである。

かくて午前六時頃高輪さして引き上げる途中、良雄は吉田忠左衛門、富森助衛門を大目付仙石伯耆守の邸に遣はして事の次第を自首せしめ、一同は泉岳寺へ到着して主君の墓をまつり、義央の首を手向けた、それから、幕府からの指圖によつて、四家に分ちて預けられることになつた。

良雄等十七人は熊本の細川侯に、大石主税等十人は松山の久松侯に、武林唯七等十人は長府の毛利侯に、神崎與五郎等十人は岡崎の水野侯に預けられ、翌十六年二月四日死を賜ひ、良雄等深く自裁した。

なほこの時吉良義央の養子義周は淺野家浪士討入の際、仕方不届の所以を以て領地を沒收せられ信州に謫せられ、三年の後配處に病死し、吉良家は斷絶した。

九月 一週

學習指導過程

第一時

- 一 新井白石の仕へた將軍
家宣—家繼
- 二 白石の苦學
 - 1 生れつき
 - 2 少年時代の苦學
- イ習字
- ロ一家の窮乏
- ハ和漢の學に通ず
- 三 木下順庵の門人と
なる
- 1 勉學
- 2 學才を認める
- 四 白石の友情
- 五 白石の出世
- 1 甲府侯に仕ふ

第四十二 新井白石 (二時間)

要旨

新井白石が徳川家宣及び家繼を輔佐して、元禄時代の弊政を改め、正しい國家觀念によつて宮家を創立し、朝鮮との國交上にも大改革を加へた功績を知らせると共に、幼時からの苦學力行が遂にその大を成さしめた人格を吟味させるにある。

準備

日本全圖、江戸地圖、徳川家宣の肖像、新井白石の肖像、朝鮮使者行列の繪、閑院宮家の御系圖、貨幣の繪、白石の著書(折焚柴の記、藩翰譜、讀史餘論等)

教授事項

綱吉薨じて、家宣・家繼相つぎて將軍となりしが、新井白石此の二代に仕へて、政治上種々の改革を行ひたり。

一 白石の苦學

白石は上總カヅツの人なり。(久留里の人、明暦三年江戸柳原の藩主土屋利直邸で生る)生れつき頗るさとく、三歳の時はやくも字を寫し、常に「天下」と書けりといふ。九歳の頃より日課を定めて(晝は三千字、夜は千字を習ふ)字を習ひ、夜に入

- 2 甲府侯將軍となる
- 3 將軍に重く用ひらる

六 白石の政治改革

- 1 宮家の創立
- イ 皇族出家の例をとむ

ロ 閑院宮家の創立

第二時

- 一 朝鮮使者の待遇を改む

1 家康以後の好遇

2 國の體面上

3 大改良をなす

二 貨幣の改鑄

1 元祿時代の財政

2 惡貨幣の鑄造

3 物價上り民苦しむ

4 白石の貨幣改鑄

イ 雜金をとる

ロ 質をよくす

ハ 財界安定

りて睡氣を催せば、水をかぶりて習ひつゞけたり。既にして(十八歳の時父は)家計次第に貧しくなりしかども、白石は少しも屈せず、ます／＼勵みて和漢の學に通ぜり。

二 白石の友情

其の後、(白石三十歳の時)白石は木下順庵(京都の人で、藤原惺高の門人松永尺五の門下、年六十六歳で江戸に來り、幕府の寄合儒者となる)の門人となりて、(學ぶに)學問いよ／＼進めり。順庵、白石の學才を賞して、加賀の藩主(前田氏)にすゝめんとせしに、白石は友情に厚き人なれば、かへつて加賀生れの友人(岡島石梁)に譲れり。間もなく(翌年、年三十七歳の時)順庵のすめにによりて家宣(初め甲府侯、徳川綱豊と云つた)に仕へ、(こゝに居るに)其の將軍(叔父綱吉の養子となつて將軍となる)となるに及びて重く用ひられたり。

三 皇族の出家したまふ習はしをとむ

これまで朝廷にては、皇太子に立ちたまふ御方の外は、皇族たいてい出家したまふ習はしなりき。白石は、其の事のおそれ多く如何にも道理にたがへるをなげきて、將軍をして、此の習はしをやめんことを朝廷に請はしめたり。(寶永七年、將軍から京都所第百十代中御門天皇が御弟(親王)を親王として閑院宮家を立てたまひしは、此の意見に基づけるなりといふ。)

四 朝鮮の使のなし方を改む

はじめ家康朝鮮と交を修めてより、將軍の代がはりに毎に、朝鮮より使を我が國に送る定なり

三 外國貿易の制限

- 1 貿易船の制限
- 2 金銀の流入を防ぐ

四 白石の引退

五 著述

三百餘種

六 白石の生涯を回顧

き。然るに幕府の之をもてなすこと、勅使よりも厚き有様なれば、白石は、之が爲にわが國の體面を損ずるを論じ、將軍にすすめて其のもてなし方を改めしめたり。

五 貨幣を鑄直し又外國貿易を制限す

さきに綱吉著にふけり、又大なる寺院(音羽の護國寺、神田の護持院等)などを建てたる爲、幕府の財政困難となりしかば、金貨には銀・銅を多く混ぜ、銀貨には錫などを混ぜて、貨幣の數を増して費用の不足をおぎなひ來れり。されど貨幣の價はおのづから下り、品物の價はたかくなりて、人民大いに苦しみたり。又外國貿易の爲に、金銀おびたしく國外に出てたれば、白石はこれ等を改めんとし、しば／＼書を家宣にたてまつりて意見を述べたり。よりて家繼の時に至り、始めて貨幣を鑄直して(正徳三年)質を良くし、又(正徳五年)貿易の額を制限して、金銀の多く國外に出づるを防ぎたりき。(清船は一年三十隻(元は八十隻)交易貨物の價格は銀六千貫、オランダ船は二隻(元は三隻)銀三千貫に制限し、銀の流出を防ぐ爲に清には銀の代り銅を三百萬斤、オランダには銅百五十萬斤を交付し)

六 多くの書物を著す

かくて白石は、政治上に大功を立てしが、吉宗八代の將軍となるに及び、幕府を退きて、有益なる多くの書物を著し、(讀史餘論、折焚柴の記、藩論、西洋紀聞三百餘種)學者としても其の名高し。白石が少年の頃より貧困を忍びて、かつて他人にたよらず、遂に當代にならびなき學者・政治家となりて其の志をとげたるは、まことに感ずべきなり。

參考資料

一 宮家の創立

新井白石が宮家の創立を計つた動機は、未だ順庵に學んでゐた頃、學友榊原篁州から、かの東山天皇が靈元天皇の五宮にあらせられて、愈儲君に定まらせられた時、一宮濟眞親王は出家して大覺寺に入らせられることに定まつた。一宮には御生母の小倉大納言邸に生長せられてゐたので、そこへ朝廷から公卿がお迎へに行くと、十一歳の一宮は、寺に入るのを好ませられず、障子に執りすがつて動かないのを無理に御手を離して、御輿へ入れ奉つた。といふ御いたはしい話を聞いたことに因ると云はれてゐる。

これは家宣の賛同を以て、朝廷に奏上されたが、御嘉納されて、翌年、寶永七年京極宮、伏見宮、有栖川宮の外に新に閑院宮家を創立することとなり、幕府よりは祿千石を上つた。

閑院宮家が創立されてから、六十餘年の後に閑院宮家から光格天皇が入つて大統を承けつがせ給うたが明治天皇はその御曾孫に當らせられるのである。

二 朝鮮使者の待遇を改む。

豊臣秀吉の征韓後、徳川家康は朝鮮との修交を恢復し、朝鮮の使者が來朝することゝなつた。家光の時我が國庫の豊富なことを彼に示さうとして、道路を修め、橋を架けかへ、家々の軒先まで切り揃へ、客館を飾り、山海の珍味を以て優遇した、されば此れが例となつて、彼は當然の如く思ひ、我は屈辱を感じながら舊例に従つたのである。使者は大抵三百人から五百人近くの間勢で、釜山を出て、對馬に渡れば、宗氏方に隨伴し、壹岐から九州の北岸を過ぎて、瀬戸内海に入り、大阪に上陸して、京都に到り、それから東海道を通過して江戸に入るといふ順路で、釜山を出てから江戸に入るまで約四ヶ月を要する旅行であつた。そして其の通過に當る沿道二十二の大名は十分に之を接待しなければならぬので非常に苦んだのである。

正徳元年白石は接待係となつて此の改革を斷行した。その改良の要項は大體左の通りであつた。

- 一、途中の饗宴を四箇所(大阪、京都、駿府、品川)に限り、其代りに食料を給すること。
 - 一、從來信使が乗輿のまま客館に入つたのを、門前にて輿を下りしめること。
 - 一、幕府の使者客館を訪ふ時、信使は送迎しなかつたが、階下まで送迎すること。
 - 一、從來副使が國書を捧呈したのを正使をして捧呈せしめること。
 - 一、賜饗の際、從來三家をして相伴せしめたのを高家をして相伴せしめること。
- 信使が將軍に謁見する式は進見、賜饗、辭見の三回ある。其の賜饗の時、彼の使は從來と其の待遇の變つたのを憤り、席につかうとしなかつたのを、白石は信使を叱して、遂に席につかしめ、我が國威の重きを示したのである。

第四十三 徳川吉宗 (二時間)

九月 二週

學習指導過程

第一時

一 徳川吉宗の幼時

1 吉宗の系圖

2 どこに生れた人か

3 幼時の逸話

4 感心な點

賢明、大膽

二 鯖江城主としての

要旨

徳川吉宗が紀州家から入つて宗家を繼いで將軍となり、勤儉尙武をすすめて士風を振起し、産業を興して國富を増進し、且つ、洋書の禁を解いて、西洋文化に接觸するの端を開き、幕府中興の英主と仰がれる所以を知らせるにある。

準備

日本全圖、江戸近郊地圖、徳川氏系圖、徳川吉宗の肖像、大岡忠相の肖像、青木昆陽の墓の寫眞。

教授事項

第四十三 徳川吉宗

吉宗

- 1 儉約を守る
- 2 よく藩を治む
- 3 紀州侯として吉宗
- 4 吉宗將軍となる
- 1 豊富な經驗
- 2 皇室を尊ぶ
- 5 大岡忠相の登用
- 1 忠相を用ひた理由
- 2 吉宗の偉い點

第二時

- 一 吉宗の政治
- 二 勤儉をすゝむ
- 1 元祿の餘風を改む
- 2 自ら綿服、蔬食
- 3 將軍の居室と四脚門をこぼつ
- 4 侍女を解雇
- 三 武事を勵ます
- 1 鷹狩
- 2 水泳

一 吉宗の幼時

將軍吉宗は家康の曾孫(頼宣の子光)にして、紀伊家に生る。幼き頃より頗る賢明なり。ある時その父、諸子(三兄と)を膝下(ひざもと)により集め、刀の鐔箱(つばばこ)を示して、「いづれの鐔にても、望にまかせて取らすべし。」といひしに、吉宗のみは物をいはずひかへたり。父これをあやしみて、「汝は何とてさやうに遠慮(えんりょ)するか。」と問ひしかば、「殘(のこり)の鐔を箱のまゝ賜はりたし。」と答へたり。父はほゝゑみて、「年にも似ざる大膽者(だいたんもの)よ。」といひつつ、其の請にまかせたりしに、吉宗は之を己が室に持ちかへりて、悉くお附(つぎ)の人々に分ち與へたりといふ。

二 よく藩を治む。

吉宗は末子(ぼっし)の身なれば、やゝ長ずるに及びて、(十三歳)出てて小藩(石三萬)の主(江城主)となりしが、絶えず下民(かみん)の生活の有様に注意し、自ら儉約を守りて、よく其の領地を治めたり。又常につつしみ深く、人の、朝廷の事を話す時は、(或る時狩りに出て小庵に休み、庵の主人が京都に往來した話をした時)必ず座を正して謹みて聴きたりといふ。既にして二人の兄相ついて死せしかば、(元祿十一年、兄綱教紀州家をついだが、八年)歸りて紀伊家をつぎたり。(時に二)

三 大岡忠相をあげ用ふ。

其の頃伊勢(今まだ)の山田奉行(おやまた)に大岡忠相といふ人あり。これより先、山田の農民、紀伊藩の農民と田

- 3 馬術
- 外人の長技をとる
- 4 土風改まる

四 産業の奨励

- 1 開墾をすゝむ
- 2 甘藷の栽培
- 3 砂糖の製造
- 4 諸藩の産業興る
- 5 洋書の禁を弛む
- 1 キリスト教に關係ないもの
- 2 西洋文明の輸入
- 六 中興の英主
- 1 在職三十一年間
- 2 善政を行ひ
- 3 元祿以後の綱紀を引締める
- 4 中興の英主と仰がれる所以

地の界を争ひしが、紀伊藩の農民不正なりしかど、今までの奉行は、皆紀伊家にはかりて之を決せざりしを、忠相奉行となるやたゞちに山田の農民を勝とせり。吉宗ひそかに其の公平なるに感じ、後將軍(正徳六年、三)となるに及びて、忠相を江戸町奉行にあげたり。(江戸の町政並に)世に名高き大岡越前守とは、すなはち此の人なり。

四 儉約をすゝめ武事を勵ます。

吉宗の將軍となりたる時は、元祿頃の風なほ残り、武士の生活はてにて、武藝は殆どかへりみられざりき。吉宗すなはち儉約の令を下し、自ら綿服(めんぷく)を着け、金銀をちりばめたる城門等(將軍室や四脚門)をこぼたしめて、手本を示し、又しばし鷹狩(たかがり)・(江戸五里四)水泳(隅田川)を行ひ、オランダ人(ケイブル)を招きて部下に馬術を授けしめ(竹橋門)などして、武事を勵ませり。これより、武士は大いに活潑になり、土風おのづから立直りたり。

五 産業をすゝむ。

吉宗は深く心を産業に用ひ、甘藷(かんしょ)が飢饉(きげん)の時に效あるより、青木昆陽(江戸魚商の子)をして甘藷の作方(つくりかた)を記さしめ、其の書物(考)と種芋(りよせて)とを諸國にひろめしめたり。又其の頃砂糖は、すべて支那より輸入して、價甚だたかかりしかば、吉宗は甘蔗(さとうきび)の苗を取寄せ、城中に(吹上)植えて砂糖を製せしめたり。されば諸藩にても、多く之にならひて、産業に注意せしか

ば、諸國の産物(薩摩の煙草、阿波の藍、甲斐の葡、次第に増すに至れり。

六 洋書の禁を解く。

吉宗は又西洋の學術(天文・曆數等)の進めるを聞きて、之を學ばしめんと欲し、今までの禁を解きて、(享保七年)キリスト教に關せざる書物は、之を讀むことを許せり。これより國民は、始めて洋書にて西洋の學術を學ぶことを得、後世洋學の盛になる基開けたり。

七 幕府中興の英主

かくの如く吉宗は、善き政治を行ひて、世の中よく治りたれば、世に之を徳川幕府中興の英主とす。



參考資料

一 吉宗の節儉

元祿時代の餘風は家宣の時、新井白石の禮文政治では十分改革することが出来なかつた。そこで吉宗は儉約の令を出し、自ら綿服をまとひ、蔬菜を食して自ら模範を示した。元祿年間に綱吉も屢々儉約の令を出してゐたが、自ら守ることがな

かつたので、之を一般に行ふことが出来なかつた。かくて勘定奉行萩原重秀が七十萬金を費して造營した壯麗なる將軍の居室も、新井白石が古賞を調べて建てた四脚門も毀ちてしまつた。また容姿の美しい侍女五十餘人を解雇して大に奢侈をいましめ儉約を奨励した。

二 吉宗の武事奨励

世は太平がつづき武士と町人とは接近して殆ど町人の氣風になつた。吉宗は武士はどこまでも武士らしくしなければならぬと考へ武技として鷹狩、水泳、馬術を奨励した。鷹狩は家綱は病弱、綱吉は殺生禁斷で絶えてゐたのを興し、江戸五里四方の地を以て將軍狩獵の地と定め、屢々出て、鷹狩を行つた。又、從士の水泳を奨励し、其の技に長ぜるものには賞を與へ、或は水馬の術を隅田川に試みるなどした。享保十三年に來朝したオランダ人ケーツルが馬術に秀で、居るのをきき、部下に命じ竹橋門外で稽古をさせたのである。假令、外國人でも其の長技を有するものは之を採つて我が國を利せんとしたのである。かくて士風は大に改まつたのであるが、吉宗は單に旗本の士を取締る許りでなく、大名にも及ぼした即ち、一身の榮華を事とせず政治に意を盡すべきこと、從來の華奢な風を退けて質素を旨とすべきこと、無用の男女を過分に雇つて費を盡し、能役者等を多く用ひること並に出家沙門に親しみ、佛法に心酔して武藝を忘るること等を戒めた。

三 洋書の禁を弛む。

吉宗の洋書の禁止を弛めた動機は曆法に關係ある。即ち、我が國に長く行はれた曆は清和天皇の貞觀年中に用ひられた宣明曆であるが、八百年許り使用して來たので、その間に非常の差が起つて來て、日蝕の日にそれがなかつたり、無い日にあつたりするやうになつて來た。そこで綱吉の時に安井算哲の研究になる貞享曆を採用した。この時から曆を幕府でつくることになつたが、吉宗の頃になると、此の貞享曆にも亦差が起つて來た。そこで吉宗は精確な曆がほしいと思ひ、京都の中根元圭が數學曆學に詳しいとき、彼を幕府に呼んだ。

元圭は明の萬曆年中に伊太利の利瑪竇によつて支那に傳へられた西洋の曆を知つてゐたので、西洋の曆法の正しいこと並

に長崎に洋書を持ち来れば直に焼きてられるから困ると言上した。そこで吉宗はキリスト教に關係ない書物を許すことにしたのである。これが享保五年で、以後、益々進取的となり、ペルシャの馬を前後に二十四取よせて、其内幾匹かは奥州の南部に種馬として下した。それから「ケーブル」を招いて馬術を傳へさせ、西洋の藥草を取寄せて小石川の藥園に植ゑさせ、硝子の製造、更紗の染練等を研究させたのである。

九月 三週

學習指導過程

第一時

- 一 吉宗から家齊までの將軍
- 二 家齊と松平定信將軍を輔佐
- 三 定信の生立ち
- 1 吉宗との關係
- 2 幼時の性質
- 3 修養につとむ
- 四 定信白河藩主となる
- 1 領内をよく治む

第四十四 松平定信 (二時間)

要旨

徳川吉宗以後、田沼時代の弊政となつたが、松平定信はこの後を承け、將軍家齊を輔けて鋭意治をはかり、政治上幾多の新施設をなし、また皇室を尊び、我が國の海防に意を注いだ事績を理解させるにある。

準備

日本地圖、徳川氏系圖、松平定信の肖像、聖堂の繪、京都御所の繪、集古十種等

教授事項

- 一 定信幕府に用ひらる。

吉宗薨してしばらくの間は、(家重の十一年間)天下太平を樂しみたりしが、其の後政またゆるみしかば、(家治の時、田沼意次は老中に、その子意知は若年寄)家齊(家重の弟)十一代の將軍となるに及び、松平定信を用ひて、之を整へしめたり。

二 定信の生ひたち

定信は吉宗の孫(宗武の子)にして、幼き時より賢く、(七歳で孝)十三歳の時書物(自教)を著せしほどなり。されど生れつきとかく短氣なりしが、(生れつき身體弱く神經)古今の書物を讀むに至り、深く自ら戒めて行をつつしめり。既にして(十八歳)松平氏(松平定邦の)をつぎ、奥州白河の藩主となりて、(二十六歳)よく領内を治め、(實業、儉約をす)人望頗る高かりき。

三 勤儉をすむ。

其の頃暴風。(天明元年九州の大風、二年畿内の大風、三年西國の大風)洪水(天明元年東國の洪水)などの天災しきりに起り、飢饉(天明七年九月町人米屋をおそ)及び同七年諸國におこる)もまた相つぎしかば、人心一般におだやかならず、(天明七年九月町人米屋をおそ)江戸・大阪をはじめ各地に於て、數百の貧民、隊を組み米屋を襲ひ、其の家をこぼち、米穀を奪ふなどの暴動(天明の打攘)うちつゞきたり。されば定信の幕府に入るや、吉宗の定にならひて、大名より下民に至るまで、さびしく奢を禁じ、衣服・家具の新調を見合はさせ、かりそめにもぜいたくの品を用ひしめず、平生勤儉して餘りあれば、飢饉などの用意に之を貯へしめたり。(大名には一萬石につき五十石を貯へしめた)

四 文武の道を勵ます。

定信は又當時の人々が遊惰に流れたるを憂へ、先づ武士の風儀を正さんとして、文武の道を勵

- 2 質素儉約
- 3 人望高かつた
- 5 定信老中となる
- 六 當時の世情
- 1 天災地變起る
- 2 飢饉
- 3 窮民の暴動
- 7 定信の對策
- 1 勤儉をすむ
- イ 奢侈を禁じ
- ロ 衣服、家具の新調を見合はす
- ハ 備荒貯蓄
- 大名旗本は一萬石につき五十石(五年間)
- 2 文武の獎勵
- イ 昌平校の擴張
- ロ 教授をおく
- ハ 町道場をおく
- 士民の風儀改まる

- 第二時
- 一 皇居の御造營
 - 1 どんな風につくられたか
 - 2 天皇のお喜びは
 - 3 時の人は天皇と定信を何と申したか
 - 二 意を海防に用ふ
 - 1 ロシヤ人の來航
 - イ當時の海外事情
 - ロシヤ人來航の狀況
 - ハ當時の對策
 - 三 定信の引退
 - 1 樂翁と稱號す
 - 2 風月を友として暮す
 - 3 著書一多數
 - 4 養生につとむ七十

ませり。すなはち湯島の學問所(昌平)をひろげ、新に柴野栗山など(岡田寒泉)の學者を招きて、漢學を盛にし、又多くの道場を江戸市中に開かせて、武藝を稽古せしめしかば、世の風俗も次第に改れり。

五 皇居の御造營につとむ。

たま(天明八年)京都に大火あり、皇居も其の災をかうひれり。定信は將軍(齊)の命により、上京して自ら皇居御造營の工事を指圖せしが、宮殿は悉く昔の法式の通りうるはしく出来上りしかば、第九代光格天皇は、深く御満足に思召され、御太刀等(御太刀と)を定信に賜ひて、其の功を賞せられたり。天皇は御なさけ深くおはしまし、定信また善き政を行ひたれば、天下の人々は、西に聖天子まし、東に名臣出づとて、喜び合へり。

六 意を海防に用ふ。

かくて國內よく治り、人々安心したりしに、はからずも憂は外より起れり。さきに家光國を鎖せしより、西洋諸國との交通は久しく絶えたりしに、たま(寛政四年、ロシヤ(露西亞)の使(スマック)根室に來りて、始めて通商を請ふ。幕府これを許さざりしかば、(石川忠房をつかはし、通商は(長崎)これより形勢やうやくおだやかならず。こゝに於て定信大いに意を海防に用ひ、自ら股引・草鞋がけにて、けはしき山谷をこえ、宿なきところにては野宿などし、數多の困難を忍び

二歳の高齡を保つ

て、伊豆・相模等(上總)の海岸を巡視せり。定信かつて外國船を畫かしめ、之に題して、この船のよるてふことを、夢の間もわすれぬは世の實なりけり。

とよめり。定信が日夜海防の事を憂へたるは、之によりても知るべし。

七 數多の書物を著す。

程なく(在職七年)定信は職を辭し、樂翁と號して風月を友とし、多くの書物(集古十種、花月草)を著せり。定信もと體質弱かりしも、常に養生につとめ、七十二歳の高齡を以て卒したり。(文政十二年五月)

參考資料

一 定信の勤儉政治

- 定信は、祖父吉宗の政治に據つて、政治改革をなしたので享保時代と殆んど軌を一にしてゐる。就職の初め質素儉約の命令を出し、旗本御家人等にも守らしめた。
- 一、衣食住の什具の類はなるべく従來の物を用ひ、新規の調製を見合はずべし。
- 二、朔望及び二十八日、其の他儀式の日には格別、平日は白小袖無用たるべし。
- 三、家族の衣服は尙更質素にすべし。
- 四、家督・婚禮に贈遺の品物、従前の半ばに止む可く、且つ飲食品を質素にすべし。
- 五、慶事の贈遺には従來鮮魚を用ひしを改めて、今後は乾鯛に止むべし。

此の年八月には「今より三年の間、非常の儉約を行ふべき」を以てし、寛政元年には更に五ヶ年の儉約を令し、寛政六年に

は又も引續き十二ヶ年の儉約を命じた。公用文書の用紙にも粗悪なる品を用ひしめ、農商の徒の婦人の衣服に制限を加へ、玩具頭飾等に金銀を禁ずることゝなつた。

寛政二年大名旗本に一萬石につき五十石づゝの備荒貯蓄を命じ、翌三年には江戸市中に對して、特に七分金の制を實行せしめた。七分金とは五ヶ年の平均を町費とし、一ヶ年節約によつて生じたる剩餘を十とし、其の内より七分を四年又は貧民救助の爲に積み置くといふのである。これが明治まで繼續し、明治七年には百七十萬石となり、後共同事業に使用され、東京養育院はその一部で出来たものだと言はれてゐる。

二 定信の學問獎勵

湯島の聖堂は綱吉以來餘り振はなかつた。そこで定信は柴野栗山(讃岐高松の儒者)岡田寒泉(江戸の學者)尾藤二洲(伊豫の學者)をぬきんで、幕府の儒官とし、林大學頭を輔けて聖堂に聖賢の道を講ぜしめ、大名、旗本の子弟を獎勵した。世に之を寛政の三博士と云つた。

定信の辭職後岡田寒泉は辭して、肥前佐賀の學者古賀精里が儒官に採用された。之より寛政九年聖堂は昌平坂學問所(昌平校)と名を改め、純然たる幕府の學校となつた。

三 皇居の御造營

天明八年正月晦日、京都に大火があつて、皇居も、仙洞御所も炎上した。幕府は此の年三月定信を皇居御造營の總裁にした。それより先、皇居は織田、豊臣以來或は修理を加へ、或は増築したが、其の規模小さく、又昔の法式に合はぬ所もあつたので、心あるものは之を憤慨してゐた。定信は忠誠の心の厚い人であるから、林錦峯、柴野栗山等に命じて、古の法式を調べさせ、五月上洛し皇居造營工事の入札を行つた。

この時、定信は其の遺漏なきを期する爲、其の最も高値を以てしたるものに落札した。かくて此の皇居は寛政二年に落成し、十一月には天皇、上皇共に御遊幸あそばされたが、非常の御満足で、天皇は御製詩の御宸筆を、上皇は御製の和歌

九月 四週

學習指導過程

第一時

一 國學の勃興

1 國學とは

2 國學者の初めは誰か

3 その後の有様は

4 本居宣長は何時頃

の人か

二 本居宣長

1 どの人か

2 幼時の勉學

3 國學に志した動機

4 誰の弟子となつたか

を家齊に賜り、定信には御太刀と朗詠集とを賜つた。
其の後、寛政二年から六十四年の後、孝明天皇の安政元年に復上した。幕府は寛政の古式によつて御造營にかゝり、安政三年に完成したのが今の京都御所である。

第四十五 本居宣長 (二時間)

要旨

本居宣長が古史を研究し、國學を大成して我が國體の尊嚴を明かにした結果、尊王論が次第に勢力を加へ、遂に國內の輿論となる。至つた経路を了解させるにある。

準備

日本地圖、近畿地方地圖、僧契沖の肖像、賀茂真淵の肖像、本居宣長の肖像、平田篤胤の肖像、萬葉代匠記、古事記傳、本居神社並に鈴の家の寫眞。

教授事項

外には外國との關係はじまりて、やうやく事多からんとするに當り、内には學問の進むにしたがひて、尊王の論大いに起るに至れり。

一 國學起る。

これより先、學問といへばたいてい漢學(支那の)なりしが、契沖(攝津尼崎の藩士下川元全の子、寛永十七年生れ、十三歳の時出家諸國を巡り、後

國學を大成す

第二時

一 古事記を著す

1 當時の漢學者の支那崇拜

2 古事記を著した動機

3 その苦心一年月

4 古事記傳の内容

5 鈴の屋の由來

二 「大和心」の歌

1 宣長の和歌

2 その意味を吟味

3 大和魂を表はす

三 尊王論大に起る

1 著書の多いこと五

十部

2 門人の多いこと四

百八十七人

3 各國に及ぶ四十餘

國

4 尊王論の勃興

四 宣長の餘榮

1 從三位追贈

明治三十八年

2 本居神社

松坂にある

大阪高津)といへる僧出てて、國語・國文の研究(萬葉代匠記四十卷、和字正選抄を著した)に心をひそめしより、國學始め

て起れり。其の後(荷田春滿、賀茂真淵等)國學の研究が出た)國學の研究はあひひに進み、寛政の頃、本居宣長に至

りて大成したり。

二 宣長の生ひたち

宣長は伊勢の松坂の人にて、はやく(十一歳)父を失ひ、母の手に育てらる。八歳の頃より讀み書

きを習ひたりしが、後契沖の著せる書物を見て、始めて國學に志し、ついで(寶曆十一年五月)賀茂真淵

の弟子(真淵が松坂に來た時その宿の)となりて、ますく其の研究を進め、遂に一代の大學者となれ

り。

三 古事記傳を著す。

此の頃漢學者の中(荻生徂徠)には、みだりに支那を尊びて、(中國と)かへつて我が國を卑しむ(東

と云)の風あり。宣長大いに之をなげき、わが國體の萬國にすぐれたることを明かにせんとして、

數多の書物を著せり。中にも世に名高き古事記傳(四十冊)は、古事記(元明天皇の和銅五年、神田阿禮の口

傳國以來の古傳はその)といふ最もふるき歴史をくはしく説明したるものにて、實に三十五年の長き

年月を経て、出來上りたるなり。其の間、宣長は四疊半の書齋にとちこもり、日夜筆をおか

ず、時に退屈すれば、部屋へやの隅にかけたる鈴を鳴らして、自ら氣を慰め又勵みたり。よりにて其の

部屋を鈴の屋と名づけたりき。

四 「大和心……」の歌をよむ。

宣長は常に櫻の花を愛し、自ら畫きたる己が像に、(寛政二年八月、六十一歳の時)

敷島の大和心を人とはば、

朝日ににほふ山櫻花。

と題せり。此の歌よくわが日本魂をよみあらはせりとして、後の世までもてはやさる。

五 尊王論大いに起る。

宣長は、多くの書物(古事記傳の外に玉勝間、)をのこせし上に、日本全國にわたりて五百人(四百九)に

近き弟子(本居太平、藤井)をもちたれば、宣長の志をつぎて、盛に其の説をとふるもの多し。こ

こに於て人々いよくわが國體を辨へ、わが大日本帝國は、萬世一系の天皇大政を御みづから

したまふべきものにて、幕府が政を専らにするは、道理にたがへることをさとるに至り、尊王

の論ますく勢を加へたり。

參考資料

一 本居宣長國學に志す。

本居宣長は伊勢國松坂の人で、父は小津定利といつた。享保十五年五月に生れ、十一歳の時、父を失ひ母の手一つに育て

第四十五 本居宣長

六三

られ、寶曆二年から小津といふ稱をやめて、昔の姓本居に復した。幼より強記絶倫、二十三歳の時、京都に上り、堀景山を師として漢學を習ひ、二十五歳の時から武川幸順を師として小兒科の醫術を習ひ、二十八歳の時、松坂にかへて小兒科を開業して令名があつた。國學に志したのは二十七歳の時であるが、このことを玉勝間に

「さて京に在しときに百人一首の改觀抄を人にかりて見てはじめて、契沖といひし人の説をしり、そのよにすぐれたる程をも知りて、この人のあらはしたる物、餘材抄、勢語臆斷などはじめ、其他もつぎ／＼にもとめ出て見るほどに、すべて歌まなびのすぢのよしあしきけぢめをも、やう／＼にわかまへさとりつ。」

と、あつて契沖は其の死後五十餘年にして、こゝに宣長といふ高弟を得たのである。更に國にかへりて後、賀茂眞淵の冠辭考を見て、益々其の志を堅くし、病家往診の駕籠の中にも國學に關する書を読みふけた。かくて眞淵を慕ふ心は日に盛となつたが、寶曆十一年五月二十五日の宣長は眞淵を松坂の新上屋の旅館に訪ひ、師弟の約をむすんだのである。時に宣長は三十二歳、眞淵は六十五歳であつた。

二 古事記傳

古事記は元明天皇の和銅五年に稗田阿禮の語つたことを太安萬侶が筆記したもので、この書の特長とするところは、我が國の正しい古傳をその儘作らず、飾らずに書き留めたこと、建國の精神並にその後の史實、傳説を知るにはこの書によるの外に道がないのである。その文體は純粹の漢文でなく、言葉の儘を萬葉假名で書き記したものであるから、中々讀みにくく、解しがたいものである。

かやうな寶典の研究が完成されなかつたのは遺憾なことであるから、宣長は明和元年三十五歳の時から、古事記の起草にかゝり、寛政十年六十九歳の時に全部之を完成した。即ち七十二歳にて残する前四年に大成したのである。全部四十四卷、外に首卷一卷、目錄三卷、第十七卷の附錄一卷、合せて刊本は四十九冊となつてゐる。

契沖の萬葉代匠記と共に古學の二大著述と稱せられてゐる。

尋常小學
第六年學

地理科

隈江信光

目次 (前期)

第一	北海道地方	一
一	區域	一
二	地勢	一
三	產業	四
四	交通	八
五	都邑	一〇
第二	樺太地方	一二
一	區域	一二
二	地勢	一二
三	住民・產業	一五
四	都邑・交通	一五
第三	臺灣地方	一九
一	區域	一九
二	地勢	一九
三	產業	二二
四	交通	二六
五	住民	二八
六	都邑(附)澎湖諸島	二八
第四	朝鮮地方	三〇
一	區域	三〇
二	地勢	三〇
三	產業	三四
四	交通	三七
五	住民・都邑	三九
第五	關東州	四一
第六	我が南洋委任統治地	四三
第七	日本の總説	四五
第八	アジア洲	六四
一	總論	六四

緒言

最近地理教育の研究益々盛なるに及んで、之が指導書・解説書等、幾多有益なる参考書が、相踵いで出版されつゝあるが、併しながら夫れ等の多くは、何れも豊富なる教材の、具體的叙述に努めてあり、直ちに以て、教科書の代用ともなり、指導書ともなると言ふ態のものではない。固より夫れが、直ちに教科書の代用となり得ないからと言つて、無價値なものであると言ふわけではなく、夫れは夫れとして、意義あることであり、必要なことであるが、併しながら又他の一面には、最も簡単容易なる、教科書の本文そのものゝ解説を欲し、又細目式に、指導の要項及び時間の配當、指導方法上の概要等を、知悉したいと希求せられる人々もあるであらう。本書はさうした希望を有せられる人々のために、編纂したものである。

即ち要旨の項は、各課に對する指導の主眼點を、最も單的に記載したものであり、準備の項は、指導者が該課の取扱ひをなす以前に豫め準備すべき教具を指示したものである。而して解説の項に於ては、教科書の本文をその儘轉載して、解説を要する言語に就てのみ括弧内に解説文を掲げたものであつて、括弧内を省略すれば、教科書の本文と同一のものとなり、教科書の代用として、實地の教授に利用出来るやうになつてゐる。

而して尙ほ、特に本文外に於て、詳説しておく必要を認めた事項に就ては、解説文の後に、参考資料として掲げてあり、更に上欄には、各課の取扱ひ時間を、全教授時間と、教材量との上から、配當し、續いて指導要項として、該課指導の中心主題をあげ、之が取扱上の順序方法等に就ての、所謂方法一斑を略述してある。

固より筆者は、之を以て完全無缺の指導書であるとは言はない。地理教授の實際に於ては、地圖その他の直觀方便物を、如何に巧みに活用するかと重要な問題であり、更に又教材敷衍の精練繁簡の程度を、如何なる標準によつて規定して行くかも、重大問題である。單に教科書記載の事項を、千篇一律に、抽象文字を以て解説して、以て能事終れんと、することは出来得ないものである。

併しながら本書編纂の趣旨は、前述の如くであつて、手取り早く、指導全般に對する、要點のみを、窺知せんとする人々の参考として、編纂したものであるから、此の點を諒せられた上で、充分に御活用あらんことを希望する次第である。

時間配當(二時間)

指導要項

- 一 區域
 - 1 成立
 - 2 位置 (自然的位置 (關係的位置)
 - 3 行政の中心地
 - 4 面積八八、二六八 方釐
 - 5 人口二八二萬餘
 - 6 人口密度 三二人
- 二 地勢
 - 1 地形概観
 - 2 山
 - 3 川・平地

第一 北海道地方

一 區域 二 地勢 (第一週)

要旨

北海道の成立とその自然的位置及關係的位置を知らしめ、且行政的に定められた本地方の區域(特に既習の他地方と趣を異にする點に留意せしむ)並にその中心地を明かにすると共に面積、人口の大要と地勢の特色を授け、之等と文化の發達について特に讀圖によつて充分考察して行くのが要旨である

準備

日本全國—北海道地方圖—同行政區分圖—氣象圖—海流圖—日本各地の面積・人口比較圖—北海道の地勢斷面圖—駒ヶ岳、大沼公園、羊蹄山、旭岳、石狩川、神居古潭の實況を示す方便物。

解説

一 區域

北海道地方とは北海道本島、その近海の島々(奥尻島、利尻島、禮文島、水島、品島、鹽津島、多摩島など)及び千島列島(國後島、擇捉島、得島、占守島、阿頼度島)をいふ。この地方を管轄する北海道廳は札幌にある。

第一 北海道地方 一 區域 二 地勢

二地勢

北海道本島は南西部の半島(渡島)を除くと、大體菱形になつてゐる。

山

菱形の部分は、蝦夷山脈(東に北見山脈、日高山脈があり)が南北に連り、千島火山脈(千島列島中色丹島を除けば全部火山島で活火山も十五座に上り我國活火)が東西に通つてゐる。これ等兩山脈が出合つてゐる中央部は、旭岳(二名大雪山)の主峰とする大雪山火山群(他にオプタテシケ(二〇一三)など(東に雄阿寒岳(一三七一)米雌阿)があつて、土地が高く(他に石狩岳一九八)、本島の分水嶺となつてゐる。しかしその他の山地は一般にさほど高くはなく、處々に盆地(上川盆地など)もある。半島の部分には那須火山脈が南北に通つてゐて、駒岳(一四〇米で渡島富)・羊蹄山(一名マツカリ)など(その他惠山、鷲別山、惠庭山等より増毛火山群をおこし、(土と呼ばれてゐる)・利尻、禮文の火山島より樺太の海馬島、鶴城火山群に至る)の火山がある。

川・平地

中央部の分水嶺から出てゐる主な川は北に流れる天鹽川(三〇六軒内地第)・南東に流れる十勝川(九六)・南西に流れる石狩川(三六五軒内地第二の長流で流域一四、二)である。いづれも我が國屈指の大きな川で灌漑・發電に利用されてゐる。又その沿岸の平地(石狩平野、上川盆地、天鹽平野)は次第に開墾されて本島の主な農業地となつてゐる。中でも石狩川沿岸の平野は面積が最も大きく地味が肥

4 海岸—港

方法一斑

- 一 既知事項の整理
- 二 内地からの交通路を讀圖により調べしめる
- 三 本地方の範圍を決定せしむ
- 四 區分を説明し白地圖に記入せしめる
- 五 面積、人口の數字を與へ既習地方との比較をなさしむ
- 六 開發のおくれし理由考察
- 七 地勢圖により地貌を大觀せしむ
- 八 次時の豫告
- 九 白地圖に山脈火山脈及著名山岳の記入
- 一〇 山系の大要を説話し大分水嶺をなす

事實を明かにする

- 一 火山、高山を方便物によつて説話す
- 二 白地圖に河川、平地、海岸を記入せしむ
- 三 前項について説明し川の流向、平地の利用價值につきて考察せしめ特に石狩平野を詳述する

え開墾が進んでゐるから、農産物(麥、馬鈴薯)が殊に多い。この平野は工業(麥酒醸造、製粉)も發達し、交通も便利で、随つて人口が多く、處々に都邑がある。

海 港

海岸線の出入が少いので天然の良港がまされてゐる。しかし函館(青森との間は交)・小樽(浦潮斯徳とも)・室蘭・釧路の諸港はそれ〴〵港の設備が出来てゐて船の出入が便利である。

參考資料

一、羊蹄山 一名マツカリ岳又はシリベン山とも言ふが、尙その山容が富士山に似てゐる所から蝦夷富士とも稱せられてゐる。山頂の風光は實に雄大で本島第一の名山である。山麓より山頂にかけて植物の垂直的な分布が見られ、珍らしい高山植物が多いので夏季の候に登山するものが少くない。

二、石狩川 石狩川は源を中央高地の石狩岳に發し、上川盆地を過ぎて西方に向ひ、峽流神威古潭をつくり雨龍川・空知川の支流を合して石狩平野を屈曲しながら稍々南流し、江別川を合する頃から再び西方に流路をとり、札幌の北方で更に豊平川を併せて小樽灣に注ぐ河川で、延長三六五軒、流域一萬四千二百五十平方軒で内地に於いて信濃川につぐ第二の長流である。この川の流域には上流に上川盆地、下流に石狩平野がある。上川盆地は冬季は寒氣が酷しいが夏季は割合に高温である爲に、農業が盛んで、米作に於いては本島第一である。石狩平野は日本海と太平洋とを連ねる大平野で、地味肥沃で開拓も進み、農業・工業が勃興して交通も便になり、人口も多く都邑も發達して來た。

三、猿淵湖 北東部オホツク海に面せる潟湖で砂丘の發達してなつたものである。本島第一の大湖で湖岸線七七軒、面積一五四平方軒ある。細長い一條の砂嘴によつて湖口を塞がれその東端に於いて僅かに海水と通じてゐる。毎年十二月から翌年四月迄は湖面氷結してその上を人馬が自由に交通する。この地方のアイヌはこの季節氷上に出て鮭・鱒等を漁獲する。

三 産 業 (第二週—第三週)

要 旨

本地方の各種産業について既習事項との相關々係に於いて、その現況を明らかにし、既習地方と對比的に指導し、將來帝國北門の一大寶庫たるの事實に想到せしむるのが要旨である。

準 備

日本全圖—北海道地方圖—産業分布圖—各種産物比較表—教科書挿繪擴大圖—主要物産の標本類—本地方の生活狀況を示す方便物。

解 説

三 産 業

本島は、もと人口が至つて少く(明治五年九萬六千、明治三十年七十七萬、大正九年二三六萬、昭和五年二二八萬)、産業は進まず交通も不便であつたが、他の地方から(主として奥羽地方)移住して來る者が多く、人口は年々増加

時間配當(三時間)

指導要項

- 一 北海道本島の今昔
 - 二 水産業
 - 三 農業
 - 四 牧畜
 - 五 鑛業
 - 六 林業
 - 七 工業について
- 方法一斑
- 一 本地方の今昔を對比的に考察せしめ發達の狀況を概説する

二 自然的條件と相關的に産業を大觀せしむ

三 水産物生産額の最近の數字を與へて統計を作製せしむ

四 その販路について生活と連絡をとる

五 支應別農産のドットマップにより種々の事項を考察せしめる—且つ夫れ等の集散地を明かにし分布圖製作をなさしむ

六 大農法の農業組織を説話する—及び今後の發展を推究せしめる

七 牧畜は統計及び分布圖により説話し乳製品に對して説明する

して、今や二百八十萬を超え、多くの都會(函館、小樽、札幌、旭川)も出來、諸種の産業も大いに進歩してきた。殊に農業・工業の進歩は著しく(米について見ると明治三十五年に比べると)、生産額の多いことでは、いづれも從來本島第一であつた水産業(水産物は五千二百萬圓に對し)をしのぐやうになつた。

水 産 業

近海は、寒流(千島海流(親潮))・暖流(西側を對馬海流が流すが、夏季には日本海流も近海を流れる)があるのて魚類・海藻類が多く、世界で名高い漁場(世界三大漁業場と呼ばれ、カナダのニューファンドラ・さけ(その他、ます、鱈)等の産額の多いことでは、我が國でこの地方に及ぶ處はない。(殆んどの水産物(魚類)は約三千万圓に對し)は乾物(たらこ・鹽漬(まけ)・罐詰(かに)等に製造(水産製造物の價格は)されて、多くは函館・小樽・根室から内外各地に積出される。

農 業・牧 畜

この地方は冬は寒さがはげしい(札幌において一月の平均温度が零下六・三度)が、夏は割合に氣温が高い(札幌七月の平均温度は十九・二度である)ので農業には適してゐる。近年人口が増加し(大正九年より昭和五年に至る十ヶ年間の人口増加四十五萬餘に上る)、開墾が進むに従つて農業が著しく發達して來た。本島の耕地は大てい大きく區劃されてゐて、トラクター(耕作用率)などの機械をも(家畜の使)使用する。(米國式の大農法である。現在の耕地は可耕地の約九分の一を將來を期すべきである)農産物の主なるものは米・燕麥(陸軍の馬糧として)・じゃがいも(風土適當し品質よく全國)・豆(大豆、小豆)て、その他、薄荷(全國の三分)・亞

八 本邦鑛業に於ける
本地方の位置を統計
により示す

九 石炭の消費に關す
る地理的事象の説明

一〇 林業、工業を前
記の方法によつて行
ふ

一一 發展性を有する
工業について説明す
る

一二 如何なる教材も
生活化を離れてはな
らない。製紙、ピー
ルは好教材である

麻(布を製し又亞麻)・りんご(青森秋田に)・除虫菊(全國屈指の)・甜菜(本地方は中歐諸國と氣候が似てゐるから十勝、
も産額が多い。農産物の主な産地は石狩平野・上川盆地(旭川を中心)・十勝平野・網走附近であつて、
主な集散地は札幌・小樽・旭川・帯廣(十勝平野)である。

太平洋方面の平地では馬の牧畜が盛で、馬市が各地(就中釧路の西大樂毛)で開かれ、石狩平野では牛
の牧畜が盛で、乳製品(バター・チーズなど)の産額も少くない。(馬は二十六萬頭で全國第一、牛は二萬頭で多いとは云
はないが、中國、九州と共に三畜牛場となるであらう)

鑛業

鑛産物の中では石炭が主なもので、これに次ぐものは鐵(室蘭市の北)・金(鴻之舞、國富兩鑛山であつて)
・石油(全般に亘り試掘中であつて、現在數ヶ所)・硫黃(諸火山の火口に産し、内地の約四)である。石炭は石狩平
野の東にある石狩炭田(夕張炭坑、美唄炭坑、新夕張炭坑)がその主産地(本邦全産額の二五)で、この炭田は
筑豊炭田と共に我が國の大炭田である。こゝから出る石炭は多く室蘭・小樽から各地(内地では九
される傾)に送られる。

林業

本島には森林が甚だ多く(本島面積の七割に當り内地森)、えぞまつ・とどまつ・なら(からまつ)等は用材
(鐵道枕木、バルブ、)として小樽・釧路等の港から各地(國內)に送られる。

工業

苦小牧(室蘭本線に沿ひ王子製紙會社の大工場があり又石)・江別(札幌市の東)には大きな製紙工場があつて、
木材を原料(パル)として盛に洋紙を製してゐる。又函館附近にはセメント工場、札幌にはピー
ル工場・製麻(製粉)工場、室蘭には製鋼所(内浦灣の東にある重要な貿易港で、石炭木材を輸)があつて、それ
ぞれ多くの製品を出してゐる。かやうに工業が盛になつたのは主として原料及び石炭が得易
く、水力の利用も便利であるからである。

参考資料

一、水産業 本地方の主要水産物は鱈・柔魚・昆布・鮭・鱒・鱈・鱈・鱈・鱈等で、鱈・鮭・鱈・昆布の産額に於ては
本邦中その比を見ない。鮭については小學讀本卷三を参照されたい。鱈の漁場は後志から北見に至る西岸から
北岸にかけて地域で身缺鱈・數の子は食料とし、又は油を搾り、粕は肥料として用ひられる。鮭は沿岸到る
所に産し、石狩川・十勝川等の河川の漁獲も少くない。鱈は渡島半島と根室の近海がその主なる漁場である。
昆布も沿岸到る所で採取されるが就中釧路から花咲半島に至る近海が特に多い。
二、苦小牧にある製紙工場 苦小牧にある製紙工場は王子製紙株式會社の經營にかかるとある。運搬した
丸太を原料としてバルブを製造する。工場の經過は教科書の挿繪の中にも調木室、蒸煮室、製薬塔、水槽など
を見ることが出来る。支笏湖の水力を動力とし、豊富な木材によつて製紙し、従來外國に仰いだ新聞紙の原料
を供給し、現在全國新聞紙の約七割は本工場より提供される。

四交通(第三週)

時間配當(一時間) 指導要項

- 一 陸上の交通
 - 1 我が國鐵道の幹線
 - 2 主要なる鐵道線路とその起終點
 - 3 その他の支線
- 二 海上の交通
 - 1 海上交通の障害
 - イ 冬季風波、雨雪多し
 - ロ 太平洋方面のガス
 - ハ オホーツク海岸の流水
- 三 連絡船方法一斑
- 一 讀圖による本地方の交通の現況調査

要旨

本地方に於ける交通發達の現況を明かにすると同時に、本地方の位置、地勢、氣候、産業、都邑等との相關係を考察せしめ、その發達が如何に開發に密接な關係を有してゐるかに想到せしめるのが本課の要旨である。

準備

本邦交通圖—本地方交通詳細圖—北海道地方圖—氣象・海流圖—函館、小樽、室蘭等の港灣の實況を示す方便物—鐵道旅行案内—各地方鐵道密度表。

解説

四交通

この地方の最も重要な鐵道は函館本線(函館より旭川に至る)・宗谷本線(旭川より稚内に至る)・室蘭線(長萬部から室蘭を)・根室本線(室蘭から根室に至る)である。函館本線(延長四二五・一軒本地方の幹線であ)は函館から小樽・札幌・岩見澤(交通上の要地として石狩炭田を)・瀧川(交通上の要)等を経て旭川に至る線、宗谷本線(延長二八〇軒函館より二十二時間)は旭川から稚内に至る線である。室蘭線は函館本線の一驛長萬部から分れ、室蘭を経て岩見澤に至つて、再び函館本線と合する。根室本線(延長四四)は瀧川から分れ、東の方、狩勝峠(新日本八景・風光)を越え、帯廣(十勝平野の中)・釧路(釧路川口に臨み釧路平野の中心都會で木材、雄大を賞せらる)を経て根室(花

- 二 鐵道幹線を理解せしめ、その理由を考察せしめる
- 三 白地圖に線路を記入せしめる
- 四 海上交通不振の理由を説明する
- 五 主要諸港についてその重要性を説明する

半島にある開港場千島沿岸の漁業の根據地であるが冬季數ヶ月結氷する、人口約一萬八千)に達する。これらの線は共に我が國の鐵道の幹線の一部であつて、函館では青森と、稚内(鐵道連絡船を大泊との間に有し又)では樺太の大泊と鐵道連絡船によつて互に連絡してゐる。

その他留萌線(深川—増毛間)・名寄線(名寄より中湧別を経て遠)・網走線(池田—網走間)・釧網線(網走—釧路)・石北線(旭川—野付牛間)等が本島の主な鐵道線である。

海上の交通

近海は冬季、風波・雨雪が多く、又季節によつて(春夏の頃は)は太平洋方面には霧が深く、(ガスと呼ば)オホーツク海方面には流水が多いから、海上の交通はとかく故障が多い。しかし函館・小樽・室蘭・釧路の諸港は四季共に船が自由に出入する。中でも函館と小樽は殊に重要な港である。

參考資料

一、青函連絡船 鐵道省直營のものである。青森・函館は約六十哩(約一軒)所要時間四時間半であつて、宗谷海峡の稚泊連絡船、關門海峡の關門連絡船、朝鮮海峡の關釜連絡船等と共に、日本に於ける幹線を連絡する重要な部分である。此の間を連絡する汽船は現在左の四隻である。

船名	噸數	定員	船名	噸數	定員
1. 飛鷺丸	三四五九噸	八九五人	2. 津輕丸	三四八四噸	八九五人
3. 松前丸	三四八四噸	九八五人	4. 翔鳳丸	三四六〇噸	八九五人

要旨

本地方における主なる都邑の現状と、その特異性並に發達の原因に就いて明らかにし、更に千島の地理の概要及びその國防上の重要性を知らしめるのが本課の要旨である。

準備

北海道本島地圖—同都邑分布圖—同主要都市の景觀を示す種々の方便物—千島列島圖—世界全圖。

解説

五都邑

本島で都邑の多い處は、産業の盛な石狩川沿岸の平地及び半島(渡)の部分の海岸である。都邑の中札幌(石狩平野の南西隅豊平川に跨つてゐる。道廳、控訴院、北海道帝國大學及びビール、製麻等の工場がある。明治初年に生れた新しい街で市區井然として若い街の景觀をもち、内國商業も盛で北海道文化百毅の中心地。人口約十五萬)・小樽(石狩平野の門戸に當り港の設備よく本島西北の商權を握り内外の貿易が盛である。人口約十三萬)・函館(天然の良港で青森に連絡線を有し本地方の關門であると共に開港場としても盛で太平洋)の三市は最も重要なものである。中でも札幌は北海道地方での政治の中心地で、又商工業のさかんな處である。北海道帝國大學もこゝにある。市街は一體に道幅が廣く、市區が正しく區劃されてゐる。小樽・函館はいづれも海陸交通の要地で、旭川(上川盆地に位し開拓地の中心都市、市區井然第七師團司令部がおかれて急激に發展した町である。附近は地味肥沃で農産

時間配當(一時間)

指導要項

- 一 都邑の發達せる地域
- 二 主なる都邑について
- 三 千島列島
- 方法一斑
- 一 都邑の分布は交通の所で指導してあるから改めて指導しない
- 二 主なる都邑は産業交通の所で説明したからこゝでは補説の程度にとどめたい。
- 三 千島列島が火山島より成ることを明にし地勢と産業特に漁

業と夏季移住者について説明す

- 四 本列島の國防上、産業上の意義を認識せしめる—そのためには世界全圖が必要である

参考資料

多く又製材、マツチの軸木などの工場がある。氣候は夏季の較差が著しく大である。人口約七萬)は陸上交通の要地である(函館本線、宗谷本線及び石北線等がある)

一、札幌市街
札幌市は新興都市としての景觀を遺憾なく發揮した宏大な市街で、道路は百數十米の幅員を有し區劃井然として、恰も舊平城京の如くである。この新興都市を飾るアカシヤ並木、北海道帝大の寮歌に見える手稻の山廣漠たる石狩の野に燦として文化の洗禮を浴びた札幌市は、實に一つの近代都市の典型と云ふことが出来やうと思ふ。

六 千島列島

(延長千二百軒 面積一万六千方軒 人口一萬七千 一方軒に付約一人)

千島列島とは擇捉島以下三十餘(主なるものは國後島、得撫島、新知島、捨)の島々をいふ。その北東端の(最北端は阿頼)占守島は千島海峡を隔て、ロシアのカムチャツカ半島と相對してゐる。この列島は千島火山脈(十五座の火山)が通つてゐて、地勢がけはしく(山岳丘陵起伏して耕地、平地少く海島は絶壁が多い)、地味もやせ、冬の寒さもはげしいから、住民も少く、(總數一萬七千人餘)陸上の産物(僅かに國後島に多少の適耕地取に従事するのみ)も極めて少い。けれどもさけ・ます等(鱈、鯨、海)の水産物が多いから、夏の間は漁業のため各地からこゝに来るものが少くない。

参考資料

第一 北海道地方 六 千島列島

一、千島列島の沿革

千島列島中得撫以北の諸島は徳川幕府の末頃までその所屬不明であつた。正徳天明年間にロシア人のこの地に住居する者多く我が國の經營防備の疎なるに乗じて次第に南下し遂には國後、擇捉の兩島にまで占居するに到つた。其處で幕府は幕吏を派して露人を逐うたが當時の微弱なる我が幕府の勢力では千島より露人を驅逐することは頗る困難な事であつた。その後露國と會議の結果擇捉、得撫の間を以て國境と定め、樺太は共有地として別に境を設けない事にした。然るにその後明治八年に至つて再び樺太の國境問題が起り、兩國間に紛擾が絶えなかつたので我が政府は開拓次官黒田清隆の樺太可棄論を容れて遂に同年駐露公使榎本武揚に命じ、露國と交渉せしめて樺太千島の交換條約を締結し、爾來樺太は露領となり、千島は日本の領土となつた。後明治三十八年のポーツマス條約の結果、再び樺太南半は帝國領となつたのである。

第二 樺太地方

一 區域 二 地勢 (第四週)

要旨

樺太地方の位置、境界、四周等について明かにし、特にソヴィエツト聯邦との關係を知らしめ、行政上の中心地

時間配當(一時間)
指導要項

一、區域

- 1 全體から見た自然的位置
- 2 關係的位置
- 3 樺太の沿革と國境
- 4 面積と行政上の中心地

二、地勢

- 1 丘陵性で南北に細長い
- 2 山
- 3 平地と川
- 4 海岸

方法一覽

- 一 その自然的位置より見たる國防上—即ちオホーツク海・日本海の海上權に於ける位置を認識せしめる
- 二 四周關係から國民的活動の北方に於ける

を授け、次で本地方の地勢の概要と、その特相を知悉せしむるを以て本課の要旨とす

準備

世界及日本全圖—樺太地方圖—日本各地方面積比較圖—樺太地方地勢圖—同斷面圖—日露國境の林空とその境界標を示す繪畫・寫真類。

解説

一 區域

樺太地方とは樺太島の南半部をいふ。(全島の約四割六分て面積三萬六千) この地方を管轄する樺太廳は豊原にある(その下に七支廳がおかれて)。(方料であつて臺灣と略々等しい)

二 地勢

この地方は北はロシアの樺太(サガレンと呼)と地つゞきて、北緯五十度の線が國境になつてゐる。(經緯度によつてゐるは合衆國とカナダの境にあるが、稀なものであつて、ポーツマス條約の果日本領となり、明治四十一年陸軍少將大島健一氏等が天測によつて境界を設立した) 西は間宮海峽を隔て、シベリヤ(沿海州)と相對してゐる。

山・川・平地

地勢は大體丘陵性で(最高は敷香山で一)て南北に細長い。樺太山脈は縦に走つて主な分水嶺となつてゐる。(が山容は)樺太山脈の東には、北部(東北山脈)にも南部(鈴谷山脈)にも、小さな山脈があつて、これと樺太山脈との間には細長い平地がはさまれてゐる。北部の平地(幌内川流域)には幌内川(露領より)

流れて水量豊であつて曲流で名高く上流(及び北流する)があり、南部の平地には鈴谷川(及び北流する)がある。

海 嶺

海岸線の出入が少く(東側に多来加灣、南に亞庭灣)、その上冬季は沿海が凍る(十二月から四月まで結氷)ので良港がない。大泊は内地との交通上重要な港(稚内との間に稚)であるが、冬季は砕氷船を使用しなければならぬ。真岡(西海岸第一の港。海流の影響で不凍)・本斗(鐵道の起點で真岡と)はこれに次ぐ港で、いづれも不凍港である。

參考資料

一、國境 國境は北緯五十度、東西一三二杆、針葉樹の密林を幅十米に一直線に切開いて林空をつくり、その中に四箇の天測境界標と、十七箇の中間境界標をおき、境界としてゐる。境界標は何れも花崗岩で造り、臺はベトンで堅め、高さは約七〇釐ある。而してその周圍は四米平方の木柵で圍まれてゐる。南面には菊花の御紋章を高彫にして、其の上に大日本帝國と記し、下に境界と凹刻してある。北面には双頭鷲を彫つて、その上に露文で「ロシヤブルチャ」(露國境界)と記し、アストロ四千九百六年とあつたが、革命後その鷲の御紋章は消された。此の境界を決定するためには、日・露兩國から委員が出て、明治三十九年七月から翌年十月迄かゝつて完成したもので、中央から東部を日本、西部をロシヤが分擔して、完成したものである。

- る根據地に當る
- 三 沿革については簡單に問答的に進める
- 四 面積は各地方の面積比較圖による
- 五 地勢が北海道に關係をもつから、それと對比的に見て行きたい
- 六 平地についてはその利用價値の主要を與へておきたい
- 七 「港」は氣候と關係的に説明し不凍港と海流の關係も考察せしめる
- 八 白地圖に地勢圖を製作せしめ十七頁の斷面についても説明する

時間配當(二時間)

指導要項

- 一 住民
 - 1 總數約三十萬
 - 2 大部分領有後の移住者
 - 3 土人について
- 二 産業
 - 1 農業 その現状と不振なる理由
 - 2 林業
 - イ 森林面積の約九割
 - ロ 材種
 - ハ 工業—パルプ製紙
 - 三 鑛業—石炭
 - 四 水産業
 - イ 近海水産物

三 住民・産業 四 都邑・交通 (第五週)

要旨

住民・産業・都邑・交通等は前時の位置、地勢、氣候と妙なからざる因果的な關係をもつてゐる。されば是等の現況を明らかにすると共に住民の少なき、産業の不振、都邑交通の發達のおくれたる夫々の理由を相關的に考察せしめ、本地方が將來の開拓に俟つことの重要性を取扱ふのが主要な着眼でなければならぬ。

準備

日本全圖—極東地圖—本邦人口分布圖—アイヌ、ギリヤーク人の生活状態を示す方便物—等温線圖—海流圖—産業分布圖—主要物産年産額一覽表—大泊、豊原、真岡及び海島島を示す繪畫、寫真類—パルプ、おつとせい等その他主要産物の實物・標本類。

解説

三 住民・産業

住民

住民は約三十萬(領有當時僅かに一萬數千であつたがかくの如き膨脹を見た。内地人約二、その大部分はこの地方が我が領土となつてから後(それ以前はロシヤの)流刑植民地であつた)の土人も住んでゐるがその數は極めて少ない(現在數約二千で衰亡の)ヌ人・ギリヤーク人等(オロチョン)の土人も住んでゐるがその數は極めて少ない(道をたどりつゝある)

産業

農業

この地方は我國で最も北にあるので、冬季はその期間が長く、且寒さがはげしい。(敷香は年平均零下の割合では明治四十一年一月に)それ故地味の肥えた處が處々にあるにも拘らず(鈴谷、内淵川沿)、農業はあまり發達してゐない。(現在耕地面積は可耕地の六%にしかすぎない現狀で將來に期待すべきものがある。農産としては麥類、豆類、根菜、葉菜、甜菜が栽培されるが近年米作の曙光を見るに至つた)

林業・工業・鑛業

しかし森林は甚だ多く(全面積の九十%)で、とどまつ・えぞまつ・からまつなどがたくさん伐出される。随つてパルプ製造業(植物の纖維から)及び製紙業(王子製紙株式會社、樺太工業株式會社、富士製紙株式會社)が各地で極めて盛である。パルプ製造業及び製紙業はこの地方第一の産業である。樺太山脈(中生層と第三紀)には石炭が廣く分布され、各地(浦北上炭鑛東日)で採掘されてゐる。水産業

近海ではにしんをはじめこんぶ・たら・さけ・ます(その他鱈、蟹)が盛にとれる。漁期には他の地方から來て漁業に従事するものが多い。水産業は又この地方の重要な産業である。海豹島はちつとせいの繁殖する處で(露領コンマンドルスキー諸島、米領アリピロフ群島と共に)その繁殖を保護するために勝手に捕獲することが禁じられてゐる。(日露米の三國の間に條約がある)夏から秋にかけて無數のおつとせいがこの

海豹島のおつとせい

- 一 都邑が少ない一分布圖
- 二 大泊・豊原・知取・眞岡について
- 三 交通 東岸線と西岸線と横斷線
- 四 方法一斑

一 住民の僅少にして且種類多き理由を考察せしめる

二 産業は尙幼年期の産業でその原因を研究せしめ將來發展性ある工、水産、林、鑛業につき詳説し北門の寶庫たる本島の發展は國民の重大なる責任なる事に想倒せしめる

島の海岸に群集してゐる有様は誠に奇觀である。

參考資料

一、住民

年 度	内地 人	朝鮮 人	土 人	外 人
明治四十三年	二八、六八八	三三三	二、一〇三	一九三
大正元年	三九、八一	三五	二、一五〇	一四二
大正十年	一〇一、三三九	四六三	一、七二四	一一五
昭和元年	一九七、九六五	三、五七四	一、八一四	二二〇
昭和五年	二七七、二七九	五、三六〇	一、九三三	三五八
昭和六年	二七九、二〇四	五、八八〇	二、〇〇九	二八四

土人種族別人口 (昭和六年)

- アイヌ 一、五三三
- オロツコ 三二四
- ニクブン 一一一
- キーリン 二〇
- サンダー 九
- ヤクト 二

第二 樺太地方 三 住民・産業

- 三 植民地であるが他と異り第七師團の管轄であり貿易上内地同様に取扱はれてゐることに注意すべし
- 四 「準備」の項に記せる方便物は力めて利用すべきである
- 五 稚泊連絡線より大泊より榮濱に至る鐵道及び沿線の豊原・落合・知取等について授く
- 六 豊原より横斷線を授け眞岡を中心として西海岸の都邑にうつる
- 七 大泊・豊原等についてはその發達の原因を明かにしたい
- 八 本島の開發は移住

民と交通の發達にあることを考察せしむ
九 白地圖に鐵道都邑を記入せしめる

【附記】

昭和七年十二月十三日勅令を以て樺太施行法律特例中改正の結果、樺太に於ける「土人」の中より「アイヌ人」といふ文字が除かれる事となり、次で十四日陸軍省令を以て、アイヌ人の男子に兵役法を適用し、之と同時にアイヌ人の戸籍届に關する司法省令の公布を見、いづれも八年一月一日より施行された。斯様な次第であるから今後は樺太のアイヌ人も、立派な日本國民の一員として、内地人と全く同等の權利と義務を賦與されることになつたわけである。

二、海豹島のおつとせい 本島は露領のコンマンドルスキー群島と米領のプリピロフ諸島と共に北太平洋に於ける臘酌獸の三大棲息地と稱せらるゝ所で、政府では樺太廳から監視員を出してその蕃殖保護にあたらせてゐる。臘酌獸は、海豹と共に哺乳類中の鳍脚類に屬し充分成長したる牡は長さ二米に餘り、重量は約一一〇〇斤に及ぶ。併し牝は牡に比して甚だ小で、長さは一四〇斤に満たない。

この獸は頗る注意周到で、多數群をなして眠る時には、必ず一二頭の番兵をおいて警戒せしめる。毛色は年齢によつて異なるが、普通は紫褐色で、老年になると濃くなり光澤を増して來る。食餌は魚類、鳥賊類並に浮游動物で、毛皮は帽子襟巻に用ひられ肉は食用となる。

四 都邑・交通

樺太地方は都邑が少い。主なものは大泊・豊原・知取・真岡である。大泊は樺太地方の門戸で稚内・小樽・函館の諸港と航路が相通じ、殊に稚内との間には鐵道連絡船が往來してゐる。
(冬季結氷するが砕氷船が用ひられる。灣内は水が浅く貿易はそれほど振はな) 豊原は政治の中心地で (鈴谷川上流沃野が本地方の關門である。バルブ工業盛で無線電信局がある人口約六萬八千)

區整然樺太廳、樺太神社があり近年バルブ工業が起つた。市街の周には防風林があり人口約六萬三千 (西岸第一の要津で漁業の中心で市況盛であつて冬季は不凍港として榮え) 知取は製紙業 (富士製紙株式會社) によつて發達した處である。 (人口約三萬餘) 鐵道は大泊を起點とし豊原を経てオホーツク海の沿岸に通ずるものと (樺太廳鐵道本線と呼ばれ) 真岡を中心として西海岸を走るもの (野川本斗間樺太廳鐵道西海岸線と呼ばれ延長一四〇・三軒) とがある。又この兩線を連絡するために豊原・真岡間には横斷線 (豊真線と呼) がある。

第三 臺灣地方

一 區域 二 地勢 (第六週)

要旨

區域の取扱に於いてはその成立及行政區分と、その中心地を明かにすると共に、四周關係を説明し、特に發展的な位置にあることに留意せしめる。又地勢教材に於ては本地方に於ける山・川・平野・海岸等の分布状態や、その特異性を明かにすると共に、之等の自然現象が本地方の人文發達と如何なる因果關係を有するかについて知解せしめねばならぬ。

準備

第三 臺灣地方 一 區域 二 地勢

時間配當(二時間)
指導要項

- 一 區域
- 1 成立
- 2 管轄 (五州三廳 總督府)
- 3 自然的關係的位置
- 二 地勢

世界地圖—日本全圖—臺灣地方圖—同行政區分圖—同地勢圖—同橫斷面圖—本邦主要高山比較表—新高山、淡水溪、高雄港及び東岸の絶壁等を示す方便物。

解説

方法一斑

- 一 本地方に關する既知事項を整理し成立・沿革・行政區分・四周關係等を問答的に取扱ひ地勢を大觀せしむ
- 二 本邦に於ける本地方の種々の點より見た位置的意義を既習の樺太等と對比的に考察せしめる
- 三 獨自學習を主として、兒童に發表せしめ、地勢に於いても既習地方と對比して發表せしめ地圖に記入せしめる

二地勢

臺灣島(面積三五、九七四平方軒、人)と澎湖諸島(澎湖、漁翁、白沙の三大島以下數十)とを合せて臺灣地方といふ。この地方は行政上五つの州(臺北、新竹、臺中、高雄、臺南の五)と三つの廳(臺東、花蓮港、澎湖)に分たれ、これを總轄してゐる臺灣總督府は臺北にある。

臺灣島は南北に長く(長さ約三)、南はバシー海峡を隔て、アメリカ合衆國領のフィリピン群島と相對し、西は臺灣海峡を隔て、支那(福建)と相對してゐる。澎湖諸島は臺灣海峡にある。

山・平地

臺灣島の東部は大てい山地で、西部は平地が多い。東部の山地は高い山脈がいくつも相並んで(東に地溝帯があつて臺東山脈は區別されるがこの地方の脊梁をなす山脈は一括して臺灣山脈と呼ばれてゐる)南北に連なつてゐて、地勢が極めてけはしい。その主脈は臺灣山脈で、本島の大分水嶺をなしてゐる。(多くの河はこの山地に發源する)その中には富士山(三七七)よりも高い山々があつて(新高山(三九五〇米)次高山(三九三一米)秀姑巒山(三三八三)、殊に新高山は高さが三千九百五

四 本地方を西部、中部、東部と三地方に分つて地勢を細觀せしめその各の研究を綜合して對比的に指導する

- 四 本地方を西部、中部、東部と三地方に分つて地勢を細觀せしめその各の研究を綜合して對比的に指導する
- 五 この場合自然現象と文化の發達についても考察せしめる
- 六 教科書の斷面圖を吟味し斯うした種類の作業を課すのも面白い
- 七 著名河川・山岳等については方便物によりその特色を明かにし郷土のそれと比較することは一層有効である
- 八 讀本卷六「第二日本の高山」を参照させるがよい

十メートル、我が國第一の高山である。

東部の山地の東側(花蓮港廳)は傾斜が急で、(臺東山脈が忽ち海にのぞんでゐる故)海岸は處々絶壁(二千米にも達する断崖の)をなしてゐる。それ故道路もまだよく開けず(たゞ地溝帯にそふものがあつて横断路としては花、良港も少く(蘇澳、花蓮港、臺東の)陸上(鐵道が漸く花蓮港か)海上、共に交通があまり便利でない。随つて産業の發達も遅れてゐる。(都邑の分布から言つて)しかしこの山地の兩側は、東側よりも傾斜がよほどゆるやかで、次第に廣い平地となつてゐる。(臺灣西部平野と)この平地は住民が最も多く(都邑も)、交通の便(陸上海)も大いに開け、農業・工業がよく發達してゐる。

海

西海岸には遠淺の處が多く、海岸線の屈曲が少いから、良灣が殆ど無く、港には淡水河の下流を利用した淡水(もと支那との交通で頗る繁榮したが港内水浅く大)と、海岸に港としての設備を施した高雄(潟湖の口を利用して築港によ)とがあるばかりである。

北部の東支那海沿岸には基隆がある。この港は實に臺灣唯一の自然の良港(灣が深く入りこんで水深鳥があつて)で、港の設備もとのつてゐる。

川

臺灣山脈から流れ出る主な川は淡水河(〇三)濁水溪(一六五軒で本島第一の長流である)下淡水溪(六軒)で(他に曾文溪(一三〇軒)大肚溪(六軒)など)

一、(二軒)八獎溪(一)、いづれも西部の平地を流れてゐるが、川水が季節によつて(乾季と雨季)著しく増減するので、船の交通にはあまり利用されない。しかしこれ等の川からあまたの疏水運河が開かれて、灌漑に利用されてゐる。(本地方の河川の特徴は山地から平地に出る所から多くの河道を持つてゐる。てゐる爲に交通上に大なる支障を興へる原始的な河川の形式である)

参考資料

- 一、沿革 本地方は明治二十七八年戦役の結果我が領土となつたことは周知の事であるが夫れ以前から我が國とは交渉のあつた所である。徳川時代、一時和蘭人が占領した頃、濱田彌兵衛が豪勇を振るつた事もあり、日本人の血を受けた明の遺臣鄭成功が一時この地方に王城を築いた事もあつた。明治七年我が國人が漂着し土人に惨殺されたので、支那に抗議したが化外の民として受けつけなかつた。そして征臺の役となつたのである。その後二十七八年戦役の下ノ關係の結果、日本の領土となつた。
- 二、新高山 海拔三九五〇米本邦第一の高山で最も高峻なる山頂は僅かに十數坪の廣さしかなく、風雨の侵蝕によつて崩れ易くなつてゐるといふ。山麓には熱帯樹林があるが高度を増すにつれて温帯林となり、寒帯林となつて八合目から上には草木の姿を見る事は出来ない。支那人はもこの山を玉山と呼んだが、長くも明治天皇が新高山の名稱を與へられた。

三 産 業 (第七週—第八週)

要 旨

時間配當(三時間)

既授の位置、地勢並に夫れと有機的關係を有する氣候と相聯關して發達した本地方の産業の實況を明かにし、特に本地方の特殊物産について知解せしめる。本地方が寶庫と稱せらるゝ所以に就いてはその天産と我が政府の開發に對する努力にまで想到せしむるのが本課の要旨である。

準 備

世界及日本交通圖—臺灣地方圖—本地方産業分布圖—主要物産の比較表—氣象圖—海流圖—本地方の特色を示す種々の方便物。

解 説

三 産 業

臺灣地方は我が國で最も南にある上に(北回歸線が殆んど)近海に暖流(日本)があるので、年中氣候が暖かい。(臺北に於ける年平均温度は二一・六度一月の平均すら一五・三度である)嘉義から南は(嘉義から南へ約四軒鐵道に沿)熱帯にあつて氣温が殊に高い(南方恒春では前に三十五度)又一般に四季の區別がはつきりしない。(較差が少く海洋)かやうに氣温が高い上に雨量も多い(臺北に於いては約二一〇〇耗全島一帯に多い)から、樹木が繁茂し、大きなひのき・くすのき、熱帯植物のがじまる・びんらうじなどが森林をなしてゐる。(熱帯的景觀を)又バナナ(内地のバナナは入さ)・パイナップルをはじめ種々な熱帯の果物(パイナップル、龍眼)が多い。家畜には水牛・豚などがある。水牛は性質がとなく、力が強く、暑さに堪へるので耕作に使用され、臺灣では農業にかくことの出来ないものになつてゐる。(粗食にたへその肉は食用とされ)力役用としては和牛にまさる)

第三 臺灣地方 三 産業

指導要項

- 一 氣候
- 二 生物
- 三 農業
- 四 工業
- 五 林業
- 六 鑛業
- 七 水産業
- 法方一斑
- 一 氣候及特殊物産に關する既有知識の發表を基にして指導する
- 二 パナ、・パイナップルその他樟腦水牛の角細工等兒童の生活環境に即して指導して行きたい
- 三 本地方の氣候雨量の分布圖を作製せしむ
- 四 農・工・林業につい

農業・工業・林業

- 五 三地區について前記三項を中心として産物の分布を白地圖に記入せしめながら説明する
- 六 分布圖、産額比較表の活用
- 七 海外への輸出品については販路・市場における聲價及效用をも知らしめる
- 八 鑛業水産業を指導し産業の總括をなす
- 九 鑛産についてはグラフ等によつて對比的に授け白地圖に記入せしめる
- 一〇 天日製鹽の説明
- 一一 全課を了へて兒童の製作せる分布圖等により總括をなす

臺灣は農業が盛で、米・さとうきび・さつまいも・バナナ・茶(包種茶、烏龍茶に製)等を多く産する。米は農産物中第一位を占め、主に西部諸州(臺中、臺南、高雄などの諸州)の平地に産し、年二回収穫される(第一期の收穫後七、八月に植付けを行ひ、十月から十二月迄に收穫す。收穫量は、第二回の時が多い)。内地に移出される額も少くない。茶は北部の丘陵地に産し、臺北で精製され、海外にも輸出される。(支那、南洋、印度)さとうきびは主に中部の平地(臺中州)及び南部の平地(臺南州)に栽培され、嘉義・臺中附近をはじめ各地の製糖工場(屏東など最も有名である)で砂糖に製造される。砂糖は臺灣第一の工産物で、多く内地に送られる(内地消費量の約六割は)。臺灣山脈にはひのきの良材が多く、中には年輪が凡そ三千、直径が七メートルもあるものもある。阿里山(嘉義の東四十軒の所にあり廣大なる森林がある)では盛にこの良材を伐出し、鐵道を利用して各地に輸送する。随つて製材業も處々に起り、殊に嘉義には東洋屈指の大製材所があつて、製材高が甚だ多い。(尙本地方の面積の約六五パーセント)中部・北部の山地では、くすのきから樟腦及び樟腦油(大部分はセルロイド工業に用ひられ又驅蟲劑、臭劑、醫藥用、燒煙用に供せられる)を製し、基隆から内外各地(くすのきの分布はこの附近のみであつて歐米諸國にまで輸出される)に送り出す。樟腦は本島の特産物で、外國にも有名である。

その他アルコール・肥料・セメントの製造など(その他種々の工業が近頃盛になつて來た。詰紡績)種々の工業が近頃盛になつて來た。

一二 本地方産業の領有前後に於ける事情を明かにする

鑛産物の主なものは石炭(基隆附近)・金(金瓜石、瑞芳)・石油(現在採油量は多くないがその分布は相當廣い様子である)である。石炭は鑛産物中最も重要なもので、基隆附近が主産地である。金は金瓜石、石油は錦水・出礦坑が主産地である。

水産業

たひ・まぐろ・かつをの漁獲高が多く、魚類の養殖も盛である。又西海岸では砂濱を鹽田に利用し、天日によつて鹽を製してゐる(臺南州最も多く臺中、高雄之に次ぐ)

參考資料

一、天日製鹽 雨量の少い地方では海水を釜で蒸發せしめて鹽をとるが、この地方では粘土質の稍以堅い土質へ綺麗な海水を導き天日を以て水分を蒸發せしめる。先づ第一蒸發池から第二蒸發池へと送り段々濃度を増し結晶せしめる。所要の日数は約十日である。この方法は山東省、關東州、朝鮮にも行はれる。

二、主要物産々額表(昭和六年統計)

米	八五〇〇萬圓	バナナ	一〇〇〇萬圓
大豆	五〇萬圓	鳳梨	四二〇萬圓
甘蔗	五六五〇萬圓	鹽	八五萬圓
甘藷	一三四〇萬圓		

四 交通 五 住民 (第八週)

要旨

臺灣地方の水陸交通の現況並に地勢産業との関係を明かにし、更に本地方の住民の状況を理解せしめ、本島の投資植民地たる所以を明かにする。

準備

世界及日本交通圖—臺灣地方圖—本地方交通詳細圖—基隆港、高雄港の實況を示す方便物—住民分布圖—各民族の特徴を示す方便物。

解説

四 交通

陸上の交通

西部の平地には鐵道の便が大いに開けてゐて、その幹線(同時に本邦の幹線の一部をなす)は基隆を起點として南方に通じ、臺北をはじめ臺中・嘉義・臺南等主な都會の連絡をとつて高雄に達してゐる。(西部從實延長四〇)又東部の太平洋沿岸地方にも南方に通ずる鐵道がある(臺東線、臺東花蓮港間延長一七二・三軒五・九軒)その他軌道及私設のもの極めて多し—海上の交通

時間配當(一時間)

指導要項

一 交通

1 陸上の交通

イ 西部平野の交通

ロ 東部の交通

2 海上の交通

二 住民

1 支那民族本島人

2 内地人

3 土人

方法一斑

一 交通の發達は産業の發達に深い關係があるから産業分布圖との對照によつて鐵道の使命などを考察せしめたい

二 白地圖に記入せしむ

三

住民については領有後久しきにかゝはらず内地人少き事實を知らしめ移民による發展の緊要を知らしめる

四 人口分布圖を作製せしめ産業分布圖との對照をなさしむ

五 土人については「第一日本」との連絡が必要であらうと思ふ

臺灣には良港が少ないので海上の交通は不便である。しかし北部の基隆と南部の高雄には港としての設備がととのつてゐるので、船の出入が便利である。(その他舊時代の港として淡水、鹿港、安平などの町があるが現在殆んど振はない)隨つて内地の諸港(神戸、横濱、門司、那覇など)をはじめ、支那(天津、廣東)、東南アジアの諸島の(ジャワ、スマトラ及びフィリピンなど)各地の港と航路が開けてゐる。

參考資料

通信



五 住民

臺灣地方の人口は約四百七十萬である。(蕃界の生蕃を含まず)その大部分は支那民族(漢族)で、大てい西部の平地に住まつて、農業・商業を營んでゐる。内地から移住してゐるものは二十餘萬、又土人の數

は十餘萬である。この土人は多く山地に住まつてゐる。

参考資料

一、昭和六年末に於ける人口の現況

内地人	二四三、八七二人
本島人	四、四二六、一二二人
生蕃人	八八、六九八人
外國人	四五、二八四人

土人

タイヤル族	三三、三〇二人
サイセツト族	一、三四〇人
ブヌン族	一七、九三五人
ツオウ族	二、一九七人
パイワン族	四一、七四六人
アミ族	四四、一八七人
ヤミ族	一、六七三人
その他	五六人
計	一四二、四三六人

六 都邑 附 澎湖諸島 (第九週)

要旨

本地方に於ける都邑の分布状態並にその現況を知らしめ、是等の發達原因を推究せしめると共に澎湖諸島の一般を知らしめ、本諸島の交通上・國防上の位置を理解せしめるにある。

時間配當(一時間) 指導要項

- 一 都邑の分布—西部
- 二 基隆

三 臺北

四 幹線に沿ふ主要な都會について

五 澎湖諸島について

方法一斑

- 一 都邑については既習の交通・産業の所で説明してゐる點が多いからその整理をかね且特殊性を考察せしめる爲に發達の原因を考察せしめるとよい
- 二 産業交通の分布圖に都邑を記入せしめる
- 三 澎湖島の馬公の要港に就ては屏東の飛行場と共に國防上の重要性を知らしめる
- 四 簡単に臺灣地方を復習する

準備

日本全圖—極東地圖—人口分布圖—臺灣地方圖—澎湖諸島圖—主なる市街圖—及び市街の實況を示す方便物。

解説

六 都邑 附 澎湖諸島

西部の平地は産業が發達し、交通も便利であるから、人口が割合に多く(臺灣地方の面積は三五九七四方(約四百)餘に當つてゐる。都邑も多く、その主なものには鐵道の幹線に沿つてゐる。基隆は臺灣の門戸で、船の出入が多く、商業が盛である。(天然の良の設備よく本島一の貿易港で移輸出品は米、金、砂糖、樟腦、茶、砂糖、バナ)臺北は政治(總督府)・商業・陸上交通(淡水線)の中心地、道幅が廣く清潔で、洋風の大きな建物が立並んでゐる。臺北帝國大學もこゝにある。

(その他高等法院、臺灣軍司令部、醫專、高農、高商、高校がある。大稻埕は茶の製造取引)臺北から南には臺中(大肚)が盛である。市の北方に臺灣神社があり北白川宮能久親王を祀る。人口約二十四萬九千)臺北から南には臺南(大城に位し臺中州の首邑で新式の都市である。米、バナ、甘蔗)・嘉義(臺南州の中央に當り製糖、製材が盛で南)・臺南(本島第二の都會で砂糖の取引が盛である。商業、専門學校)・高雄(基隆につぐ良港で築港以來市況盛を極め米、砂糖を輸出があり往時の首都で赤崁城や臺南城がある。人口十萬一千)等の都會があつて、いづれもその附の橋立の趣がある)・屏東(鳳山の東にあつて製糖業の中心地である。又陸軍)等の都會があつて、いづれもその附近の商業の中心地となつてゐる。又嘉義・屏東は工業が盛な處で、高雄は海陸交通の要地である。東海岸には花蓮港がある。(花蓮港の主邑で臺東との間に諸川の沿岸を連)その附近には近頃内地人の村

が多くなつて、さとうきびの栽培が次第に行はれてきた。

澎湖諸島

澎湖諸島は岩(玄武岩)の多い低い(最高の所でも五十米に達しない)島々であるが、臺灣海峡にあるので、交通上の要路に當つてゐる。その中で最も大きいのは澎湖島で、海岸線は出入が多く、海軍要港の馬公港がある。(海峡の避難港の特) (別開港場である)

参考資料

一、澎湖諸島 大小六十四箇、大屯火山脈に属する低平な島々で高い所でも海拔五十米にみえない。海岸には珊瑚の跡がある。風強く雨量が少ないので喬木少く生産力に乏しい。農産としては僅かに少量の落花生、甘藷、高粱、南瓜の産がある。住民の居るのは二十八島で多く漁業に従事し、米は本島より買入れる。面積は合せて六十餘方軒しかない。

第四 朝鮮地方

一 區域 二 地勢 (第九週—第十週)

要旨

時間配當(二時間)

指導要項

- 一 區域
- 1 成立
- 2 管轄
- 3 自然的關係的位置

二 地勢

- 1 地形
- 2 山
- 3 川、平地
- 4 海岸

方法一環

- 一 位置については、特に關係的位置に留意せねばならぬ
- 二 朝鮮と我が國の歴史關係にまで、簡単に及びたい
- 三 行政上の区分は白地圖に記入して行くが記憶せしむる要はない。行政区分は臺灣と對比して行きた

朝鮮地方の位置、成立、区分及び行政上の中心地を知らしめ、併せて山・川・平地・海岸・島嶼等の分布状態並にその特相を明かにするのが本課指導の要旨である。特に位置については露滿兩國との關係的位置即ち國際上、國防上の位置について理解せしむる事が肝要である。

準備

極東地圖—日本全圖—朝鮮地方圖—同行政區分圖—同地勢圖—同断面圖—日本各地方の面積比較圖—鴨綠江、大同江、白頭山、金剛山、仁川港などの繪畫・寫真類。

解説

一 區域

朝鮮半島とその近海の島々(稍々大なるものを舉ぐれば濟州島、巨濟島)とを合せて朝鮮地方(面積二二〇、七二〇六萬)といふ。この地方は行政上十三道に(北より咸鏡北道、咸鏡南道、平安北道、平安南道、黃海道、江羅北道、全羅南道と)分たれ、これを總轄してゐる朝鮮總督府は京城にある。

二 地勢

朝鮮半島は日本海と黄海との間に北から南に向つてつき出た半島で、長さが約一千キロメートル、南は朝鮮海峡を隔て、九州地方と相對してゐる。北は滿洲(昭和九年三月)及びシベリヤと地つきで、鴨綠江・豆滿江・白頭山等が境になつてゐる

山

第四 朝鮮地方 一 區域 二 地勢

- 四 山脈の走向は讀圖により發表せしめ、白地圖に記入せしめ、方便物により適當に補説する
- 五 川、平地、海岸について指導する
- 六 川、平地等の分布は讀圖發表せしめて白地圖に記入せしめる
- 七 日本海方面と黄海方面の比較には斷面圖を利用したい
- 八 海岸も三地區に分つて指導し、仁川の例を以て人間の自然征服の材料として理解せしめる
- 九 日本海の羅津と滿洲國、それと日本海

朝鮮半島は山地が多く(全面積の約七割に當る)、殊に北部は南部よりも山地に富み、大部分が高原状になつてゐて、北に行くに従つて次第に高く、國境の邊には長白山脈(白頭山二七四四米)を主峰として盧頂嶺(一四〇一米)冠帽山(二五四一米)などがあるが東西に連なつてゐる。この山脈の主峰の白頭山は、鴨綠江・豆滿江及び滿洲の松花江の分水嶺になつてゐる。南部には大白山脈(大白山一五六一米)を主峰とし金剛山(朝鮮第一の名山で廣大な地域を占め一萬二方面と黄海方面との分水嶺となつてゐる。その北部の金剛山(千峯あるといふ。三十六峯、十二瀧、百八伽藍の勝景がその中にある。岩石は黒雲母花崗岩よりなるので)は景色の美しいので名高い。大白山脈の南部から分れて南西に連なつてゐる小白山脈(小白山を主峰とし智異山を起し海に入つて多くの島々をつくる)は、黄海方面と朝鮮海峽方面との分水嶺となつてゐる。

川・平地

大白山脈は東にかたよつてゐるので、日本海方面は土地が狭く、傾斜が急で、大きな川も平地もなく、産業も進まず、陸上の交通も不便である。しかし黄海方面と朝鮮海峽方面とは、土地が廣く、傾斜がゆるやかで、大同江(平壤近くを流れて延長四三九料流域一六、六七三方料)漢江(京城の南を流れ延長五一五、二五料流域二六、二七九方料)洛東江(釜山の附近を流れ延長三、八六〇方料)をはじめ、大きな川(鴨綠江(延長七九〇料流域三一七、三九方料)をはじめ豆滿江(延長五、二五料流域二、二七九方料)など百料以上の川が合計十四にも及んでゐる)がいくつもある。これ等の川は水量がゆたかたかたなく、冬は結氷するものもあつて、大てい水運の便は少いけれども下流は灌漑に利用される。随つて沿岸の平地では農業が發達し、都邑も多く交通も便利である。

海岸

日本海方面は海岸線の出入が少くて、良港が少い上に、産業も陸上の交通も發達してゐないから元山・清津・羅津の外よい港がない。黄海方面と朝鮮海峽方面とは、海岸線の出入が多く、(島嶼も)良港が多い上に、産業も進み、陸上の交通も便利であるから、釜山・仁川をはじめとして商港が多く、(木浦・群山・鎮南)・鎮海(前に巨濟島があり天然の良港で第二海軍)は海軍の要港となつてゐる。黄海方面は潮の干満の差が大きい。殊に仁川港ではその差が十メートルもあるので、干潮の時には船の出入が困難である。(この爲に三池港と同じやうに)それ故特別の設備を施し、船の出入が出来るやうにしてある。

參考資料

- 一、沿革 約三千年以前殷の箕子に起ると傳へられる。今、日韓關係について年代順に記すと次の如くである。神功皇后の新羅征伐(八六〇)佛教の傳來(二二二)齊明天皇の百濟救援(一三二)秀吉の文祿・慶長の役近くは日清・日露の兩役後獨立を確認されて大韓と稱したが明治四十三年朝鮮と改名して帝國に併合された。
- 二、仁川港 この船渠は三池港と異なる所は複式であることで、設計はパナマ運河を開いた米國技師の手になるもので、明治四十四年六月起工して大正七年十一月の竣工である。水深約八米、繫船壁には四千五百噸級の汽船三隻を繋留することが出来る。閘門の開閉は電力により一分間にして自由に開閉することが出来る。

岸の内地の諸港との關係をも考察せしめたい

三 産 業 (第十週—第十一週)

要 旨

本地方の産業に就いてその現況を明かにし、之と地勢氣候との關係を考察せしめ、本地方産業の特色を理解せしめ、着々改善進歩に向ひつゝある事實に想到せしむるのが本課指導の要旨である。

準 備

日本全圖—朝鮮地方圖—等温線圖—海流圖—雨量分布圖—産業分布圖—主要物産々額比較圖—人口分布圖—挿繪の擴大圖—朝鮮人蔘・明太魚・石首魚類の標本等

解 説

三 産 業

農業・牧畜

朝鮮地方は雨量が少い(釜山に於いて一年の降水量一四一六耗、仁川に於いて一〇一一耗、咸興に於いては僅に七一三耗である)上に、古來樹木の保護がなかつたから(冬季の燃料として)、山地の大部分には良材が乏しい。(車窓から見る山には秃山が多い)又平地も灌漑の便が乏しく、原野が多くて耕地が割合に少い。しかしそれにもかゝらず、農業は昔から朝鮮第一の産業となつてゐて、住民の大部分(至九割)は農業者である。近年水源の涵養法(森林の濫伐により水源の涸や灌漑の工事が進んで、耕地が著しく廣まつたので、農産物の産額が大いに増加して來た。農産物

時間配當(二時間)

指導要項

- 一 農業
 - 1 農業の今昔
 - 2 主なる農産物とその移輸出港について
 - 3 その他綿、煙草等の産物について
- 二 牧畜
 - 1 牛の牧畜と頭數
 - 2 牛市
 - 3 牛皮の産額
- 三 林業について
- 四 鑛業
 - 1 金、鐵鑛、石炭
 - 2 産額
- 五 水産業

- 1 概況
- 2 水産物
- 3 天日製鹽
- 方法一斑
- 一 第一に氣候の説話をなす
- 二 地勢と關係づけて等温線圖・雨量圖の説明
- 三 農業の發達と地形、氣候の關係を考察せしむ
- 四 すべての産業について人文即爲政の方針の重要性を認識せしめ今昔比較を説話する
- 五 將來の開拓について
- 六 農産分布圖作製
- 七 朝鮮人蔘と綿の補説

の主なもののは米(昭和六年の産額は約八千五百萬圓である)・大豆(同じく七百四十)・麥(同じく千八百)その他甘藷、馬鈴薯)である。

米は釜山・群山・仁川から、大豆は主に仁川から多く内地へ積出される。

又中部から南では煙草(總督府の專賣で作付面積一五〇〇〇ヘクタ)・綿(米國種と在來種とあつて現在にはあま)の栽培が盛に行はれ、開城(高麗五百年の王朝の跡で史蹟多く)附近では古來朝鮮人蔘が栽培されてゐる。

朝鮮人蔘は、朝鮮の特産物として知られてゐるもので、薬用として支那へ多く送られる。(賣法によるもので年販賣高二萬圓)牛の牧畜が廣く行はれ、その頭數(一六三萬頭)は我が内地よりも多く、内地へ送られる數も少くない。又牛皮の産額も多い。(その他豚、鶏馬)などとも少くない。

林 業

鴨綠江・豆滿江の流域には大森林があつて、てうせんまつ・からまつ・もみ等(他に蝦夷松・唐)の良材が伐出される。殊に鴨綠江の流域は木材の産額が多く、この川を下る(木材は秋、之を伐り氷雪の上をすべらして河に運び夏、川によつ)木材の主な集散地は新義州(開閉橋により安東と連絡し製紙廠、製紙工)である。新義州には大きな製材所がある。

鑛 業

鑛産物の主なるものは金(年産額九百)・鐵(鉄鑛で年四百五)・石炭(五百萬圓)である。金は(砂金が別に五十)雲山・昌城・三成等平安北道を主産地とし、鐵鑛は利原・下聖・載寧等の各地で採掘される。鐵鑛は八

八 牧畜については頭数を比較した圖表による

九 林、鑛、水産業について指導する

一〇 林業の指導は農業のそれに準ずる

一一 鑛業は白地圖に記入せしめ産額比較表により教示し鐵には特に留意せしむ

一二 水産業については近年の進歩とめんたい・ぐちに對し、説明し天日製鹽は臺灣と比較して指導す

幡(福岡縣)の製鐵所に送られて製鍊されるものも多い。石炭は平壤附近(南東の洞寺附近)が主産地である。

水産業

水産業は近年著しく發達して、(寒暖二流があり、海岸線が長く魚族の多いのに對して近年内地等から出漁し漁獲法が進んだため)いわし・さば・ぐち・めんたい等(鯨などがある)の漁獲高が甚だ多く、(四千六百萬圓を超える)水産製造物の産額(二千七百萬圓位である)も少くない。又黄海の沿岸(平安南、廣梁、仁川の北東、永安など)には鹽田があつて天日を利用して鹽を製してゐる。(年産額四百三十萬圓以上)のぼる

參考資料

一、朝鮮人蔘 煙草と共に總督府の專賣に屬するもので古來東洋に於ける貴重な靈藥として珍重され本地方の特産物である。主産地は開城附近でその製法によつて紅蔘・白蔘の二種に分れてゐる。紅蔘は生蔘を蒸して之を日光又は火熱によつて乾燥せしめたもので主として支那に輸出される。白蔘は生蔘を洗つてそのまま日に乾したものであつて、價格は紅蔘の方が高い。近年滿洲國に於いても栽培せられ、又アメリカに於いても栽培されてゐる。我が内地にも福島縣・鳥取縣に移し植ゑられてゐる。播種後五六年で收穫するもので、珍重され、且つ高價である。

二、水産業 發達の原因を記すると海岸線が一萬六千軒に及び寒暖二流があり、漁港、魚族に富み、その上總督府では斯業の發達に力を用ひ、水産組合を興し補助金を交付し又講習し、漁港の修築漁具の改良、漁獲の取締、調査、試験などを行ひつゝあるのでその産額も著しく増加した。

三、めんたい 明太魚と云ひ鱈の一種で一名スケトウダラとも稱せられる。主な漁獲地は豆滿江口から江原道

に至る東岸の一帶で漁期は十一月から翌年三四月頃までである。體長は六七十種、重量は一疋内外で灰白色を呈し體側に蒼色の斑紋がある。この魚は、めでたい意味の魚として朝鮮人には頗る珍重せられる。

四、ぐち 石首魚と書き西岸一帶に産す。漁期は四月から十一月に至る半年で體長は三十種内外體色は灰綠色で口が大きく頭骨中に石の様なもの二箇あるのでイシモチとも呼ばれる。美味ではないが朝鮮人には明太魚と共に儀式の必須品とされ、又支那人も鹽乾を黃魚と言つて嗜好する。

四 交 通 (第十一週)

要 旨

本地方に於ける陸海交通の現況を明かにし、是と他の地理的要素との關係を考察せしめるのが本課の要旨であるが、特に本邦及び世界交通系の一部として見ることを忘れてはならない。

準 備

世界及び日本交通圖—朝鮮交通圖—關釜連絡船、開閉橋その他交通上重要な地の實況を示す種々の方便物。

解 說

四 交 通

陸上の交通

鐵道の幹線は朝鮮海峽方面及び黄海方面にあつて、釜山を起點として北に向ひ、京城を経て新義

時間配當(一時間)

指導要項

一 陸上の交通

1 幹線

2 支線

二 海上の交通

1 困難なる理由

2 主要なる港

方法一斑

一 陸上交通の發達と

地形及び海上交通と

氣候等について考察

- せしめる
- 二 縦貫鐵道の幹線の
- 一部としての考察
- 三 京元咸鏡線と滿洲
- 四 港灣についての説
- 明

- 五 作業としては地圖
- に重要な鐵道及港灣
- の分布圖を作り旅行
- 案内により郷土より
- 本地方の重要都市へ
- の交通路を調べしめ
- 旅行日程の製作
- 六 關釜連絡船、鴨綠
- 江開閉橋の説明

州に至る。釜山・京城間の線路を京釜線(四五〇・五)といひ、京城・新義州間の線路を京義線(四九九・九)といふ。釜山では釜山・下關間を往來する鐵道連絡船(八時間)を要し、景福、德壽、昌慶丸を旅客(專用船として不定期用に尙三隻ある)によつて、山陽線との連絡の便があり、新義州では鴨綠江の鐵橋によつて南滿洲鐵道の安奉線(安東奉天間)に接続してゐる。この鐵橋は長さが約一キロメートル(九四二米)で十二の鋼桁があり第九の梁を開閉する。その中程の部分はたやすく廻轉が出来る仕掛になつてゐる。毎日一定の時間(午前午後各二回であるが冬季は結氷するから勿論開閉しない)を定めてこの部分を廻轉し、大きな船でもこゝを通つて、川を自由に上下するやうにしてある。これが名高い鴨綠江の開閉橋である。これらの幹線の外に、京城から元山・咸興を経て清津に至る京元咸鏡線(七六八・八)、大田から木浦に至る湖南線(二六〇・四)がある。京元咸鏡線はなほ北に延びて滿洲の鐵道(吉會線)と連絡してゐる。(滿洲國との交渉が開けてこの地方の産業に一大燭光を與へた)

海上の交通

朝鮮の近海は春・夏の季節には霧が深く(寒暖二流の交流のため)冬季には風波が荒いので、海上の交通は困難を免れない。けれども釜山・木浦・群山・仁川・鎮南浦・元山の諸港は、四時共に船の出入が容易である。釜山は我が内地との交通・貿易上の要地であり、仁川は支那との貿易が盛な港である。

參考資料

- 一、鐵道 内地の鐵道よりも軌道の幅廣く所謂廣軌即ち標準軌道である。大體ボギー式車輛を用ひ、幹線はア

ジャ大陸東部に於ける重要な陸上交通の一部分をなしてゐる。

- 二、水運 本地方水上交通を經營するものは朝鮮郵船株式會社、鎮南浦汽船合資會社、鴨綠江運輸株式會社、日本郵船、大阪商船、大連汽船株式會社及び鐵道省等である。

五 住民・都邑 (第十二週)

要旨

本地方の住民特に朝鮮人の生活狀況の一般を知らしめ、更に本地方に於ける人口分布の狀態及び主なる都邑の現況とその特異性、發達原因について知解せしめるのが本課指導の要旨である。

準備

朝鮮地方圖—人口分布圖—朝鮮人の生活様相を示す方便物—都邑分布圖—主な都邑の實況を示す繪畫・寫真類。

解説

五 住民・都邑

朝鮮地方の人口は二千一百萬(二一〇六萬)を超えてゐる。大部分は朝鮮人(約千九百七十萬餘である)で、内地人は四十七萬に過ぎない。(昭和六年の統計によれば)他は支那人を主とする外人である。住民の最も多い處は黃海方面の平地で、これに次ぐのは朝鮮海峽方面の平地である。随つてこの兩方面の平地には都邑が多く、大きなものは大てい農産物の集散地(大邱、光州、全州、清州、開城、海州、平壤など)となつてゐる。殊に大邱(慶尙北道の中心地定期市については、參考資

- 時間配當(二時間)
- 指導要項
- 一 住民の人口、分布、等
- 二 都邑
- 1 都邑の分布
- 2 黃海方面の都邑
- 3 朝鮮海峽方面の都邑
- 4 日本海岸の都邑
- 方法一斑
- 一 住民についてはその總數と民族別人口を明かにし、密度を

内地と比較せしめ、分布圖を作製せしめる

二 朝鮮人の風俗・習慣・生活状態を説明する

三 現在の朝鮮の内地化の状態についても説明を要す

四 各都邑の現況及び特色・發達原因を知らしむ

五 發達原因を考察せしめその特色を發見せしめる、前の産業の分布圖を併用して之に都邑を記入せしめる

六 尙國語讀本卷十の「第十三京城の友から」を参照するがよ

る

料を参照されたい。人口十)・群山(錦江にある開港場で錦江流域の門戸で米穀を)・平壤(大同江中流の西岸にあつて北鮮第一開市場である。農産物の大集散地で各種の工業も又盛である。日清)は米の主な集散地である。又大邱には定期の役の遺蹟多く古代樂浪郡治の古墳が多く人口約十四萬を超える)に大市が開かれて、雜貨も取引される。京城は漢江の下流沿岸の盆地にあつて、政治・交通(京釜線、京畿線)の中心地となつてゐる。京城帝國大學もこゝにある。(李朝五百年の舊都で城壁を廻らし(京元成鏡線)の中心地となつてゐる。京城帝國大學もこゝにある。(李朝五百年の舊都で城壁を廻らし國大學、醫學專門、法學專門、高等工業、高等商業の諸學校、高等法)仁川(京仁線の終點で本地方第二の開港場で米、人蔘院、複審法院、朝鮮神宮及李王家の宮殿があり人口約二十六萬五千)牛皮を積出す。干満の差が甚しいので開門式船渠がある人)は京城の門戸で黄海方面にある重要な港である。平壤は朝鮮北部の名高い都會で、口約六萬三千)鎮南浦(大同江口の北岸にある開港場で平南線の終點で米、大豆、鐵鐵を)はその門戸である。日本海方面では元山(永興灣に臨む朝鮮第一の開港場で近海漁業の大中心地である。永興)成興(成鏡南道の行政の中心地で地方産)羅南(成鏡北道の新市街で道廳があり第十)清津(羅南の北東の開港場で問島を後背地とした新興都)羅津(清津の北東方豆滿九師團司令部があり人口二萬を超ゆ)が主な都會である。

參考資料

一、大邱の大市 朝鮮は文化の程度低く、殊に大多數が農業者で常設の小賣業者が少いので、大抵商品の取引は市日を定めて行ふ習慣がある。併し今日では産業の發達と交通の完備と共に次第に店舗取引に改められつゝあるが、今尙古來の習慣として行はれてゐる。大邱では毎年春秋二期定期の大市が開かれその時の人口は二三十萬に達するといふ。朝鮮の三大市の一つであるがこの春秋の二期の外にも毎月東門市と西門市とが各六回開か

れてゐる。その狀況は教科書五十頁の挿繪によつても想像されるであらう。

二、釜山 慶尙南道々廳の所在地で本地方の關門をなし、人口約十四萬六千人本島第一の自然的良港で昭和二年築港工事も完成し、本島第一の貿易港で洛東江下流の物資の集散地で米、大豆、牛、牛皮の産物を積出し、綿布、麥粉、砂糖を輸入する。海陸交通の要地であることと言ふまでもない。

第五 關 東 州 (第十三週)

要 旨

關東州に於ける自然及び人文地理の概要を授け、この地域と我が國との關係について(單に租借地たる事實のみならず大陸に對する發展的根據地たる)明かにするのが本課指導の要旨である。

準 備

世界及び日本交通圖—極東地圖—關東州地圖—氣象・海流圖—産業分布圖—大連市街圖—旅順港圖—旅順港・爾靈山・表忠塔・大連港・鹽田及び豆粕・豆油等の實況を示す方便物。

解 說

第五 關 東 州

區域・住民

關東州は滿洲の遼島半島の南端部で、我が國が滿洲から租借(一國が他の一國の領土内の一區域を其の承諾を得て一定期限の間自國の統治の下におくこ

時間配當(二時間)

指導要項

- 一 區域・住民
- 二 地勢概要
- 三 産業
- 四 海岸
- 五 都邑
- 方法一斑
- 一 租借地の意義及び本地の沿革について知らしむ
- 二 區域・面積・人口及びその位置について考察せしめる

三 本地方の地理的價値は人文現象萬般を説いた後でなければ判然しないから本時は單に位置から見た重要性を認識せしめる

地勢産業

州内は山が多くて(多くは丘陵性)平地が少く、農業は盛んでない。(多少の高梁、大豆、粟、玉蜀黍を)しかし近海では漁業が行はれ(鱈、鯛など)、處々の砂濱では(鰻、高など特産し牧畜では牛、豚等がある)天日を利用して鹽を製してゐる。(鹽の産額は百萬圓以上にのぼる)

海岸線

海岸線は出入が多く、黄海の沿岸には旅順・大連の二港がある。

旅順

旅順は港口が狭く、港内も浅いので、港としては大連に及ばない。しかし旅順は州内政治の中心地である。又その附近には明治二十七八年並びに三十七八年の兩戰役に關する名高い戰跡(東鶏冠三高地、黄金山、表忠塔、納骨堂などがある)が多い。(港は東西に分れてゐる。關東廳、高等法院、關東軍司令部、工科大学等があり人口三萬)

大連

大連は滿洲の門戸、世界交通の要地で、その港は廣くて深く、埠頭の設備がよく、のひ、冬も港内が結氷しないから四時船の出入が多く、我が内地及び支那の諸港(天津、芝罘)との海上の交通が

- 三 本地方の地理的價値は人文現象萬般を説いた後でなければ判然しないから本時は單に位置から見た重要性を認識せしめる
- 四 作業として旅行案内による旅行日程及び旅費の計算
- 五 旅順・大連についての地理的考察と地理的價値
- 六 大連と旅順は對比的に説明して行きたい
- 七 旅順の戰跡と國民的自覺の喚起
- 八 國語讀本卷七「大連」より「同卷九」水師營の會見」と聯絡す

九 大連を中繼としたる日滿の貿易關係を知らしむ

便利である。又この地を起點とする我が南滿洲鐵道(〇・八三)は、北滿鐵道(舊東支鐵道)滿洲里からボグ城子間を延長し、や奉山鐵道(奉天―山海關)と連絡し、世界の鐵道の幹線の一部となつてゐるから、滿洲・支那・シベリヤ各地との陸上の交通も便利である。滿洲からの重要輸出品たる大豆・豆粕・石炭は、主としてこゝから我が内地及び支那本部に積出され、滿洲の重要輸入品たる我が國産の綿織物・綿絲・麥粉は、多くこゝから滿洲各地へ送られるのである。

豆粕は大連をはじめ滿洲各地で大豆を原料として製造し、大部分は横濱・神戸に送り出すのであるが、その生産高は大連が第一である(もと一漁村であつたがロシアが關東州を租借してダルニーと稱し極東の根の規模は東洋第一と稱せられる。市街は放射狀をなし近代都市の景觀を發揮し市廳、大和ホテル、正金銀行支店等の建物多く滿鐵の本社もこゝにある人口二十七萬三千)

參考資料

一、南滿洲鐵道會社 半官半民の組織に成り、鐵道ばかりでなく船舶、港灣、鑛業、工業、旅館等關東州及び滿洲の經濟事業萬般に亘つて活躍してゐる有力なる會社であつて、四億四千萬圓以上の大資本を有し、資源の國滿洲に着々として成果をあげつゝある。

第六 我が南洋委任統治地 (第十四週)

時間配當(一時間)

要旨

第六 我が南洋委任統治地

指導要項
 一 委任統治の意義と我が南洋委任統治地の性質

委任統治地の意義を明かにし、我が南洋委任統治地の性質とその區域を闡明して、此の區域が我が委任統治地たるに至つた理由を知解せしむると共に、本地域に關する地理の概要及び行政、國勢伸展上に於ける位置を考察せしめるのが本課指導の要旨である。

準備

世界地圖—南洋地圖—太平洋航路圖—主要島嶼の擴大圖—土人の風俗特産物、景觀を示す寫眞・繪畫及標本類。

二 我が國統治の由來
 三 島數、面積、人口
 四 行政
 五 産業

解説

1 氣候
 2 主要産業—産物
 3 交通

方法一斑

一 委任統治の意義を明かにし即第三種に屬することを知らしめる

二 地理的價值

三 主要産業、産物

四 ドイツの敷設した

ヤップ上海間の海底電信線は現在帝國有なることを知らしめ

我が南洋委任統治地は(大戰の結果支配の統治を離れた領土及植民地で自立出来ない)、赤道から北の舊ドイツ領の全部、即ちカロリン群島・マーシャル群島の全部とマリヤナ群島の大部分(この中に米領グ)と

(パラウ諸島がある)で、世界大戰の結果、我が國が統治するやうになつた處である。島の數は數百(一軒以上の七百六十)もあるが、面積は約二千平方キロメートル(東京府位である)、人口は約七萬(七萬三千人)に過ぎない。(密度三十二人)この群島を治める南洋廳はコロール島(パラオ群島内にあつて更にサイパン、パラオ、ヤカレ)にある。

この群島は全部熱帯にあるので、四季の別がなく、氣温は年中高い。(海洋降雨に調節されて平均七十五度乃至八十五度位である)土地が狭く且平地が少ないので、産業があまり發達しない。たゞさとうきびの栽培が相當に盛で、製

る

五 「トラツク島便り」

参照

糖業はこの群島第一の産業である。その他の主な産物はコブラ(コ、ヤシの果實の白色肉質の胚乳を乾燥したもので椰子油をとり石鹼、蠟燭の原料と)と燐礦(アンガウル島)とて、砂糖と共に多く内地に送られる。(その他の産物として高瀬貝、煤貝を始め有用植物が)又主な島々(ヤルト、クサイエ、ボナベ、トラツク、ヤツア)と内地との間には定期に我が汽船が往來してゐる。

參考資料

一、土人と石貨 土人はチャモロとカナカ族で性質は溫和正直であるが保守的傾向が強く怠惰である。男子は禪、女子は腰蓑をつけるのみで別に衣服を用ひない。土人の使用する石貨は、パラオ島に産する結晶質の石灰岩より製し大小形は様々であるが、中央に穿つた穴は運搬の便宜の爲である。又別に貝貨も用ひられる。

二、南洋諸島の價值 1 産業上 一見貧弱であるが太平洋上の貯炭地として、南洋漁業の中心地として、熱帯植物の生産・燐礦の供給地として將來重要性を増すであらう。

2 交通上 東印度諸島オーストラリア、太平洋諸島の中間に位し南太平洋に於ける交通上の中央部に當る。

3 軍事上 太平洋が問題にされ、最近列國將來の競争地である。太平洋に根據地をもつことは極めて重大な價值を持つものである。

第七 日本 の 總 説 (第二學期第一週—第四週)

時間配當(八時間)

要 旨

第七 日本 の 總 説

指導要項

一 山

1 日本列島山系大要

2 南・北彎山系

3 三大弓形

4 四周の海

5 火山脈

6 著名火山

7 世界の火山、地震

地帯

二 川、平野

1 大分水嶺と川の流

向

2 川の性質と人生と

の關係

3 沿岸平地と人生

4 主要河川、平野

二 農業

1 耕地面積

2 主なる農産物

3 農業の將來

4 肥料

四 養蠶業

1 世界一の養蠶國

2 養蠶地帯

3 生絲

4 絹織物業地

5 富士絹・羽二重・縮

編

五 牧畜

1 不振の理由

2 羊—羊毛

3 牛馬—牛皮・牛肉

六 林業

1 森林面積

2 主な木材と産地

3 製材所

4 木材の輸入

5 パルプと製紙

七 水産業

1 世界一の水産國

2 主要の漁獲物

3 集散地

4 重要輸出品

本課に於ては、從來取扱つて來た日本各地の地理的諸現象を、茲に總括して綜合的系統的に觀察し、夫によつて帝國の國勢及び世界的地位を明かにし、延いて國民的自覺を喚起せんとするのが本課指導の要旨である。現行地理教科書は人爲的單元によつて記述してある關係上動もすると、指導そのものも個々の事實について指導されるものが多く、全體的な即ち大局的見地からの指導が缺けると言ふやうな缺點を伴ひ易いのであるが、尠くともさうした弊は本課の指導によつて充分補ひ得ることと思ふ。

準備

世界及び日本の交通圖—日本地圖—日本山系圖—同水系圖—等温線圖—海流圖—雨量圖—産業分布圖—同統計圖—重要物産のドットマップ—人口分布圖—本邦輸出入一覽表—各港別輸出入比較圖—主産教材の實況を傳へる種々の直觀方便物等。

解説

山

日本列島は山岳・丘陵が到る處に起伏し、殊に本州の中央部(中部)は地勢が極めてけはしく、三千メートル以上の高山(富士山(三七七六)白根山(三一九二)奥穂高岳(三一九〇)槍ヶ岳(三一八〇)荒川岳(三一四六)赤ヶ岳(三〇三三)乗鞍岳(三〇二六)立山(三〇一五)聖岳(三〇一三)前穂高岳(三〇九〇)御岳(三〇六三)鷲見岳(三〇四七)仙丈(三〇一)等)二千五百メートル以上の山が三十六にも及ぶ)が少くない。主な山脈は中央部から南西(南彎山系と)又は北東(北彎山系と)に向つて列島を縦に通じ、相連つていくつもの山系をなし、その中の主なものが(樺太山脈、蝦夷山系、奥羽山脈、三國關東山脈、中部地方の火山脈、紀伊)列島の(大分水嶺となつてゐるのである)が(山脈、中國山脈、四國山脈、九州山脈、臺灣山系、大白山脈、長白山脈など)に總括される。その一つは(内)飛驒山脈・中國山脈・筑紫山脈を連ねたもので、他の一つは(外)赤石山脈・紀伊山脈・四國山脈・九州山脈・琉球列島の山脈、臺灣山脈を連ねたものである。

る。南西に向ふ主な山脈は二つの山系(外帶山脈と)に總括される。その一つは(内)飛驒山脈・中國山脈・筑紫山脈を連ねたもので、他の一つは(外)赤石山脈・紀伊山脈・四國山脈・九州山脈・琉球列島の山脈、臺灣山脈を連ねたものである。北東に向ふ主な山脈は三國山脈・奥羽山脈・蝦夷山脈・樺太山脈(北上山脈、阿武隈山脈、出羽丘陵、越後山脈、天鹽、夕張山脈及び樺太の東北山脈、鈴谷山脈)等、これ等も又一つの山系をつくつてゐる。外になほ千島列島を走る(千島火)ものもある。日本列島のこれ等の山系は大體三つの(千島弧、本)大きな弓形をつくつてゐるので、列島の形も之に伴つて自然に三つの弓形をなし、中央部の弓形には北海道本島・本州・四國・九州があり、北東部の弓形には千島列島、南西部の弓形には薩南諸島(種子島、屋久島をはじめトカ)・琉球列島・臺灣がある。これ等の三つの弓形と樺太(蝦夷山系の更に)・朝鮮半島とによつて、日本海・オホーツク海・東支那海が區劃されてゐる。

火山脈は多くは上に述べた山系に沿うて列島を縦に走り(富士火山脈だけ)、北東部には那須火山脈(三國山脈、奥羽山系、渡島半島)・千島火山脈(千島列島)があり、南西部には白山火山脈(中部地方の白山を主峯とするもの)阿蘇火山脈(九州中央の九州山脈と筑紫山脈の)霧島火山脈(霧島山を主峯とし櫻)外に臺灣北部に大)がある。たゞ富士火山脈は本州の中央部を横ぎり、更に延びて太平洋中で伊豆諸島・小笠原諸島となつてゐる。これ等の火山脈中には富士山をはじめ圓錐形(コニデ式)の火山が多く、淺間山・阿蘇

- 5 製鹽
- 八 鑛業
- 1 石炭
- 2 鐵
- 3 銅
- 4 金鑛
- 5 石油

九 工業

1 工業の發達した理由

- 2 四大工業地區
- 3 主な工業品

一〇 貿易

- 1 盛になつた理由
- 2 年貿易額
- 3 主要輸出入品
- 4 主な貿易港
- 5 主な取引先

一一 交通

- 1 産業進歩と陸海交通の發達
- 2 航空路の現況

山など、たえず煙を噴いてゐるものも(活火)少くない。火山地方は一般に景色が美しく、處々に温泉が湧出てゐるので、保養・遊覽に適する處が多い。

日本列島はかやうに土地の成立が複雑で(アジア大陸の東縁で)あるから、火山が多いばかりでなく、地震も多くて、世界の主な火山地帯(他にイタリヤ)・地震地帯となつてゐる。

參考資料

一、本邦の活火山

千島火山脈——千島の諸火山、雌阿寒岳、旭岳等

那須火山脈——樽前山、有珠山、駒ヶ岳、吾妻岳、磐梯山、那須山、白根山、淺間山等

富士火山脈——三原山、八丈富士、北硫黄島

御岳火山脈——焼岳

白山火山脈——白山、三瓶山

阿蘇火山脈——雲仙岳、阿蘇山、由布岳、鶴見岳

霧島火山脈——霧島山、櫻島、硫黄島、諏訪の瀬島等

二、本邦著名温泉

1 關東地方 箱根、伊香保、草津、鹽原、那須

2 奥羽地方 東山、飯坂、鬼首、淺蟲、上の山

3 中部地方 熱海、伊東、修善寺、諏訪、淺間、和倉、山代、山中

4 近畿地方 有馬、城崎、寶塚

5 中國地方 三朝

6 四國地方 道後

7 九州地方 別府、阿蘇、日奈久、山鹿、高瀬、島原、武雄、霧島

8 臺灣地方 北投、草山

9 北海道地方 登別、定山溪

10 朝鮮地方 溫陽、東萊

川

日本列島の中央部から北へは、列島を縦に通つてゐる山系が大分水嶺となつてゐるから、川は太平洋方面(利根川、阿武隈川、北)のもの、日本海方面(阿賀川、最上川、雄物)又はオホーツク海方面(湧別、幌内川)中央部では太平洋方面に富士川、大井川、天龍川、木曾川等があり日本海方面(面)に信濃川、神通川、九頭龍川などの諸川が複雑な分水嶺から分れてゐる。又中

央部から南へは、二條の主な山系が大分水嶺となつてゐるので、川は太平洋方面(熊野川、五ヶ瀬)のもの、日本海方面(遠賀川)・東支那海方面(筑後川、球磨川)のものに分れてゐる外、なほ瀬戸内海方面(旭川、紀ノ川、吉野川)のものもある。

川はいづれも水量がゆたかであるにもかゝらず、流域に山地が多いから大てい流れが早く、

- 3 鐵道延長
 - 4 幹線系統
 - 5 最も鐵道の發達した地域
 - 6 主要航路
 - 7 海運業
 - 8 汽船の總噸數
 - 9 港、燈臺の設備
 - 10 國內、國外の通信方法一斑
- 一 細説をさけて鳥瞰的に見て行くことが本課の指導に極めて重要である
- 二 地勢教材では他教材でもさうであるが白地圖記入などなる可く作業化して行くことが肝要である
- 三 産業教材に就いては自然現象と相關的に總括的に指導すべ

きで延いて國際貿易に於ける經濟的地位にまで及ぶべきである

四 指導の際は準備の産業分布圖、統計圖、比較圖、ドットマップ一覽表など活用すべきである

五 教科書中の統計は昭和三年であるから新しい數字を與へ統計を作らせるのも面白い

六 日本全體から見た交通の大要、航空・鐵道・航路・通信についても指導する

七 他の地理的要素と連關して指導することを忘れてはならない

八 鐵道については、トンネル・鐵橋・ループ式・アプト式・スイツチバツク等人類文化施設の一端を明かにする

九 鐵道は白地圖に記入せしめて、沿線の都邑を記入せしめる

十 近年發達の著しい海運については、主要航路・寄港地・終點等を明かにしておきたい

十一 航空路は最近世の交通機關としての重要性とその將來を推論すべきである

十二 ラヂオについても同前

(最上川、富士川、球磨川) 流路の屈曲も多い(就中石狩川、樺太の幌は三急流と稱せられる) 内川など有名である) から、水運の便が少く、雨後にはしばしばあふれて害をなすこともある。(特に臺灣西岸) しかし水量の多いことは、灌漑には便利であつて、農業の發達を助けることが多く、殊に米作の發達を促してゐる。又流の早いこと、(勾配がある爲であるから落差を) 水量の多いことは、發電に便利であるから、近年水力電氣の事業が大いに發達し、その電氣は電燈や動力などに廣く利用されてゐる。

參考資料

一、水力發電 近來電氣工業の勃興と共に所々に發電所が起され教科書にある分布圖の示す如く、中部地方、九州地方附近には一萬キロワット以上の發電所が相當に見られる。六十四頁の挿繪にある木曾川のダム(堰堤)の如きもその爲に作られたもので、急流をなす川の水を一定の落差をもつ所から鐵管で落して機械を運轉して發電して電壓をかへて遠距離に送電されるので、本邦中主な發電の行はれる川は猪苗代湖、最上川、利根川、相模川、中部地方中央部の諸川、琵琶湖口、五ヶ瀬川、阿蘇白川などである。

平野

川の沿岸の平地は産業・交通に利用され、殊に大きな川(利根川、木曾川、信濃川、淀川、北上川、筑)の下流や川口附近の海岸には割合に廣い平地がある。その主なものは關東平野(利根川、久慈川)、越後平野(信濃)、濃尾平野(木曾川)、近畿地方の諸平野(伊勢平野、琵琶湖岸平野、大阪平野)、九州北部の諸平野(遠賀川、筑後)、石狩平野(石狩)及び臺灣の平野(淡水溪、大甲溪)である。中でも關東平野(東)、濃尾平野(名古屋)の地方) 大阪平野(阪)、九州北部の諸平野(福)は商業・工業の大中心地となり、交通も便利で、都邑も發達してゐる。東京・大阪をはじめ我が國の大都市は、多くはこれ等の平野にある。

農業

我が國の耕地は(五百九十萬ヘクタール)總面積の約六分の一(六分の一)に過ぎないが、氣候・地味共に農業に適してゐるので、農業は古來我が國の重要な産業(豐稔原産)となつてゐる。

農産物の主なるものは米(年産額十二億三千五百萬圓に上り)・麥(三千九百萬圓を超え)・豆(大豆小豆合して)・さつまいも(三十三億八千)である。又さつまいも(百一十億斤以上)・茶(約一千八)・煙草(六千八百萬圓)・蔬菜(花卉と合六千)・果物(六千二百萬圓)の産額も少くない。これ等の農産物は大部分は食用に供せられ、一部分は工業品の原料(麥をビールの原料とし、馬鈴薯より澱粉その)に用ひられてゐる。茶(八百萬圓以上)・薄荷(四百九十萬圓)等が多少輸出されるのみで、その他は大い國內の需要を充たすに足らず、米てさへ(千二百萬圓)支那、支那及臺灣、朝鮮)も輸入を待たなければならぬ。(その他小麥、豆類も) 我が國の工業上最も必要な原料たる綿は殆ど全部を外國(印度、メリカ)に仰いてゐるので、その輸入額(四億四千)の多いことは我が國の輸入品中の第一位を占め、大部分がアメリカ合衆國・印度から來るのである。

我が國の人口は年々増加して(昭和七年の自然増加は)食料の需要が多くなり、又工業が發達するにつれて原料の需要も増加する。然るに耕地の擴張、農業の發達は之に伴はないから、今後農産

物の輸入は益、多くなるであらう。農作物の肥料には人造肥料・魚肥(しめかす)・油粕等が盛に用ひられ、その産額が近年著しく増加してきた。しかしなほ滿洲から豆粕(年約三千五百萬圓の輸入)、ドイツ・イギリスから人造肥料(硫安だけでも七百萬圓を超える)が盛に輸入されてゐる。

養蠶業

我が國は世界第一の養蠶國で、繭の産額(價格約三億圓に達する)が多く、生絲・絹織物の製造の技術も進んで、その製造高も多い。養蠶業の殊に盛なのは長野(全國生絲産額の四分の一を出す)・群馬・愛知・埼玉の諸縣で、これ等の諸縣では製絲業も盛である。生絲は我が國第一の輸出品(三億八千萬圓の輸出がある)で、主として横濱・神戸からアメリカ合衆國へ(全輸出生絲の約九割に當る)送られる。絹織物業(輸出額は一億一千万圓に上る)は主として京都・福井・群馬・石川の諸府縣に發達し、富士絹・縮緬・羽二重等は主な輸出品となつてゐる。(イタリヤ、合衆國等へ輸出される)

牧畜

我が國は氣候(濕氣が多い)・地味・地勢(草原に乏しい)の關係上(それに古來の風習も加つて)・牧畜はあまり振はない。殊に羊の牧畜が進まないから、近年著しく需要を増して來た羊毛は殆ど全部、(僅かに北海道、朝鮮から試年輸入百萬圓)毛織物は一部(一千萬圓以上)、これを外國(オーストラリヤより羊毛を英米より毛織物を)から輸入してゐる。牛(百五十萬頭を超過)・馬(百十七萬頭以上)は各地で飼養されて、大てい需要を充たしてゐるが、まだ牛皮・牛肉は輸入が少くない。

林業

森林はその面積(耕地の約四倍)が我が國總面積の約二分の一に當つてゐて、各地で木材が伐出されてゐる。木材の主なものには木曾谷・阿里山のひのき、米代川(秋田)・吉野川(奈良)各流域の杉、鴨綠江流域のてふせんまつ・からまつ・もみ、北海道本島・樺太のといまつ・えぞまつである。(他に松、楡、榿、白楊など種類も頗る多い)

製材の業も處々に發達し、秋田縣の能代港(米代川口にあつて中流にある大館も製材で有名である)、臺灣の嘉義、朝鮮の新義州には大きな製材所がある。

木材は産額が少くない(約一億五千萬圓である)にもかかわらず、需要が年々増加するので不足を告げ、アメリカ合衆國・シベリヤ・カナダから輸入したもので(三千五百萬圓以上の輸入を示してゐる)これを充たしてゐる。

木材を原料とするパルプの製造業及び製紙業は近年大いに發達し、北海道本島(苫小牧など)・樺太(原取など)で生産する高が次第に増加して、今や需要の大部分を充たしてゐる。(昭和七年産輸入パルプは千五百萬圓にのぼる)

参考資料

一 木材の用途 木材の用途は建築用材、鐵道枕木及び造船材として用ひられる外、薪炭として燃料に、又製紙の原料たるパルプを製し、マツチの軸木となし、樟樹から樟腦及び樟腦油、榿の實より木蠟、漆樹から漆汁、その他樹實、茸類及び筍、その他竹材など枚擧に暇がない程である。

水産業

我が國の近海には暖流(日本海流)や寒流(千島海流、樺太海流)があつて、それ／＼特有な魚類が多く、随つて我が國は古來水産業が盛で、今では世界第一の水産國(漁業者数は本業者が五十八萬、副業者を入ると一億四千七百萬圓、水産製造物が一億三千萬圓)となつてゐる。近年漁港の設備をはじめ、漁船・漁具等が改良せられると共に、漁場が大いに廣まり(遠洋漁業)、遠く小笠原諸島やカムチャツカ半島の近海に出漁するものさへある。

漁獲物の中いわしは全國各地の近海でとれるが、かつを・まぐろ・たひ(鯖)は暖流の流れてゐる太平洋近海(鹿兒島、高知、三重、愛知、静岡、千葉などの諸縣)及び東支那海(九州島)でとれ、にしん・かに(鮭、鱒、鱈、明太魚、ぐい)は寒流の流れてゐる北海道・樺太(朝鮮)の近海でとれる。

水産物の主な集散地は下關と函館である。

水産製造物の主なるものはかつをぶしをはじめとし、しめ粕(いわし、にしん等のしめかす)・乾物(鱈の干物など有名)・塩漬(鮭)・罐詰(貝柱、蟹が有名で蟹は米國)等(昆布、魚油)である。その中輸出品として重要なものはかにの罐詰(横濱港から輸出するもの)・するめ・こんぶ(主として支那・滿洲に出される)等である。

製鹽の業は瀬戸内海の沿岸に發達(出三田尻など有名)してゐる。この他朝鮮(黄海)・臺灣(西海)でも製せられるが、それでもなほ不足を告げるので、關東州や支那から輸入を仰いでゐる。

鑛業

鑛産物の中最も重要なものは石炭(内地産額は二千八百萬担)と鐵(帝國産の鉄は二十萬トンを越え)とである。石炭は主として筑豊(飯塚、直方、を)・三池(大牟田を中心)・石狩(美唄、夕張を中心)・常磐(平を中心)の諸炭田で採掘され、若松(福岡)・三池(同)・室蘭(北海道内浦)等の諸港から積出される。

鐵はもと産額が少なかつたが、八幡の製鐵所が支那(大治)やマレー半島から鐵鑛を輸入して製鍊するに至つてから、その産額が著しく増加してきて、今では石炭に次ぐ重要な鑛産物となつてゐる。(鐵の産地は朝鮮平壤附近と)しかし諸種の工業が發達するにつれて、鐵の需要は益々増加するばかりで、供給はなほ大いに不足するので、アメリカ合衆國・ドイツ・イギリス及び印度から鐵や鐵材を多く(機械類をのぞいて約六千五百萬圓)輸入する。

その他主な鑛産物には銅(七萬五千担)・金(千担)・石油(三百萬担)がある。銅は別子(愛媛縣にあつて四)・足尾(栃木)・小坂(秋田)・佐賀關(分)・日立(茨城)等の諸鑛山で採掘・製鍊される額が甚だ多い。それで我が國は世界に於ける銅の主要な(世界第五位)産地となつてゐる。金鑛は大分(佐賀)・鹿兒島(串木野など)・静岡(蓮臺寺)の諸縣、北海道本島の北東部(枝幸、鴻)・朝鮮の西北部(雲山、昌城)に産し、その製鍊高の多い處は佐賀關・日立(他の鑛山のものも入れて製鍊す日)・鯛生(大分縣日田盆地)・朝鮮の雲山・昌城である。石油の原油は主として新潟(西山、東山)・秋田(黒川、豊川)の二縣で産するが、近來石油の需要が急激に増加し

てきたので、到底國産のものだけでは足りないから、アメリカ合衆國やマレー諸島(特にスマトラ、ボルネオ島)から多量の原油や製品(三千六百萬圓を超える)を輸入してゐる。

工業

我が國は石炭の産額が多く、水力の利用も容易であるから交通機關の發達・學問技術の進歩と共に(大工場法の輸入、明治二)工業は近年長足の進歩をなし、各地に諸種の大工場が出来て、主として機械力によつて(明治中期以前までは主として)内國産の原料からばかりでなく、外國産の原料(生ゴム、棉、羊毛など)からも多量の工業品を製作してゐる。これがため今では我が國は世界有数の工業國となつてゐる。
(工業に従事する人々は全體の約二割で増加の傾向がある)

殊に大阪灣の沿岸(阪神工業地區と呼ばれる)、東京及び横濱の附近(京濱工業地區と呼ばれてゐる)、九州の北部(北九州工業地帯と呼ばれる)、名古屋附近(名古屋工業地帯と呼ばれ以上)は、いづれも内國の主な工業地帯であつて、製品の種類も産額も極めて多い。

工業品の最も主要なものは純國産の生絲(四億二千七百萬圓を超える)・絹織物(三億七千六百萬圓を超える)と、外國(アメリカ)から輸入した綿で造つた綿絲(二八〇萬圓の産がある)・綿織物(四億二千三百萬圓以上)で、その産額はそれ／＼遙かに他の工業品の産額を凌いでゐるばかりでなく、我が國の貿易の盛衰と密接な關係を有してゐる。(これが最も重要な貿易品であるがため)又織物の發達に伴つて染色工業も進歩して來た。(これらのもの)

その他の工業品の主なものには酒・煙草・毛織物・人造肥料・砂糖・洋紙・麥粉・アルコール・ビール・工業藥品・醬油・陶器・メリヤス等(人造絹絲、マツチ、麻織物、漆器、製茶、花筵、眞田、ガラス、セメント、製氷、電氣器具、ゴム製品その他雜貨類)がある。

これ等の工業品は内國の需要を充たすのみならず、外國へ輸出するもの(生絲、絹織物、綿絲、綿織物、陶磁器、メリヤス製品など)もあるが、外國から輸入して(鐵類、毛織物、機械類など)その需要を充たしてゐるものもある。

貿易

産業が發達し、交通が進歩(特に海上)すると共に、貿易も盛になり、年貿易額は四十四億圓(現在約二)を超えてゐる。随つて我が國は今では世界の主な貿易國の一となつてゐる。

輸出品の最も主なもの生絲(三億五千萬圓)で、これに次ぐものは綿織物(約二億圓)・絹織物(一億二千萬圓)である。(木、小麥、豆類、原油、生ゴム、バルブ、)

輸入品の最も主なものは綿(四億四千萬圓)で、これに次ぐものは鐵及び鐵材(六千七百萬圓)・木材(三千五百萬圓)・羊毛(八千七百萬圓)・機械(六千萬圓)・豆粕(約三千五百萬圓)である。(米、小麥、豆類、原油、生ゴム、バルブ、)

我が國の貿易は主として神戸・横濱の二港(本邦の八割を占む)をはじめ大阪・名古屋・門司等(貿易港は内地四外に支那にある特別貿易港)の諸港で行はれ、主な取引先はアメリカ合衆國・支那・印度・イギリス・マレー諸島・ドイツ・オーストラリア等(海峽植民地、フィリピン、シヤム、カナダ、南米及中米諸國、エジプト、南阿、東部アフリカ、アジャロシヤ等)である。

交通

産業の發達に伴なつて、道路や鐵道も著しく延長して、(明治五年東京横濱間に敷設されたのが始めて) 國內の陸上交通が便利となつたのはいふまでもなく(自動車、トラックの發達著しく現在に於ける自動車數乗車三萬六千車臺、荷車百七十五萬臺、荷馬車三十萬臺、) 國內の諸港は航路が互に連絡し、その主なものは諸外國の諸港(参考資料を參照されたい)とも航路が相通じて、内外共に海上交通の便が大いに開けてきた。又航空の業も既に實用に供せられるやうになつた。(参考資料を參照されたい) 航空路の主なものとは東京を起點として大阪に至り、更に福岡・蔚山(朝鮮の慶尙)・京城を経て大連に至るものである。東京・大阪間の飛行は僅かに二時間半を要する(超特急燕號でさへ八)のみである。

鐵道

鐵道の延長は約二萬七千キロメートル(延長二九、二七四軒面積百方軒につき四)である。幹線は東京を中心とし、北は奥羽地方(東北)・北海道本島(函館本線と)を経て樺太(大泊―豊原―落合―榮濱―樺太)に至り南は中部・近畿(東海道)・中國(山陽)の諸地方を経て九州の鹿兒島(本線)及び長崎(長崎本線)に至つてゐる。(以上は表日本の幹線であるが裏日本の幹線としては奥羽本線、羽越本線、信越本線、北陸本線、山陰本線がある) 又朝鮮を縦に走つてゐる幹線(京釜線、京義線、平海線)があつて、滿洲の我が南滿洲鐵道(安奉)に連絡してゐる。これ等の幹線を連絡するために海上には鐵道連絡船(大泊―稚内、本斗―稚内、函館―青森)が往來してゐる。殊に鐵道が最もよく發達して

ゐるのは關東平野・濃尾平野・近畿地方の諸平野、九州北部の諸平野(工業地區、文化)等である。

航路

航路は横濱・神戸・大阪を主な(その他門司、長崎)起點として内外各地の港に通じ、内外の汽船が盛に往來してゐる。

交通の發達、造船業の進歩と共に、船の隻數(汽船一、七一〇隻)も噸數(汽船三百八十八萬噸、帆船二百二十八萬噸を越ゆ)も著しく増加し、我が國は今では世界有數(イギリス、アメリカにつ)の海運業國として知られるやうになつた。汽船の總噸數は約四百萬噸で、中には一萬噸以上のもの(十九隻)も少くない。かゝる大きな汽船は大てい外國航路に使用されてゐる。海運業の發達に伴なつて、我が主な港には必要な設備(防波堤、築港、繫船、岩壁、棧橋)がととのへられ、又航海上必要な處には燈臺が設けられてゐる。

郵便

郵便・電信・電話は國內到る處に通じてゐて、通信の便は殆ど完備してゐる。(郵便、電信、電話局所切手賣捌所六八、三九七)所、郵便四七四、一九〇箇) 外國航路が發達するに隨つて、諸外國との通信は益々便利となり、又海底電線(東京から父島を経て合と接続するもの、長崎から上海、大連、浦塩斯德に至るものがある)・無線電信(約五十ヶ所)によつて世界の各地と連絡してゐる。又ラヂオ(放送)

十、聴取者は百四十(も)も盛に利用されてゐる。
萬を突破してゐる)

参考資料

一、帝國鐵道延長及び密度

地方	總延長	面積百方秆につき	人口萬につき
内地	二一、五〇五秆	五・六秆	三・二秆
朝鮮	四、〇〇一	一・八	一・九
臺灣	三、三三六	九・〇	七・〇
樺太	五三三	一・五	一八・〇
關東州	二〇〇	五・八	二・三
帝國	二九、二七四	四・三	三・二

二、本邦貿易港

本州(二十二港) 横濱、清水、武豊、名古屋、四日市、大阪、神戸、宇野、糸崎、尾道、徳山、下關、
 萩、濱田、境、宮津、敦賀、七尾、伏木、夷、新潟、船川、青森
 九州(十二港) 門司、若松、博多、唐津、長崎、嚴原、三池、住ノ江、三角、口ノ津、鹿兒島、那覇
 四國(一港) 今治
 北海道(五港) 函館、小樽、室蘭、釧路、根室

三、本邦定期航空路

線路	距離	時間	備考
1 東京—大阪	四二五秆	二時間三十分	樺太(二港) 大泊、真岡
2 大阪—福岡	五〇〇秆	三時間	朝鮮(十二港) 釜山、木浦、群山、仁川、鎮南浦、龍岩浦、新義州、元山、城津、清津、雄基、羅津
3 福岡—蔚山	二四〇秆	一時間五十分	
4 蔚山—京城	三二〇秆	二時間十分	
5 京城—平壤	二〇〇秆	一時間十分	
6 平壤—新義州	一六〇秆	一時間	
7 新義州—大連	二七三秆	一時間四十分	
8 大阪—高松	一四〇秆	一時間十分	
9 高松—松山	一五〇秆	一時間十分	
10 東京—伊東	一〇五秆	五十五分	
11 伊東—下田	四五秆	二十五分	
12 下田—沼津	七四秆	三十五分	
13 沼津—清水	五六秆	二十分	

14 東京—新潟

三八〇軒

二時間三十分

四、産業別工場生産表(單位千圓)

紡織工業	一、八〇二、九九七
金屬工業	四三四、八七一
機械器具工業	四四三、三四一
窯業	一四二、三一六
化學工業	八二九、〇七七
製材木製品	一四二、八三三
印刷及製本	一六七、三一〇
食料品工業	八三四、六八七
その他の工業	一八七、一二六
加工及修理料	一九三、五八八
合計	五、一七八、一三五

五、本邦重要貿易品價格表(單位千圓)(昭和七年)

輸	出	食料品	一〇四、三三〇
輸	入	食料品	一六〇、六七三

豆類	五、九〇六	米及穀	一一、一六二
水産物	七、七五六	小麦	四九、五七三
小麦粉	二〇、五三九	豆類	四二、〇六九
製茶	八、一七二	砂糖	三、三三二
砂糖	七、七九六	原料品	八三八、八〇〇
罐詰	二二、七八四	採油原料	一四、七七三
原料品	五一、〇六七	石炭	二七、三五八
屑絲及眞綿	一、二四一	生ゴム	一五、九八九
石炭	一三、四五〇	硫安	七、〇三五
木材	一一、三三〇	棉花	四四七、四〇二
原料用製品	四八六、一九九	油粕	三四、五九九
植物性油	五、二九八	羊毛	八七、五六一
生絲	三八二、三六五	木材	三五、〇三〇
鐵材	一一、二七八	原料用製品	二〇一、二二二
綿織絲	二一、五四七	パルプ	一五、三三二
眞田類	三、二二九	毛絲	五、一一一
全製品	七〇〇、五〇九	鉄鐵	一一、一七四
綿織物	二八八、七二二	その他鐵	五二、九〇四

絹織物	一二〇、八二八	鉛	九、九七二
綿メリヤス	二〇、七三三	亞鉛	四、六二五
硝子	九、二八二	全製品	一一九、六一九
機械類	一〇、九四三	石油	三六、五三五
陶磁器	二二、九三五	毛織物	一〇、四八六
紙類	一四、〇二三	機械類	六〇、五七二

第八 アジヤ洲 (亞細亞洲)

一 總論

要旨

本洲の位置及び境域を明かにし、六大洲中で、最も大きく且つ最も多數の住民を擁してゐることを知らしめ、又本洲内に於ける山脈・河川等の分布、平地・海岸線等の概況、氣候の主要等を明かにし、是等と相關する係にある住民の分布状況、産業・交通の發達程度の概略を授け、尚ほ、本洲内に於ける各國勢力の分野を瞭解せしめて、我が國の東亞に於ける地位を認識せしめ、吾人の使命の益々重大なることを自覺せしめることが本課指導の要旨である。

時間配當(二時間)指導要項

- 一 概況
- 二 山地と産業
- 三 低地と産業
- 四 交通
- 方法一斑
- 一 本課の教材は、後

準備

地球儀―世界全圖―アジヤ洲圖―六大洲面積比較圖―本洲内主要諸國の面積比較圖―アジヤ洲地勢圖―同人種分布圖―世界人口密度比較圖―アジヤ洲主要産業分布圖―海流圖―等温線圖―雨量圖―交通全圖―ヒマラヤ山脈・エベレスト山・パミル高原・中アジヤの草原、其の他著名山岳及び河川・湖沼の實況、各地動植物及び人種の風俗等を示せる繪畫・寫真類。

解説

概況

世界の陸地(面積は約一億四千九百萬方呎。大部分北半球にある。尙ほ海洋の面積は約三億六千九百萬方呎にして大部分南半球にある。大體その比は三對七である)はこれを六大洲(アジヤ、フリカ洲、北アメリカ洲、南アメリカ洲、ユーロツパ洲、大洋洲)に分つ。アジヤ洲(位置は東半球の北東部にあつて、太平洋を距て、遠く北アメリカ洲に對し、北は北極海、南は印度洋に臨み、西はユーロツパ洲に對し、又スエズ地峽によつて僅か)はその中で最も大きく、その面積(四二〇〇萬方呎。(帝國統計年鑑)尙ほタツセにアフリカ洲と連なつてゐる)は世界の陸地の約三分の一で、その住民の總數は十一億餘(帝國統計年鑑)に達する。その人口(世界の總人口は二十億九千萬。(帝國統計年鑑)タツセ)の半分以上を占めてゐる。世界の中で最も早く開けた支那(約四千年以前に既に國開け、黄河の流域を中心として所謂支)や印度(支那と同じく約三、四千年前よりガンジス河を中心として、その一帯の地域に文化開け、印度文明と稱される)もこの洲の中にある。けれども今ではこの洲の大部分は歐米諸國(主に英、佛、露)の領地で、獨立國は極めて少く、(東洋文明の發源といはれる印度は、既に英領となつてゐる)の如く、(古代文明の中に姿を没し、支那また麻の如く)の如く。

で各論的に指導するわけであるから、茲では詳説の要はない。單に大觀的に指導しておけばよい。

- 二 本洲の最新文明國たる我が國の地位と、先導國民としての責任とに相対せしめる所がなくてはならない。
- 三 本洲の地球上に於ける位置に就ては、他洲を授ける場合の基準ともなる可きものであるから、充分理解させておかねばならない。
- 四 本洲は、廣大なる地域を占め、氣候も各地著しく相違してゐるから、極く大體

亂れ國家とは名のみにて、僅かに獨立) 僅かに我が國、滿洲(支那の一部分なりしも、昭和七年の滿洲事變を契機として、獨
國の體面を維持してゐるに過ぎない) 僅かに我が國、滿洲(支那の一部分なりしも、昭和九年三月一日、帝制を敷き、新興國として、世界
の槍舞臺に其) 支那・シヤム(て獨立を維持して居り、國勢は振はれない) 等のみである。

山地と産業

中央部は土地が極めて高く、パミル高原(世界の屋根と稱さる)を起點として、ヒマラヤ山脈(世界第

五 主なる河川・山脈。
山岳等に就ては、我が國の代表的な夫れと對比して指導することが有効である。
六 尙ほ如上の各分布に就ては、教師自身も板上に簡單なる略圖を描いて説明す可きであるが、兒童各自にも略圖を描かしめると、一層その記憶印象を適確にする事が出来るであらう

一の大
山脈。縦の延長約二千四百)をはじめいくつもの大山脈(トランスヒマラヤ山脈・スリマン山脈・崑崙山脈はヒマラヤ
山脈。幅平均二百二十)を起點として、ヒマラヤ山脈に次ぐ高峻なる山脈)が諸方に走つて本洲の主な分水嶺になつ
てゐる。中でもヒマラヤ山脈は雄大無比の大山脈で、主峯のエベレスト山(世界最高。八八)をはじめ
め八千メートル以上の高い山々(カンチンジャンガ(八五八〇米)。ドイラギリ)がたくさん立連なり、四時
氷雪をいたゞいて大空高くそびえてゐる。

これ等の諸山脈の間には西藏(カラコルム・トランスヒマラヤ・コンロン山)・蒙古(崑崙山・天山・アルタイ・ヤブロンイ
れた大)等の廣大な高原がある。又パミル高原の南西にはイランの高原(スリマン・ヒンブクシ・エルブ)
があり、更にその南西にはアラビアの高原がある。これ等の高原は雨量が極めて少い(年降雨量二
のて、川といふ川もなく、草原(中アジアの草原、シ)や沙漠(ゴビの大沙漠・タクラマカン沙漠・大鹹沙漠)がは
るゝと連なつてゐて、寒暑の差も甚しい。(所謂大陸的氣)隨つて住民は極めて少く(密度一方軒に付
一人以下の處が大部)、大てい遊牧の民(水草を追う)である。

低地と産業

中央部の高地(パミル高原を中心として走る諸)と海岸との間には、諸方面に低い大平地(シベリヤ平原・支那
の平原等)がある。その中北のシベリヤの平地と西の中アジアの平地とは、相連なつて世界最大の
平地となつてゐる。シベリヤの平地は、大部分は寒氣が極めてはげしい(特にレナ川附近は、世界の極
度乃至四十)のて産業が盛でなく、隨つて住民も少い。(口密度は一人以下)たゞオビ川・エニセー川
等の上流地方には農業・牧畜が發達してゐる。中アジアの平地は雨が少いので(年降雨量二)草原
が多い。それ故一般に牧畜(牛・馬)が主な産業となつてゐるが、たゞ裏海及びその他の湖(アラル
の沿岸や、これ等の湖に流れ込む諸川(ウラル川)の沿岸には農業(主に)が行はれてゐる。
裏海(カスピ海とも)は世界中で最も大きな湖(面積四三八、〇〇〇平方)で、その水面は海洋の水面より
も低い。(海面下
二六米)

太平洋方面には支那平野があり、印度洋方面には印度平野がある。支那平野は揚子江・黄河等
に灌漑され、印度平野はガンジス川・インダス川等に灌漑されてゐる。この兩平野は共に地味が
肥えてゐて、古來農業(米・茶・生絲等は世界に於ける獨占的産地。又棉・砂糖・ゴム等は、新大)が大いに發達し、
人口が甚だ密で(二方軒に付)アジア洲の住民の半分はこの兩平野に住んでゐる。

この兩平野に次いで開けてゐる處は太平洋及び印度洋に流れ入る諸川の沿岸の平地(日本・佛領印

等)や、本洲南東部のマレー諸島(砂糖・石油)である。

交通

鐵道の發達はヨーロッパや北アメリカ洲に比べると遙かに遅れてゐる。(歐洲約三十七萬五千軒。北米約五十一萬九千軒に對して、本洲は約十一萬)たゞ印度・ジャワ・滿洲・支那に於ては相當に發達し、(是等の地方は、各種の産業が發達し、人口又稠密なる故發達す。殊に印度は鐵道網の密なること我が國の如く、總延長に於ては我(但し面積百方軒に付いての密度は我が國の四三)又シベリヤにはアジア洲とヨーロッパ洲とを連絡する鐵道の幹線がある。(即ちシベリヤ鐵道にしてウラヂボストを経てモスコに至り更に伯林に達す。全長六五〇軒) (尙ほ中アジア・西部アジア等にも漸次發達を見んとしつゝある。特にバグダ) (一丁鐵道敷設され、此の鐵道の有する政治的意義は重大なるものがある)

揚子江・ガンジス川は水量がゆたかたて、流がゆるやかであるから水運の便が多い。殊に揚子江は川口から二千五百キロメートルの上流まで汽船を通ずることが出来る。(特に一千軒の上流、漢口ま由に往來す) (尙ほシベリヤ方面にも長大なる河川があるが、何れも、寒氣激烈の地) (域にあるため、其の下流は凍土帯をなし、水運の便は極めて少い)

太平洋及び印度洋は世界海上交通の要路で、且又日本・支那・印度等産業の盛な處がこの方面にあるから、船の交通が盛で、沿岸には港が多い。(横濱・神戸・大阪・門司・長崎・ウラヂボスト・大連・等以上太平洋) (カルカッタ・コロン洋方面) (ボ以上印度洋方面)

これ等の港からはいづれもヨーロッパ・南北アメリカ洲・大洋洲等各洲の諸港に航路が相通じてゐて、我が國及び歐米諸國の船がたえずその間を往來してゐる。我が横濱・神戸・支那の上

海(支那第一の貿易港にして、揚子江の支流黃浦江を運る事約二十六軒の地點にある。人口百五十萬。主なる輸出品は、生絲・絹織物・綿・茶で主なる輸入品は、綿布・綿絲・石油・砂糖・鐵製品・阿片等。又大造船所もあり、近時紡績業も盛。主なる取引先は日本・英) (イギリス領の香港) (珠江の河口、廣東灣の入口にある小さな島(周圍四十三軒)で其の北岸にビクト國・印度等である) (イギリス領の香港) (珠江の河口、廣東灣の入口にある小さな島(周圍四十三軒)で其の北岸にビクトの直轄植民地。歐亞南洋航路の寄航點。英國の東亞に於ける軍事・貿易上の中心地。主なる貿易品は、石炭・銅・マ) (シンガツチ・米・阿片・砂糖・綿絲・綿布・生絲・水産物等。是等はは大抵伸縮貿易による。近時紡績・造船・精糖等の工業も盛) (シンガポール) (印度支那半島の南端にある。シンガポール島にある。英國の海軍根據地。自由貿易港にして、通商貿易を) (及びコロンボ) (セイロン島の西海に岸あつて、歐亞の海上交通の要路。人口約二十五萬餘。市街は) (等は、アジア洲に於ける海上交通及び貿易) (農業は盛であるが、工業は不振のため歐米・並に我が國に原) (の中心地である) (北極海は大部分が年中結氷してゐるから、まだ船の交通には殆ど利用されてゐない。(海洋の面積は皆無である) (人文的價值並に重要)

參考資料

一、アジア洲の境界

アジア洲とヨーロッパ洲とは共に同一地勢上にある大陸なるが故に、之を別箇の大陸として考へることは不自然であるとなし、多くの地理學者間に於ては此の二大洲を合して、ユーラシヤ大陸と呼んでゐる。而してユーラシヤに於ける二大洲の境界は普通、スエズ地峽・地中海・マルモラ海・黒海・マニツチ海・裏海・ウラル河・ウラル山脈等を以て境界としてゐる。

二、六大洲の面積と人口 (帝國統計年鑑、括弧内は、タツセ) (ンアドラス*印はサハラ沙漠除外)

大陸	面積 (面積)	人口 (人口)	(人口密度)
	(方秆)	(人)	(一方秆)
アジヤ	四二〇〇,〇〇〇	一一,二四四〇,〇〇〇	二七
ヨーロッパ	九五〇,〇〇〇	四,八四八〇,〇〇〇	五
アフリカ	*二八八〇,〇〇〇	*一,四二二〇,〇〇〇	*五
北アメリカ	二一八〇,〇〇〇	一,六七二〇,〇〇〇	八
南アメリカ	一八八〇,〇〇〇	八一〇〇,〇〇〇	四
大洋洲	九〇〇,〇〇〇	八五〇,〇〇〇	一
南極洲	—	—	—
計	一,二九九〇,〇〇〇	二〇,〇九〇〇,〇〇〇	一五

三、アジヤ洲の諸國領土の面積・人口

獨立國	面積 (萬方秆)	人口 (百萬)	一方秆の人口
日本	六七	九〇	一三四
滿洲	一一九	三四	二八
支那	一一〇八	四四〇	四〇
シヤム	五二	一二	一四
アフガニスタン	七三	一〇	一四

ベール	一六五	九	一八五
トル	七六	一四	一八
イラル	三七	二・八四	一八
ネジド	一五八	二	一

屬領	面積 (萬方秆)	人口 (百萬)	一方秆の人口
露領	一七二八	三五	二
英領	五五〇	三三三	六〇
佛領	七四	二二	二八
蘭領	一九〇	五三	二八
米領	三〇	一三	四一
葡領	二	一	五三

四、ヒマラヤ山脈

パミル高原から南東に弓形をなして走り、印度北方の大隔牆となつてゐる。世界第一の大山脈にして、其の縦の延長約二千四百軒餘、幅員は平均凡そ二百二十軒。此の脈中に聳ゆるエベレスト山(八八四〇米)は世界の最高峯にして、之についてカンチンジャンガ(八五八〇米)等約四十八の大連嶺が皆、雪線(Snow Line)以上に及んでゐる。ヒマラヤ山脈とは、印度語の雪山の謂であつて、其の名の如く四時、白雪の絶えたることなく、

殊に雪に被はれたる山頂に懸れる氷河の壯觀は言語に絶してゐる。エベレスト山中には世界最大の氷河(長さ六十四軒)がある。尙ほ人類の登攀を拒避して居るのは世界の山岳中此のヒマラヤ山脈中の數峯のみにして、未だ頂上を極めし者は無く、多くの神秘を藏してゐるかの如き觀を呈してゐる。

五、アジャ洲の三大氣候區

アジャ洲は前記(解説の項)の如く、其の面積廣大にして、寒帯・温帯・熱帯の三帯に擴がり、其の上、地形複雑を極めてゐる故、各地の氣候は其の處によつて著しく相違してゐる。範圍狹少なる我が國に於てさへ、地勢の如何によつて、尙ほ若干の氣候の變異がある程であるから、アジャ大陸の氣候に就ては、之を仔細に見れば、幾多の氣候區を限らねばならぬ事はいふまでもないが、大別すると大體左の三大氣候區に分けて考へる事が出来る。

1. 季節風帯 季節風帯とは、毎年季節風が正しく去來する範圍の區域をいふのであつて、主としてアジャの南東海岸方面に屬する地方を言ふのである。即ち、日本列島は固より、朝鮮・滿洲・支那本部・印度支那半島並に印度半島其他海洋中に散在する島々はすべて此の區域に屬するものである。

季節風の起因は、今更こゝで記述する迄もなく、夏期は太陽の北上によつて、アジャ大陸の内部が漸次熱せられて來るがために低氣壓が生じ、其の結果印度洋及び太平洋上の濕潤なる空氣は、自ら南東或は南の風となつて、こゝに集中するに至るもので、尙ほまた冬期は之に反して、太陽の南下につれて、アジャ大陸の内部の氣温が次第に下降するを以て、其の大陸上の寒冷なる空氣が、比較的low氣壓の状態にある洋上の空氣中に流入す

るものであつて、即ち斯の如く季節によつて風をもたらす所のものを季節風と名付けるのである。

而して此の季節風の通過する區域に屬する所の、前記の地帯を總稱して季節風帯と呼ぶのである。固より同一季節風帯に屬する地域に於て其の位置により寒暑の差の生ずるものであることは言ふ迄もない。

2. 内陸流域地帯 アジャ洲は廣大なる地域を有し、殊に幾多の高峻なる山脈によつて、東及び南に面せる外洋から、もたらせる濕風を遮るるために、其の北西即ち内陸に面せる方面には降水量が極めて尠く、自ら外洋流域と全然水系を異にする流域を形成し、大いなる湖沼等を生じることの少ないことは既に記述せる如くであるが、是等の外洋流域と全然水系を異にする、即ち内陸流域地帯も亦大體同一なる氣候區域と見ることが出来る。

即ち此の地域に於ては、前記の如く高峻なる山脈によつて、外洋から吹き來れる濕氣を遮ぎられるがために、雨量極めて尠く、年に二百五十耗にも及ばぬ部分が大部分に行きわたつてゐる。此の地帯を稱して乾燥地帯とも呼んでゐる。

3. 寒極地帯 北部シベリヤの地方は、緯度高く地勢も亦大體北に傾ける關係により、一年中を通じて太陽熱を受けることなく、内陸流域地帯に同じく、南方は山脈に閉されて暖風を遮り、北方は北極海の寒風に吹き晒されて、且つ又海水の氣候を調節する影響を受けることが少ないがために、冬季こゝには世界の寒極地帯が最も廣く現れるのである。北緯六十八度のヤナ川の流域にあるベルホヤンスクは、年平均氣温零下十七度にして、嘗つては、一月の温度が氷點下七十度にまで下つたことさへあり、世界の寒極として知られてゐる所である。尙

ほ之より以北は寒氣の爲めに地面が年中凍結して、所謂ツンドラをなしてゐる。降水量は、イルクーツク・トムスクに於ては年に三百耗乃至四百耗を算するが故に前記の内陸流域地帯に比較すると幾らか多量となつてゐる。

六、アジャ洲の生物・産物の分布

生物及び産物の分布は、氣候の影響を受けることが大であるから、所によつて大いに其の趣きを異にしてゐる。いま本大陸を南部・中部・北部の三部に分けて、主なる動植物並に農産物に就て、大體の分布状態を明かにして見よう。

南部 南部より南東部にかけては、土地肥沃なる上に、前記の如き氣候の好影響をうけるからして、灌漑の便もよく、随つて植物の成長が盛である。其の主なるものをあげれば、椰子・榕樹・チーク・ピンラウジ・リュウガン・竹・籐等の熱帯植物に富み、また農産物としては、米・茶・綿・珈琲・甘蔗・藍・煙草等が多く、尙また此の地方の動物としては、象・狸々・鰐・孔雀・犀・虎・彪・大蛇等が棲息してゐる。

中部 中部と言ふのは、所謂前記の乾燥地帯にして、多く草地帯であるが故に、動物には、馬・駱駝・山羊・羊・犛牛等があり、産物は饒でない。

北部 北方に至るに従つて、生物も次第に其の種類を減じ、極北部に至つては僅かに矮小なる樹木及び苔の類が生じてゐるに過ぎないが、比較的南部には、蝦夷松・とと松・から松・はい松・樺等が生育してゐる。尙動物には、馴鹿・白熊・鷹虎・臘貍・狐・貂等が棲息してゐる。

七、アジャ洲の人種

アジャ洲に於ける人種分布は、ガンジス川口から裏海に引く線によつて、二大人種に分つことが出来る。この線の南西に居住するものは、白人種に屬し、その線以東の大地域に居住するものは所謂黄色人種に屬するものである。而してこの兩者の間には、今日殆んど滅亡をたどりつゝあるネグリート族が生存してゐる。左に兩人種(黄色・白色)に屬する各民族を細別して見よう。

○黄色人種

- 1. オーストリア族：マライ人・モン人・クメール人・アンナミット人・ムンダ人・コール人等
- 2. インド支那族：タイ人・ビルマ人・アッサム人・西藏人・支那人等

- 3. モンゴリア族
 - サモエード人・フィン人・オスタアツク人等
 - ツングース人・蒙古人・ヤクイト人・トルマタール人・オスマン人等
 更に、この二大別に分つ。

- 4. 太古アジャ族：カムチャツカ人・チュクチエ人等：黄色人種の原種族と云はれる。
- 5. アイヌ族：北海道・樺太に僅か残存す。

一般に黄色人種は移動的人種にして、東部アジャに於ては南方へ、又中アジャに於ては、西方及び東部地方へ移動した傾向がある。

○白色人種

1. セム・アラビヤ族

2. インド・ゲルマン族

西部及び南西部に多く分布してゐる。

尙ドラヴィダ族も白色人種に近い種族と云はれてゐる。

第尋
六常
學小
年學

理

堂

東

科

傳

(期前) 次 目

第二十三課	第二十二課	第二十一課	第二十課	第十九課	第十八課	第十七課	第十六課	第十五課	第十四課	第十三課	第十二課	第十一課	第十課	第九課	第八課	第七課	第六課	第五課	第四課	第三課	第二課	第一課	
土	水成岩・地層	流水の働	火山・火成岩	さんご・かいめん	くらげ・いそぎんちやく	いか・たこ	みみず	かたつむり	醋酸	アルコール	アンモニヤ	石灰	炭酸ソーダ	苛性ソーダ	硝酸	硫酸	鹽酸	麥	種子の發芽	えび・かに・みちんこ	二枚貝	うに・なまこ	海藻
七九	七五	七二	六六	六一	五八	五六	五二	四九	四四	四一	三九	三六	三二	二九	二七	二四	二一	一六	一二	八	六	一	

理科教育書執筆の趣旨

全體を通じて内容の充實を圖つた積りである。見た所簡單ではないかといふ様な御感想もあるかも知れないが、内容に就て御検査を願ひたい。意味の通ずる限り最少限度の文字を用ひて書いたのであり、重複は出来るだけ省いた積りである。

一、教授要旨は、教師用書の内容目的の外に、形式陶冶上の目的、教材觀に關するものをも略述し、教材教法の目的の全體を完全にする様に努めたのである。

二、學習指導過程は、變則的な方法や、奇抜な方法や、特殊なものも排け、極めて自然的に、心理的に計割した積りである。殊に教授のスタートに關しては注意して記入した積りである。

三、傍註は、文章の簡單を本位とし、解説の外に實驗觀察法の大要も記入することとしたのである。

四、備考・注意は、教科書の中の必要なものはこれを挙げ、割合必要程度の淺いものはこれを除き、更に必要なものは適宜に加へたのである。この欄を利用して内容の豊富を計らうと考へたけれ共、頁の都合で思ふ様にならなかつたことを残念に思ふのである。

四月

第一週、第一時

學習指導過程

一 海藻製品を調査せしめ材料を兒童に蒐集せしめる。

二 製品の觀察。
海藻の製品は、特例の外はそのまゝの乾燥物が多いから、それを水につけてふやかして觀察せしめれば自然のまゝのものは

第一課 海藻 (一時間)

要旨

數種の例によりて海藻の形態・生態・效用の概要を知らしむ。
單に海藻の形態、生態、效用を取扱ふだけでは本課の充分な目的が達せられないと思ふ。陸上植物とその形態を十分に比較研究せしめ、この著しい相違は、生存する四圍の事情の著しい相違によるものであることを知らせる必要がある。山間の地ではこの教材を省いたらといふ意見もあるけれども、私は左様には思はぬ。山間では海岸地の様に充分な取扱は出来ないとしても、一通りの智識を持たせる必要があると思ふ。

準備

こんぶ・わかめ・ひじき・ほんだはら・あをのり・あをさ・あまのり・てんぐさ・ふのり・つまた等の標本、寒天・ヨード・海藻の掛圖、淺草海苔、同上製造圖

教授事項

一、形態 海にはこんぶ・わかめ・ほんだはら・あをのり・てんぐさ等の如き植物數多生ず。これ等を總べて海藻といふ。(植物學上海藻は藻類中に含まるゝものにして、菌類と並ぶ植物である。水中又は濕地に生育して葉綠素を有する下等植物のことである。更に綠藻類、褐藻類、紅藻類を普通とする。)

に近いものが得られる。

三 液漬標本又は繪畫に
ついでに形態生態の
取扱。

四 生態と形態の關係的
考察。

五 海藻の生長繁殖。
六 再び用途の取扱。

海藻の形には種々あり。例へばこんぶは扁たく長くして(數十米に及ぶ)帯の如く(中助、葉脈を有せず) あをさは廣き葉の如く、わかめは深く切込みたる葉の如く、ほんだはらは細長き莖・枝に數多の葉を着けたるが如く、てんぐさは細かく枝を分ちたる莖の如し。

海藻の大きさは種類によりて甚だしく異なり、極めて小さきものもあれば、又頗る大なるものもあり。(陸上植物にては到底見る能はざる長大なるものあり。これ地球の引) あまのり・てんぐさは十數センチメートルに過ぎず。わかめ・ほんだはらは一メートル餘に及ぶ。こんぶには數メートルのものあり。

海藻の色には種々あり。あをさ・あまのり等は綠色なれども、こんぶ・わかめ・ひじき・ほんだはらは生るとき茶色にして、てんぐさ・ふのり・つのみ・あまのり等は生るとき紅色又は紅紫色なり。

二、生態 海藻は波打際より數十メートルの深さまで生ず。海藻の中にてあをさ等は甚だ浅き所に生じ、てんぐさ等は深き所に生ず。(海藻は深くとも五〇尋以上の深海に生ずることが稀である。緑藻は浅き所に、紅藻は深き所に、褐藻はその中間に生ずる。)

海藻は何れもその下端にて海中の岩などに附着し、體は水中に擴り、概ね柔にして水の動搖に隨ふ。(若し陸上植物の様に硬ければ如何なる結果となるか) こんぶ・わかめ等の下端は根の如く分れて着き、波の爲

に強く動かさるゝも容易に離れざる様になれり。(葉分吸收の用をなす) ほんだはらの葉の如き部分の

間には氣體を充たせる丸き囊ありて體を軽くす。(可成水面近く體を支へ日光を多分に受けんとするためなり)

海藻は體の全面(葉には表裏なし)によりて海水中より養分を取り、次第に成長す。花を生ずることなく、胞子を生じ、これによりて繁殖す。(植物學上下等の植物に屬する)

三、效用 こんぶ・わかめ・ひじき・あまのり・あまのり等は食用とし、てんぐさは寒天に製し、ふのり・つのみまたは糊となして用ひ、ほんだはらは肥料とす。又種々の茶色の海藻よりヨードを製す。(沃度の製法。海藻を乾燥燃焼し藻灰を作る、藻灰に水を加て浸出液を作る。これを蒸發する。蒸發昇華する) あまのりは人工によりて盛に養殖す。(精製せるものは淺草海苔なり)

海藻は重要な水産物なるのみならず、(日本人支那人等はこれを食すれ共西洋人はこれを好食せず)種々の有用なる水産動物の繁殖を助くるの效あり。(休憩の場所を與ふるのみならず、産卵の場所を與ふるものである)

海藻品別用途一覽表

- 昆 布 料理、沃度、鹽化加重、硫酸加里、海藻酸
- わかめ 食用、沃度、加里
- あらめ 沃度
- ひちき 沃度、食用

あまのり 浅草海苔、焼海苔、味附海苔、佃煮等

あをのり 海苔佃煮、菓子材料

かちめ 沃度、鹽化加里、硫酸加里、肥料

てんぐさ 寒天(トコロテン、羊羹、ヂェリー、醫學研究室用)

ふのり 糊料(髪洗、製紙、織物)

つのまた 壁用糊料

ほんだはら 肥料

おごのり 寒天原料

注意

海藻の標本は生のまゝ得らるゝものは成るべくこれを用ひ、得難きものは腊葉又は商品を用ふべし。海岸に行くの便宜ある場合には海藻の生ざる有様を實地に就きて觀察せしむべし。

備考

海藻の體の構造は高等植物に比すれば遙に簡單にして、その根・莖・葉の如き部分も構造の點より見れば高等植物のこれ等の部分に相當するものにあらず。

茶色・紅色・紅紫色の海藻は採りたる後に變色するもの多し。茶色の海藻は乾けば概ね黒くなる。紅色・紅紫色の海藻を淡水に浸せば綠色・黄色・白色等となり、その水は紅色を帶ぶ。茶色・紅色・紅紫色の

海藻を熱すれば綠色となる。

海藻は浅き所には綠色のもの多く、それより稍深き所には茶色のもの多く、更に深き所には紅色のもの多く、數十メートル以上の深さに至れば殆ど生ぜず。これ日光との關係によるなり。海藻の種類は海水の溫度及び海流等によりて大いに異なる。

こんぶは概ね寒海に生ず。北海道の沿岸には多く産し、且その種類も多し。

あまのりは東京灣などにて多く養殖す。淡水の混する浅き海中に立てたる粗朶に胞子をして自然に附着せしめ、これより發生し、成長したる後、採りて紙の如くすき乾かし、商品とす。あまのりはあさくさのりともいふ。

てんぐさは水と共に煮れば溶けて液となる。この液を布にて濾し、箱に流し入れて放置すれば固まりてところてんとなる。ところてんを寒き場所に置いて氷結せしめ、その含める水分を除けば寒天となる。寒天は水と共に煮れば再び液となり、放置すれば又固まるにより、食物・菓子の調製及びその他の用に供す。

ふのり・つのまたは水と共に煮れば溶けて粘り糊となる。これを壁土・漆喰に混するに用ひ、又絹布の糊として用ふ。

ヨードを製するに用ふる海藻はあらめ・かちめ・こんぶ等なり。

海藻には石灰藻と稱し、石灰質を多量に含みて堅くなり、恰もさんご類の如く見ゆるものあり。

四月

第一週、第二時

第二課 うに・なまこ (一時間)

要旨

海産動物に種々あることを知らしむる爲、その一方の例としてうに・なまこの形態・習性・用途を教ふ。この課は子供の研究興味を持たせるのに中々困難な教材である。食品としても子供の嗜好に適するものでなく、且つこれ等の動物に就ては子供の観察経験もなく困る。只斯かる下等な動物が如何なる形式で運動その他の生活作用を営むであらうかとの好奇心を出発として學習せしめる位がねらひ所である。

準備

うに、なまこ、うにの棘を除きたる殻、うに・なまこの掛圖、なまこ、うにの解剖模型圖、雲丹、いりこ

教授事項

一、うに うに(棘皮動物、遊在亞)は海中の岩の間などに棲む(淺海に)動物なり。體は稍扁たき球形の堅き殻(石灰質の外骨)にて被はれ、その表面には多くの細長き堅き棘あり。(棘の基部は小疣に附着し)體には上面・下面の別あれども、前後・左右の別なし。その下面の中央に口あり。口には五つの齒ありて、(アリストテレスの)海藻・小動物などを食ふ。(上面中央に肛門開孔す。星形殖板より小形の五骨片は眼板と)稱し神經の通ずる所である) 棘はその着ける所にて動くことを得。棘に交りて多くの糸の如き細き足あり。(五個の間歩帯と五個の歩帯)

學習指導過程
一海産物として如何なるものが吾々の食物に關係あるかを問答し、それ等の標本を示して経験の有無を問答する。
二標本の観察を行はしめこれ等が如何にして食物をとり、運動し呼吸して生育すかを推測せしめ、これ

を出発として詳細なる観察を指導する。
三形態生態の觀察研究。
四用途の研究。

と交互し歩帯の有孔)足は甚だ軟く、伸縮自在にして、その先端は物に吸着くことを得。うには足にて岩などに吸着きて止り、又一方の足を伸してその先端にて吸着きたる後これを縮めて體をその方に引寄せ、以て徐々に運動す。(棘をも利)うにの體內にある卵は食用となる。うにと稱する食品はこれなり。(生食又は鹽漬として食用する。下) 二、なまこ なまこ(棘皮動物海)も海中の岩の間などに棲む動物なり。(大體うに)體は軟く(棘を縮めれば收)圓筒状にして横たはり、その一端に口あり。口の周圍には二十本許の軟き指の如きものあり。(觸手で)その先は細かく分れたり。これにて小動物などを取りて口に送り、食物となす。 體の上面には多くの疣あり。體の下面にはうにの足に似たる多くの細き足(管)あり。なまこは足の先端にて岩などに吸着き、徐々に匍ふ。なまこは生にても食用となり、(酢の物として食用すること多し。内)又これを煮て乾かしたるものはいりここと稱し、食用に供す。(支那方面に多く輸出される)

注意

生きたるうに・なまこの得らるゝ場合には海水を入れたる器中に養ひ置きて生徒に示すべし。時々その海水を濾して清くし、又これを瓶に分ち取りて強く振動かし空氣をよく混ぜしむれば、同じ海水を稍永

く使用し得べし。

生きたるうに・なまこの得られざる時はアルコール漬の標本を示し、尙その得難きときは乾かしたるうに及びいりこを示すべし。

備考

うに・なまこは夏季産卵す。幼蟲は何れも親と異なりて海中に浮游す。

うには夏の頃採りて殻を割り、卵を集め鹽を加へてこれを貯ふ。

なまこは冬の頃採る。いりこを造るには内臓を除き去る。内臓を鹽漬にしたるものはこのわたと稱して食用とす。

うにの棘は體を保護する用をなし、又多少運動を助く。體面には棘及び足に交りて小さき缺の如きものあり。體面に附着せるごみを除き、且防禦の用をなす。棘を除きたる殻には多くの丸き突起あり。棘はこれに着けるなり。又この殻には多くの小さき孔あり。足はこの孔より出でたるなり。

うには種類多し。中には體に前後・左右の別あるものもあり。うにの色は紫黒色・茶色等なり。なまこはその棲む所によりて色及び模様を異にす。

第三課 二枚貝 (二時間)

要旨

四月

第二週、第一時

數種の例によりて二枚貝の形態・習性・用途を知らしむ。

これ等の動物は子供の觀察經驗の内にはあるけれ共その生活狀態の詳細なる觀察を缺いて居る。殊に貝殻に就ては多少の經驗知識を持つて居やうけれ共、内部に就ては不案内である。本課ではこの點を明かにする様にせねばならない。

準備

はまぐり・あさり又はしじみの殻の中より取出したる軟き體

水を入れたる器にしじみ又はあさりを活したるもの、かき養殖圖、眞珠製品

はまぐり・あさり・しじみ・かき・あこやがひの殻、貝卸、二枚貝類圖、鹽酸、貝細工物

教授事項

一、形態 はまぐり・あさり・しじみ(門、瓣鰓綱)等は二枚の堅き殻を有し、(大部分石灰質にして、内面に眞珠層あり。)その中に軟き體あり。(内骨格を有せず。軟體の名もこれより出づ。)かゝる動物を總べて二枚貝といふ。

殻は體の左右にありて、上側の中央にて(齒状突起を有し)蝶番の如くに相連なり、多少開閉することを得。(自然に放置すれば、開くものである。)

殻の中なる軟き體を取出してこれを見るに、その左右には殻と同じ形の軟き膜あり。(これをといふ。軟體動物に共有のものである。)この膜は殻の裏面に密着せるものなり。體の一端には相並べる上下二本の管あり。(水管といふ。小形にして背面に近きものは出水管、他は入水管である。)この所は體の後端なり。體の下側には斜に前方に向

第三課 二枚貝

學習指導過程

一種々なる二枚貝の貝

殻標本を觀察せしめ

その形と開閉等につ

いて考察せしめる。

二生きてゐる二枚貝を

觀察せしめ貝殻は内

部保護の具であるこ

とを實驗的に知らし

める。

三生きてゐるものを小

刀にて開かしめ貝柱

を切ると自然に開く

ことより貝柱の作用

を教へる。

四殻を開きたるものに

つき内部の形態を觀

察せしめその生活作

用を關係的に考察せしめる。
五用途の取扱。
六二枚貝の種類と用途を問答する。

ひて出てたる一枚の舌の如き形のものあり。これ足なり。(斧の如き形を有し泥砂中に押し入れるから斧足ともいふ。)體の左右の膜と足との間には各側に二枚づつの扁たき大いなる鰓えらあり。體には頭と名づくべき部分なく、口は足の根元の直前にありて、その左右に二枚づつ三角形の唇あり。

二、習性 しじみは川に棲み、はまぐり・あさりは海に棲む。何れも浅き水底の泥・砂の中に潜み、殻を少しく開きて下側より足の先を前方に出し、これを伸縮して泥・砂を押分け以て徐々に匍ふ。(砂と足との抵抗を利するものである。)又體の後端の管を伸して辦の間より出し、常に水を下の管より左右の膜の間に流れ入らしめ、上の管より流れ出てしむ。流れ入りたる水中に混れる微細なる生物(プランクトン。硅藻類)が口に達すれば、これを取りて食す。糞は體の後端の上の管より水と共に流れ去る。(多く雌雄體を異にし卵の生有性生殖を行ふ。)

これ等の二枚貝は物に驚けば、忽ち體を縮めて殻を閉ぢ、以て身を護る。殻を閉づるは體の前後兩部に於て左右の殻を連ぬる貝柱と稱する。(貝柱は前後二個を有するものと、貝の種類により一個のみを有するものとの別がある。)肉の縮むによる。

三、用途 二枚貝の肉は概ね食用となる。(生食する物、乾燥せる物、漬物、罐詰とする物等がある。)かきは一方の殻にて海中の岩などに固着せる二枚貝にして、その肉美味なるにより、食用として養殖せらる。二枚貝の殻の美しきものは鈕などを造るに用ふ。(南洋産大形のものを)あこやがひと名づくる海

産の二枚貝は體内に美しき眞珠を生ずることあり。これを取りて裝飾品とす。(あこや貝を養作る三重縣下御木本養殖場は世界的に有名である。)

かきの養殖

かきの産は廣島縣が本場であるけれ共、近來は東京灣方面にも盛んに行はれて相當の成績を収めて居る。種類は主にマガキである。

かきは生食する方が多いが採取の季節に依つて、生殖期に當り、有毒なる成分を體から分泌し、爲に中毒を施す場合もある。

西洋ではRの字のつかない月にカキを食つてはならないと云ふ言葉さへもあるさうである。カキ鍋、カキフライ、カキの酢の物などを食ふ場合には相當の注意を要する。

注意

はまぐり・あさり又はしじみの軟き體は成るべく大なるものを成るべく多く用意し、生徒に分ちて形態の觀察に用ふべし、これを殻より取出すには稍熱き湯を注ぎて殻を少しく開かしめたる後、殻と體との間に箸を挿入れて貝柱を殻より離すを便とす。

二枚貝の習性は水中に活したるものに就きて觀察せしむべし。眞珠は實物を示すを可とすれども、得難きときは殻の裏面と同じ質の丸き粒として教ふべし。

備考

二枚貝の殻の相連なる所には弾性に富める靱帯ありて常に殻を開かんとす。二枚貝を煮るとき殻の開くは貝柱が熱の刺激によりて烈しく収縮し殻より離るゝによる。

二枚貝は種類甚だ多し、殻の形が左右同様のものと、相異なるものとあり。體の後端の管が二本相離れたるもの、相合せるもの、長きもの、短きものあり、足の長大なるもの、短小なるものあり。又極めて小さき足より糸を殻の外に出し、これにて岩などに附着するものあり。

二枚貝の殻には焼きて石灰となすものあり。

第四課

えび・かに・みじんこ (二時間)

要旨

前に昆蟲及びくもに就いて教へたる事項と比較し、えび・かに・みじんこの形態・習性・效用を教ふ。
えびと言へば子供としては食用した経験が一番多く、かにはこれを弄んだことからこれを観察した経験が一番多い。授業としてはこれ等を出発とす可きで、いきなり昆虫や蜘蛛と比較観察せしめることは無意味であり困難でもある。本教材を動物の形態學分類的には教へた後に取扱ふべきで、初めからその考へを出すことは教授上不利である。

準備

えび、かに、みじんこ、硝子水槽、えび・かに種類圖、タモ網

四月
第二週、第二時
四月
第三週、第一時

學習指導過程

第一時

一 えびを食べた経験を

語らせる。

1 どこに一當肉が多

いか

2 それは何故か

3 殻はどこが一番堅

いか

4 堅い皮があつても

運動に不自由ない

理由如何

二 學校の教室の水族器に飼育せる小蝦の運動状態の觀察とその結果の發表。

三 標本の蝦につきその形態を觀察せしめつつ生きて居るものにつき生活状態を觀察せる事項と關係的の考察を試みしめる。
四 昆蟲類、蜘蛛類とその形態の比較を行はしめる。

教授事項

一、えびの形態 えび(節足動物門、甲殼綱、軟甲目、えび)の頭と胸とは相合し、一枚の大きいなる堅き皮にて被はる。(故に頭胸部と呼ぶ)腹は六節より成り、その後端に尾あり。(中央に一枚左右に各二枚宛五枚あり。左)腹の各節は別々に堅き皮にて被はれ、互に動くことを得。

頭と胸とより成れる部分の前端には、二本の長さ觸角と(外側にあつて長)二本の短き觸角と出で、(内側にあり、尖)又二つの大いなる眼あり。(有柄の複眼)眼は柄の先において、柄にて自由に動く。

頭と胸とより成れる部分の下側には、前端に口(大顎小顎あり。顎脚三對を有する)ありて、後方に十本の長さ脚着けり。脚は幾つかの節より成り、その先は尖り又は缺となる。口には左右より向ひ合へる顎ありて食物を噛む用をなし、尙その傍に幾本かの短き脚の如きものありて食物を口に運ぶ用をなす。(消化器は胃肝臓を主要部分とし、胃には齒を有して食物を噛み直ほし、肝臓より分泌する消化液にて消化する)腹の下側には、幾つかの扁たき脚あり。尾は中央の一枚とその左右に並べる楕圓形の扁たき四枚とにて扇の如き形をなす。この左右の四枚は尾の直前の節に着ける脚なり。

二、えびの習性 えびは海又は川・池・沼などの水中に棲み、常には岩などの隙間に隠れ、時々出てて長き脚にて歩み、扁たき脚にて泳ぎ、その長き脚にて小さき動物を捕へ、これ

五えびの種類と效用。

第二時

一水族器に飼育せる蟹

の運動其他生活状態の観察及び結果の發表。

二蟹の生活状態と形態

との關係考察。

1 歩き方と脚

2 食物と飲みと口

3 感覚器と運動

4 水中と空中生活を

する理由

三蝦蟹の形態を比較せしめる。

四食用蟹に就て教へる。

五みちんこの生活状態

を豫め觀察せしめ、

簡易なる形態を有す

れ共生活に必要な

最小限度の機構を有

を食ふ。物に驚くときは腹を急に前方に屈めて尾にて強く水をかき、以て速に後方に泳ぎ去る。

三、かに かににはえびに似たる動物にして、(分類上の地)多くは水中に棲めども、陸上に棲む

ものもあり。腹は甚だ小さくして前方に折返り、(この部分に卵を抱くものあり。子蟹)頭と胸とに

より成れる部分の下側に隠れたり。(あつてはえびと殆んど異なることなき時代あり)脚は十本ありて、

頭と胸とより成れる部分の下側に着けり。その中にて最も前の二本は先が強き鋏となり、

食物を捕へ、又敵を防ぐ用をなす。他の八本は長くして歩む用をなし、又は扁たくして泳

ぐ用をなす。(これ等の脚は外傷に對して落ち易い。又わざと落して外敵を)

四、みちんこ みちんこは水中に棲む甚だ小さき動物にして、えびの如く堅き皮にて被はる。

種類多くして、普通のもののは楕圓形なれども、(これをかいみち)體の後部の細長くなれるもの

もあり。(けんみちん)何れも長き觸角と幾つかの扁たき脚とを動かして泳ぐ。(藻類を食用する。繁殖が極めて速か

る。)

五、效用 えび・かにの肉は食用となる。えびの肉は(いせえびは美味)腹に多く、かにの肉は

脚に多し。(たればかにには雑語用)頭と胸とにより成れる部分は肉少く、殆ど臟腑にて充たさる。

(つまり運動する一部分に) (一番肉が多いのである)

することに留意せしめる。

六みちんこと人生に就て知らしめる。

金魚にみちんこを食はせる。

みちんこは魚の餌となる。繁殖甚だ速にして、魚を養殖するに必要なものなり。(間接的に人與へるもの)

注意

えびの形態を觀察せしむるにはいせえび・くるまえび・てながえびの如き大なるえびを用ふべし。何れ

も生きたるもの又は新鮮なるものを可とすれども、得難きときはアルコール漬標本又は乾燥標本を用ふ

るも可なり。

えびの習性を觀察せしむるには、水を入れたるガラス器に小さきえびを活したるものを用ふべし。

かには何れの種類を用ふるも可なり。

みじんこは豫め布片にて造れる網にて成るべく多く採集し置き、試験管又は小さきガラス瓶に水と共に

分ち入れて、生きたるまま虫眼鏡にて觀察せしむべし。

備考

えびの頭胸部の脚は前二三對に缺あるもの普通なれども、いせえびにては一つも缺なし。

いせえびの皮は石灰質を多く含み、他のえびの皮よりも遙に堅く且厚し。

えび・かにの頭胸部の左右には堅き皮の中に隠れて脚の元に鰓あり。水中にて呼吸する用をなす。陸上

にてえび・かにが泡を出すは濕りたる鰓に觸れたる空氣が頭胸部の前端より出づるによる。

復習 四月

第三週、第二時

五月
第四週、第一、二時

第五課 種子の發芽 (二時間)

要旨

種子の發芽する有様を種々の例に就きて教へ、並びに種子の發芽に要する事項を知らしむ。これには別段の教授らしい形式を経なく共、これ等の植物を苗床に播種栽培して、その生育を觀察せしむればそれで充分である。その教材は今少し以前に取扱はる可き教材である様に思ふ。

準備

大豆の種子の乾きたるもの及びこれを水に浸し置きたるもの

大豆・そらまめ・あさがほ・松・稻の種子の發芽したるもの、にがり、朝顔鉢數個、如露・シヤベル等の園藝用品

教授事項

- 一、大豆の種子 大豆の種子は楕圓形にして稍扁たく、その一側には果實の皮に着きし小さき痕あり。(成熟まで養分の通ひし所なり)種子の皮を去れば、中に二枚の厚き子葉あり。(双子葉植物の代表)これに連なりて一本の小さき棒の如き若き莖あり、その先端は若き根なり。子葉を開き見れば、その間に挟まりて若き莖の頂に着ける一つの小さき芽あり。(子葉は發芽の際地表面上に現はる)
- 二、大豆の種子の發芽 大豆の乾きたる種子は堅けれども、これを水に浸し置くときは多量

學習指導過程

- 第一時
一 種子の觀察。
形状、良否、選別等
- 二 苗床又は鉢土の調製。
- 三 播種作業。
- 四 灌水等の手入作業。
- 五 觀察日誌の記入。
- 第二時
一 各自播種より栽培まで手入れせるものを材料として經過發表。

- 二 材料につき觀察研究。
- 三 各材料を比較考察して發芽の有様の相違を研究せしむ。
- 四 發芽に必要な要件を概観せしめる。

の水を吸ひ、膨れて大きく且軟くなる。乾きたる種子を地に蒔くときも、種子は地中より水分を吸取りて膨るゝなり。(種子の構造はこの時に觀察せしめると都合がよい)

蒔きたる種子が十分に水を含みて膨るれば、その中の若き莖は成長を始め、遂に種子の皮を破りて出づ。(記録)かくしてその先端の若き根は下方に伸び、一本の主なる根となりて地中に進み入り、これより多くの細き根次第に分れ出づ。(記録)若き莖は上方に伸びて地上に立ち、これに伴ひて子葉は種子の皮を脱棄して地上に出て、綠色となり、互に相開く。

(記録)若き莖の頂に着ける芽は次第に成長し、かくして子葉の間より莖伸出て綠色の葉を出す。(記録)葉は初小さくして疊まり、後に廣く開く。而して子葉の上方にある二枚の葉は各一枚より成り、(記録)更に上方にある葉は各三枚に分れたり。(記録)子葉は後に離れ落つ。

三、そらまめの種子の發芽 そらまめの種子は大豆の種子に似たれども、これを蒔きたるとき子葉は種子の皮の中より出でず。又子葉に連なれる若き莖は地上に出づることなく、その頂に着ける芽は成長して地上に立てる莖となり、葉を生ず。(大豆と大體同様なれ共部分の成長に相違があるので著しく發芽の狀態が異なる様に見えるのである。)

四、あさがほの種子の發芽 あさがほの種子を蒔けば、二枚の細かく疊まりたる子葉に連なれる若き莖は先づ種子の皮を破りて出て、(栽培種中には種皮が堅過ぎ)その下端の若き根は地中

に入り、子葉は若き莖の伸ぶると共に地上に出て、緑色となりて廣く開く。その後、若き莖の頂より芽出て、これより莖伸びて葉を生ず。

五、松の種子の發芽 松の種子を蒔けば、種子の皮の中より若き莖出て地上に立ち、その上端に數本の細長き緑色の子葉を着く。(多子葉植物の代表的の)後、若き莖の頂より芽伸びて幹となり、葉を生ず。(ものと見るを得べし)

六、稻の種子の發芽 稻の種子を蒔けば、胚の中より芽が一本の角の如き形をなし籾の外に伸出て、(單子葉植物の代表的の)又その下方より多くの細き根を生じ、後、芽の中より莖及び葉伸出づ。(のと見ることが出来る)

七、種子の發芽と水及び温度 種子は概ね乾きたるまゝにて永き間生存し得るものにして、(乾燥によつて發芽を調節する)その發芽するには十分の水を要す。種子を蒔くに先だちて暫く水に浸し置けば、種子は多量の水を吸ひて含めるにより、速に發芽す。(種子の種類によつてこの過程をとるものあり)

又種子の發芽するには暖さを必要とす。されば地上に落ちたる種子も冬は發芽せず。寒さ頃に種子を發芽せしむるには、特に設けたる暖き所に種子を蒔く。(温床又は温室を用ふ。種子發芽にはなく、種子そのもの、發芽力にも考へ及ぼしたい。)

八、種子の發芽と養分 種子は子葉又は胚乳の中に多量の養分を貯へ、その發芽するとき若

き莖・根及び芽などは先づこの養分を用ひて成長す。暫くして根伸ぶればこれにて地中より水と共に養分を吸取り、緑色の子葉及び葉出づればこれにて空氣中より炭酸ガスを取り、これを用ひて養分を造る。

作物などの種子を蒔くには、先づその種子の中にて大きく且重きものを選ぶ。(風により、又又鹽水選等)これよく熟して養分を多く貯へたる種子は丈夫なる苗を生ずるによる。種子の重

さものを選び取るには、適當の鹽水又はにがりに種子を投じて沈むものを取ることにあり。(選種には品種の純粹、熟度、保存の期間等も問題となる譯である。本教材に連絡して播種方法苗床の作り方、苗床の手入等も取扱ふべきである。)

注意

この課に用ふる種子及びその發芽したるものは何れも多數に用意して各生徒に分つべし。

大豆の種子の内部を観察せしむるには前夜より水に浸し置きたるものを用ふべし。

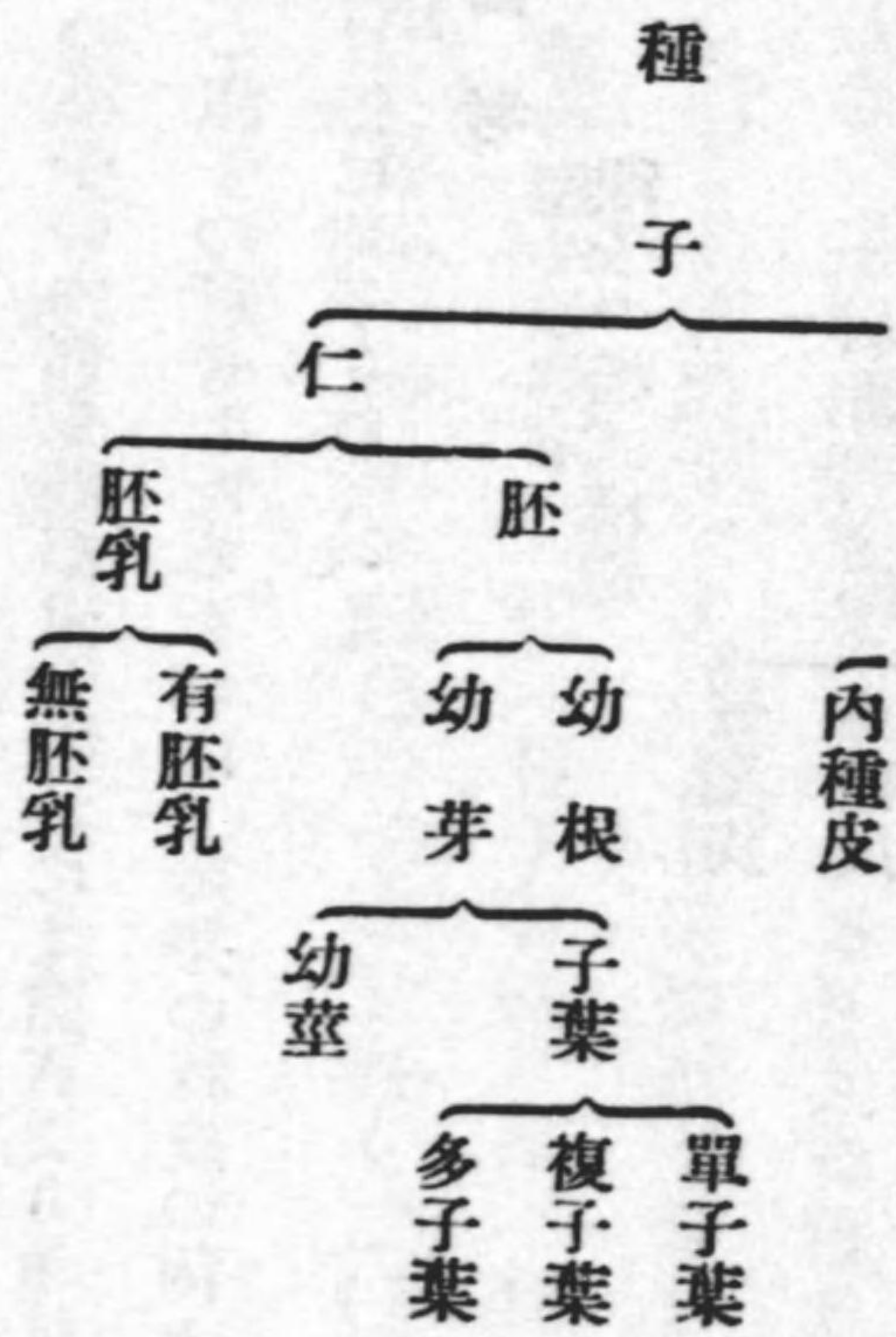
大豆の種子の發芽したるものは、發芽の程度の種々なるものを揃へ置くべし。この爲に凡そ二週間前より數日毎に種子を蒔くべし。

備考

種子の模式構造

假種皮

種皮 外種皮



選種の標準

- 1 純正 Ⅱ 品種の純正なること
- 2 清潔 Ⅱ 他の種子、土砂塵芥を有せざること
- 3 熟度 Ⅱ 未熟種子にあらざること
- 4 新古 Ⅱ 發芽力保有年限による區別
- 一年 Ⅱ 葱、玉葱、麻等
- 自一年 Ⅱ 粟、玉蜀黍、漬菜等
- 自二年 Ⅱ 稻、大小麥、大小豆、茄子、西瓜等
- 自三年 Ⅱ 大根、蕪菁、豌豆、そら豆、胡瓜、南瓜等
- 自四年

- 5 形状 Ⅱ 固有の正常形を有するもの
- 6 色澤 Ⅱ 種子外面の色と光澤
- 7 輕重 Ⅱ 比重選種法にする、選種液は食鹽水又は苦汁液を用ふ
あさがほ及び松の種子には皮と胚との間に胚乳あり。
作物の種子を選ぶには、篩を用ひて大小を別つことあり。箕を用ひて輕重を別つことあり。水に投じて浮ぶものを捨つることあり。
鹽水は比重一以上一・二未滿にて輕重を別つべき場合に用ひ、にがりは一・二以上にて輕重を別つべき場合に用ふ。稻・大麥などには鹽水を用ひ、小麥・裸麥などにはにがりを用ふ。作物の種類及び品種によりてこれ等の液の濃さを適當ならしむ。

第六課 麥 (二時間)

要旨

前に稻に就いて教へたる事項と比較し、麥の形態・用途・栽培に就いて教へ、並びに菌害の例としてその黒穂に就いて教ふ。

この教材も尋常六年の子供には餘り容易過ぎる教材ではないかと思ふ。單なる教材と見ればさうなるから、實用方面の知識や、病害等の教材を加へれば相當教材となる。形態のことは稻と大差がないから、

學習指導過程

第一時

一 麥を栽培せる畑にて觀察。

1 麥の栽培してある様子

2 發育の状態

3 稻の様に多くの枝を出して株をなせること

4 開花せる様子

二 一本の麥の形態と生態の觀察の研究。

1 鬚根を有すること

2 莖の中空有節のこと

3 葉の半行脈

4 穂の出てる有様

5 一個の花の構造觀察
三 花を風媒花として考

比較して自發的に研究せしむべきである。第一時と第二時は間を距てて取扱ふ方がよい。

準備

麥の根・莖・葉・花を具ふるもの、花の穂、果實の標本、麩、麥芽、黑穂、麥の耕作圖、黑穂菌圖、麥の種類圖、麥粉、麥・稻の模型圖、顯微鏡、デアスターゼ

教授事項

一、形態 麥(禾本科植)は稻に似たる植物なり。花は莖(有節)の上端に長さ穂をなして密に集り着き、(普通稻と異り)雄蕊は三本あり。(稻は)花を包める二枚の苞の中にて外側のものは甚だ長さ芒を具ふることあり。

麥には大麥・裸麥・小麥等あり。何れもその果實は二枚の苞の中にて熟すれども、大麥の果實は苞と離れ難く、裸麥・小麥の果實は苞と離れ易し。

二、用途 麥の種子の胚乳には多量の養分を貯ふ。麥の食用となる部分は主にこれなり。大麥・裸麥は果實を搗き、(苞を取り去る)煮て食用とす。小麥は果實をひきて小麥粉となし、種々に調理して食用とす。小麥粉の粕は穀と稱して牛・馬などの飼料とす。

麥の果實は又味噌・醬油を造るに用ふ。大麥の苞に包まれたる果實を水に濕して少しく發芽せしめたるものを麥芽と稱し、(デアスターゼに富み)ビール・飴の製造に用ふ。

察せしめる。

四 黑穂の觀察。

黑穂菌の檢鏡觀察

第二時

一 麥の發育の現況を問答し、それを出發としてそれまでの發育の經過栽培作業に就て問答する。

二 麥の花についてその形態生態の大略と復習する。

三 麥の果實の研究。

四 麥の種類と形態上の相違研究。

五 麥の用途問答。

1 常食すること

2 牛馬飼料

3 小麥と小麥粉及その製法と用途

4 麥酒の製造

麥の莖は帽子などを造るに用ふ。(小麥大麥共に用ひられる。)

三、栽培 麥を作るには十月・十一月頃、畑をよく耕し、(水田を乾かして)肥料を施して、種子を蒔く。種子は間もなく發芽し、それより生ぜる苗は少しく伸びたるまゝ(約十五)冬を越し、(冬期中麥ふみを)春に至りて盛に成長す。この間に三四回耕し、且肥料を補ふ(石灰分を與ふる必要あり)さすれば四五月頃花を開き、六月頃果實熟す。このとき刈取りて果實を取る。(麥刈り、乾燥、麥打ちは作業の主なるものである。普通二毛作とする。)

四、黑穂 麥の穂は黑穂と稱する黒茶色のものとなることあり。これかびに似たるものが穂の中に蔓りて黒茶色の胞子を生ずるによる。この害を豫防するには黑穂を拔取るをよしとし、又麥の種子を蒔くに先だち、暫く水に浸したる種子を稍熱き湯に浸して種子に附着せる胞子を殺すことあり。(先づ根に寄生し、花部に到りて繁殖する。胞子は粉狀球形にして棘を有する。)

注意

麥の根・莖・葉・花に就いては大麥・裸麥・小麥の何れを用ひて觀察せしむるも可なり。

花は少しづつ生徒に分ちて觀察せしむべし。

果實の標本は大麥・裸麥・小麥を揃へ置くべし。

備考

大麥・裸麥には、花を包める外側の一苞の外側に二箇の細長き小片あり、花は穂の軸の各節に三箇づつ並び着き、一つの節に着けるものと次の節に着けるものとは互に反對の側にあり。これ等の花が完全に發育すれば穂は六條又は四條となり、各節の三箇の花の中にて中央のもののみ發育すれば穂は二條となる。

小麥には、花が二苞に包まれて四五箇許づつ密集し、その集りの兩側に苞と略同様の形の二片あり。かかる花の集りが穂の軸に互違ひに着く。

大麥・裸麥・小麥には、何れも芒あるものと無きものとあり。其他、穂・果實・莖なども多少相異なる、品種多し。

小麥粉はパン・うどん・さうめん・麩などを造るに多く用ふ。

麥の黒穂の原因となる黒穂菌には數種ありて、胞子が粉狀に分れて容易に散るもの、胞子が稍固まりて粉狀とならざるもの等あり。黒穂菌の胞子の附着せる種子を蒔けば、種子の發芽したる後間もなく黒穂菌は地中より若き莖に入り、莖の成長につれて上方に進み、遂に穂に入りて蔓る。黒穂を豫防する爲、種子に附着せる胞子を殺すはこの故なり。これに用ふる湯の温度は五十五度位にして、種子を先づ數時間冷水に浸したる後この湯に五分間許浸すなり。

第七課 塩酸 (一時間)

五月

第六週 第一時

要旨

酸の一例として塩酸を取り、その性質・作用を知らしむ。

塩酸を無機酸の第一教材とすることは別に異論はないけれど、今一步酸として取扱ふとすれば私は有機化合物であるけれど共酢を用ふべきであると思ふ。而して酸味と酸性反應といふ主要な二性質を教へて無機酸に入り、金屬との作用有機物質との作用などに入らせたいと思ふのである。

準備

濃き塩酸、亞鉛、鐵線、青色の試験紙、ピーカー、試験管、試験管立、アルコールランプ、マッチ、水、フェノルフタリン、塩化水素發生装置、食塩、硫酸

教授事項

一、性質 塩酸(HCl)は無色(純粹のもの)の液體にして、(工業用のものは)その濃きものは烈しき臭ある煙を出す。(これ塩化水素にして空氣中濕氣多き日に濃し、これ塩酸銀別の第一要件なり。)

實驗一) ピーカーに水(五〇位)を入れて少量(約三)の濃き塩酸を注ぎ加へ、これを嘗むるに酸味あり。又これに青色の試験紙(マス)を浸すに試験紙は赤色に變ず。(青色試験紙に代ふるにフェノールの反應を見ず。)

かく塩酸は酸味あり。又青色の試験紙を赤色に變ず。かゝる性質ある物を酸といふ。

實驗二) 數滴の濃き塩酸を試験管に入れ、アルコールランプの火にて熱すれば、(徐々に熱し

學習指導過程

一塩酸を示して、塩酸なることの名稱を知らしめ、この藥品は如何なる場合に如何様を使用せるものなるかの經驗を問答する。

二塩酸の見掛上の性質の研究。

三酸味あることの實驗。

四リトマスに對する、フェノルフタリンに對する作用の實驗

五金屬と作用して水素を發生することの實驗。

六塩酸ガスより塩酸を得ることの教師實驗及び塩酸より塩酸ガスの發生することの觀察。

騰せしめざる) 烈しき臭ある白き煙の出づると共に塩酸は次第に減じ、遂に試験管は全く乾くに至る。

これ塩酸は塩酸ガスと稱する烈しき臭ある氣體を水に溶かしたるものにして、この氣體が水蒸氣と共に出去るによる。(藥局方濃塩酸は比重一・一五二にして約三〇%の塩化水素を含み、同稀塩酸は一もの)を注ぐ。(NaCl + H₂O = NaSO₄ + HCl)

二、作用

實驗(三) 亞鉛(粒状にせ)の小片と鐵線とを(最も細きものをよしとし、鐵に別々の試験管に入れ、これに淡き塩酸(水二に就て濃塩酸一位のもの)を注ぐときは、亞鉛も鐵もその表面より盛に泡を出し、次第に溶く。(2HCl + Zn = ZnCl₂ + H₂) (Fe + 2HCl = FeCl₂ + H₂)

かく塩酸は亞鉛・鐵などを溶かす。このとき出づる氣體は水素なり。(水素なることを檢するには、つけ爆發的に燃えることによつて知るべし。)

注意

實驗(一)に於て塩酸の味を知らしむるには、生徒各自に小さき紙片を用意せしめ、その端に淡き塩酸を少しく附着せしめ、これを嘗めしむるを便とす。

實驗(三)に於て盛に氣體の出づる頃、試験管の口にマッチの火を近づけ、その氣體の燃ゆることによりて

水素なることをしらしむべし。

第八課 硫酸 (一時間)

要旨

酸の一例として硫酸を取り、塩酸と比較してその性質・作用を教へ、並びにその用途に就いて教ふ。硫酸はその取扱塩酸よりも困難であるから、第二教材とすることはよいけれ共、その用途に於ける重要からすれば酸中第一位にあるものである。故にこの點に留意して、その性質を明確に知らしめる必要がある。前の塩酸の性質との類似點を比較せしめねばならない。

準備

濃き硫酸、亞鉛、鐵線、青色の試験紙、紙、ビーカー、ガラス棒、試験管、試験管立、マッチ、水、稀硫酸、メスシリンダー、銅屑、アルミニウム、片和紙、蒸發皿、硝子棒、白砂糖、硫酸肥料、曹達灰、主たる硫酸塩

教授事項

一、性質 硫酸(H₂SO₄)は無色(純粹な)の液體にして、臭なく、(不純なる工業用のものは稍々黄色を呈とす)その濃きものは粘り。 (普通九四―九八%にして、比重は一・八六三―一・八四) (有機質を含みて不純となれば黒色位である。大氣中の濕氣を取りて體積を増す性あり)

實驗(一) ビーカーに水(五〇cc)を入れ、ガラス棒にてこれをかき廻しながら少量(二cc)の濃き

五月

第六週 第二時

學習指導過程

一硫酸を示して硫酸の名稱を教へ、これまでに如何なる場合に如何様に用ひたるかの經驗を喚起せしめる。

二見掛上の性質を塩酸と比較せしめる。

三稀硫酸を作る方法を教へる。

四稀硫酸を用ひて酸性の味と反應を兒童に實驗せしめる。
 五金屬との作用、有機物質との作用を兒童に實驗せしめる。
 六硫酸の製造及用途。
 七塩酸との比較。

硫酸を徐々に注ぎ加へて淡き硫酸となし、これを嘗むるに酸味あり。又これに青色の試験紙を浸すに試験紙は赤色に變ず。(フェノールフタリンに對する反應は塩酸に等し)

二、作用

實驗(一) 紙に一滴の濃き硫酸を附着せしむれば、その部分は朽ちて孔を生ず。(稀硫酸を用ひて作らせること)も一案である。

濃き硫酸は紙のみならず、動植物體に對して又かゝる烈しき働をなす。(澱粉砂糖の如きものになりて炭素を止む。人體に對しても劇烈なる作用をなす。取扱上注意を要する所以である。)

實驗(二) 亞鉛(粒状のもの)の小片と鐵線(線は細きものを用ひ、又鐵)とを別々の試験管に入れ、これに淡き硫酸(局方の稀硫酸と稱するものは硫酸)を注ぐときは、亞鉛・鐵はその表面より盛に泡を出し、次第に溶く。(單に亞鉛、鐵のみならず、銅、アルミニウム等普通の金屬とは皆作用する。)

かく淡き硫酸は亞鉛・鐵などを溶かす。このとき出づる氣體は水素なり。 $(H_2SO_4 + Zn = ZnSO_4 + H_2)$

三、用途 硫酸はソーダ(曹達)・塩酸(食塩に作)・肥料(アンモニヤと化合せし)その他種々の物(金屬塩類を)を製するに用ひ、工業上甚だ重要なものなり。硫酸は硫黄と酸素と水素との化合物にして、これを製するには亞硫酸ガスを用ふ。

注意

稀硫酸を作るには耐熱性の容器例へばビーカーの如きものを用ひ、先づ水を入れ置き、その中に硝子棒に沿はせて濃硫酸をかき廻し乍ら注加し、冷却したる後に使用する。發熱甚しき時は二回に分けて注ぐをよしとす。

實驗(一)に於て硫酸の味を知らしむるには、その極めて淡きものを紙片に附着せしめて嘗めしむべし。

實驗(三)に於ては塩酸の課と同様の實驗を行ひてその發生する氣體の水素なることを知らしむべし。

硫酸の皮膚に附着したるときは直ちに水にて洗ひ去るべし。衣服などに附着したるときは先づ水にて洗ひ、然る後アンモニヤ水を附置くべし。

第九課 硝酸 (一時間)

要旨

酸の一例として硝酸を取り、塩酸・硫酸と比較してその性質・作用を教へ、並びにその用途及び製法に就いて教ふ。

本教材は酸の第三番目の教材である。前二教材とは取扱を異にし、前に教へた研究法を子供をして本材料に適用せしめるといふ様に應用教材的に取扱つてもよいであらう。硝酸は日常生活には使用する場が多くない。けれ共試薬其の他として用途の廣いものである。本教材で酸の通性をまとめることが大切である。教科書には製法成分にまで觸れてゐるけれ共、これを充分に子供に知らせることは容易ではな

五月

第七週 第一時

學習指導過程

- 一 硝酸を示して硝酸たることを教へ。硫酸塩酸とは成分を異にするれ共性質は大體等しいことを知らしめ、如何様に研究し比較するかを兒童に計劃せしめて教師が批評決定する。
- 二 見掛上の性質につき他の酸と比較せしめる。
- 三 酸性に就て實驗せしめる。
- 四 金屬との作用、有機質に對する作用を兒童に實驗せしめる。
- 五 製法用途に就て教へる。

いから省略してもよいと思ふ。

準備

濃き硝酸、發煙硝酸、濃き硫酸、金箔、銀箔、銅線、チリ硝石、セルロイド、青色の試験紙、白き毛織物又は毛絲の薄片。ピーカー。試験管、試験管立。アルコールランプ、マッチ、水、アルミニウム箔、ピンセット、木竹片、封蠟、綿火藥、セルロイド製品、人造絹絲、ニトロ化合物標本

教授事項

一、性質 硝酸(HNO₃)は無色の液體なり。(純粹なるもの)その濃きもの(局方のものは比重一・五三に)は烈しき臭あり、又往々黄色を帯ぶ。(發煙硝酸は鹽酸の如く多少發煙する。硝酸を日光に晒せば分解して器中の液の上に茶色の氣點發生する。)

實驗一) ピーカーに水(五〇)を入れて少量(二三滴)の濃き硝酸を注ぎ加へ、これを嘗むるに酸味あり。又これに青色の試験紙を浸すに試験紙は赤色に變ず。(他の酸と比較せしむべし、フェノールフタリン反應をも行ふべし。)これによりて硝酸は一の酸なることを知るべし。(硝酸を加熱すれば褐色の二酸化窒素の氣體と酸素とに分解される。これ硝酸の簡易鑑別に用ひられる。)

$$4\text{HNO}_3 = 2\text{H}_2\text{O} + 4\text{NO}_2 + \text{O}_2$$

二、作用

實驗二) 白き毛織物の小片(白色の毛絲屑、又は羽毛、毛髪を用ふるも可)に少量の濃き硝酸を附着せしむれば、その部分は黄色に變じ、遂には朽ちて容易に破るゝに至る。

硝酸は毛織物のみならず、動植物體に對して又かゝる烈しき働をなす。

六三種の酸の性質比較表を作らしめる。

實驗三) 金箔と銀箔と銅線(銅箔を用ふるも可)とを別々の試験管に入れ、これに濃き、硝酸を注ぐべし。金は少しも溶けざれども、銀・銅は泡を出して次第に溶け、赤茶色の氣體の出づるを見る。而して銅の溶けたる液體は青綠色なり。

かく硝酸は金を溶かさざれども、銀・銅などを溶かす。(この性を利用して金の鑑別に用ひられる。)硝酸がこれ等の金屬を溶かすときは、塩酸・硫酸が亜鉛・鐵などを溶かす場合と異なり、赤茶色の氣體を出す。

三、用途及び製法 硝酸はセルロイド(セルロイド製品、人造絹絲等を含む)・火藥(黒色火藥にあらず、無煙火藥、ダイナマイトを指す。硝酸の化合物をニトロ化合物といふ。)その他種々の物(硝類)を製するに用ひ、工業上の用途甚だ廣し。

實驗四) 試験管に少量のチリ硝石を入れ、これに濃き硫酸を注ぎ加へ、アルコールランプの火にて少しく熱すれば、烈しき臭ある白き煙を出す。青色の試験紙をこの煙に觸れしむれば試験紙は赤色に變ず。

これチリ硝石が硫酸の働によりて硝酸を生じ、硝酸が蒸氣となりて空氣中に出てたるによる。かくして生ずる蒸氣を冷して集むるときは硝酸を得。硝酸は窒素と酸素と水素との化合物なり。(其他電氣によつて空中の窒素を固定して製する方法があり、アンモニヤ酸化法もある。)

注意

復習(二時間)

五月

第七週 第二時

六月

第八週 第一時

六月

第八週 第二時

六月

第九週 第一時

實驗(一)に於て硝酸の味を知らしむるには、その極めて淡きものを紙片に附着せしめて嘗めしむべし。
實驗(二)は硝酸を附着せしめたる毛織物の乾くを待ち、その部分を破りてその朽ちたることを示すべし。
備考
濃き硝酸は初、無色のものにも、日光の爲に少しく分解して、黄色を帯ぶるに至る。

第十課 苛性ソーダ (二時間)

要旨

アルカリの一例として苛性ソーダを取り、その性質・作用・用途及び塩酸との中和に就いて教ふ。
苛性曹達といふ様な材料は子供の生活経験には殆んどない材料である。故に直ちにその性質の研究に入つても何等の興味もない。故に準備教材として石鹼液、又は炭酸曹達又は重曹が酸とは反對の反應ある藥品であることを實驗的に知らしめて、然る後に石鹼に含んでゐる洗濯に有效な物質の研究として苛性曹達を取扱つた方がよいと思ふ。

準備

苛性ソーダ、濃き塩酸、毛織物の小片、種油、青色及び赤色の試験紙、ピーカー、試験管、試験管立、ガラス棒、ピンセット、アルコールランプ、マッチ、水、コップ、フェノルフタリン、アルミニウム、毛絲片、稀塩酸、食塩電気分解装置、石鹼、アルコール

學習指導過程

第一時

一 石鹼の用途用法問答。

二 石鹼水の性質の兒童

實驗。

1 すべり

2 味

3 アルカリ性反應

4 脂をとかすこと

三 苛性曹達の見掛上の性質の研究。

四 溶液の性質の兒童實驗。

五 塩と性質の相違點を比較せしめる。

第二時

一 苛性曹達の性質問答復習、酸の性質との相違點の復習。

二 性質の異なる兩者を混合すれば如何なる性状のものを得るかといふ疑問を出發として中和實驗に導く。

三 中和の實驗。

四 食塩の成分教授。

教授事項

一、性質 苛性ソーダ(NaOH)は白色の固體なり。(普通非結晶の塊狀棒狀、粒狀をなせり。空中に放置すれば大氣中の濕氣をとりて潮解する。)

實驗(一) 試験管に苛性ソーダの小片を入れ、水を加へて振動かせば苛性ソーダは容易に水に溶く。(この時少し熱を伴ふ。)

かく苛性ソーダは水に溶け易きものなり。

實驗(二) ピーカーに水を入れて苛性ソーダの溶液を少しく加へ、これを嘗むるに一種の味あり。(極めて淡きもの)又別のピーカーに水を入れて、少量の濃き塩酸を加へ、その中に青色の試験紙を浸して赤色となし、これを水にて洗ひ、苛性ソーダの淡き溶液に浸すに試験紙は再び青色に變ず。(直ちに赤色試験紙を用ひるより) (も、この方法によるをよしとす。)

かく苛性ソーダの水に溶けたるものは酸と異なる一種の味あり。又酸と反對に赤色の試験紙を青色に變ず。かゝる性質をアルカリ性といふ。(フェノルフタリンを用ふれば紅色となる。反應甚だ敏明瞭である。)

二、塩酸との中和

實驗(三) ピーカーに苛性ソーダの淡き溶液(約二倍)を三分の一程入れ、その中に青色の試験紙を浸し、(フェノルフタリ)絶えずかき廻しながら、淡き塩酸(十倍)を徐々に加ふるに、塩酸の量少き間は、試験紙の色初の如く青色なれども、その量少しく多きに過ぐるときは忽ち赤色

五、食塩を分解すれば苛性曹達を得ることの教師實驗。
六、苛性曹達の製法及び工業的用途の教授。

に變ず。このとき更に苛性ソーダの淡き溶液を少しく加へ、その量適當なるときは青色及び赤色の試験紙の何れを浸すも、その色變ぜず。

かく苛性ソーダと塩酸とを適度に混ざるときは、試験紙の色を變ずる性質を失ふ。(これに用は稀塩酸と約等量に混合したる時に中和點を得る位になし置けば便利である。)

實驗四 實驗三にて得たる液を嘗むるに苛性ソーダの味も塩酸の味もなく、塩と同じ鹹味あり。(中和點を容易に求めるには溶液は淡き方が容易である。あるが、味を實驗せしむるには濃い方がよい。)

これ苛性ソーダと塩酸とを混ざるときは、單に相混りて存在するに在らずして新に塩を生ずるによる。塩の水に溶けたるものは試験紙の色を變ずる性質なきこと水に同じ。(厳密に言の溶液は酸、アルカリ何れにもあらざることを比較せしむべし。)

三、作用

實驗五 試験管に苛性ソーダの小片を入れ、少量の水を加へて濃き溶液となし、その中に毛織物の小片を浸し、(白き毛絨、羽毛を用ひるもよし。)アルコールランプの火にて熱するに、(飛び出さざる様注意。)毛織物は遂に爛れ崩る。(又は全く形がなくなる。)

苛性ソーダは毛織物のみならず、動植物體に對して又かゝる烈しき働をなす。(苛性曹達の液を指頭につけて相互に摩すれば著しき滑りを感じる。これも指頭部の皮膚に作用せるためなり。)

實驗六 試験管に水と少量の種油とを入れ、拇指にて試験管の口を閉ぢて烈しく振動かすときは全體に白く濁れども、暫く静置すれば種油は分れて水面に浮ぶ。然るに苛性ソーダの溶液を少しくこれに加へ、烈しく振動かすときは全體に乳の如く白く濁り、静置するも種油は容易に分れず。

これ種油が苛性ソーダの爲に極めて細かく分れて水中に漂ふによる。苛性ソーダは種油のみならず、動植物の油を乳の如く白く濁らす働あり。(燈心又は細帯等に種油を浸ませ、同前の實驗を近せしめた實驗方法である。)

四、用途 普通の石鹼は動植物の油と苛性ソーダとを用ひて製す。苛性ソーダは石鹼(石鹼の加水分解によつて少量宛生ずる游離苛性曹達)の製造に用ふるのみならず、その他工業上の用途(石油の製造、精製、ルケットの製造等)甚だ多し。苛性ソーダは塩を用ひて製す。(食塩を電氣分解する法、曹達を灰を苛性化する法等あり。)

注意

實驗二に於て苛性ソーダの味を知らしむるには、その極めて淡き溶液を紙片に附着せしめて嘗めしむべし。

實驗三は苛性ソーダを二十倍餘の水に溶かしたるものと濃き塩酸を十倍餘の水にて淡くしたるものにて行へば、凡そ同體積にて中和し、海水程の鹹さの塩水を生じ、操作及び觀察に便なり。又この實驗の終に於て追加する苛性ソーダの溶液は更に淡くしたるものを用ひ、これを一滴づつ注意して加ふべし。